市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田　畑　遺　跡

2000年3月

出　雲　市　教　育　委　員　会

田畑遺跡報告書正誤表

頁	行	図	誤	正
78	15	－	残りの2点は	残りの3点は
79	17	－	123-2は備前焼の壷で、16世紀のものである。	削除
79	17	－	123-3は皿であるが、	123-2は皿であるが、
79	18	－	123-4は時期は不明であるが、	123-3は時期は不明であるが、
79	18	－	123-5は唐津焼きの皿で	123-4は唐津焼の皿で
95	11	－	145-7の終末期の甕は	145-8の終末期の甕は
99	－	150	番号誤植 4, 2, 5, 3	下記のとおり訂正 4→2, 2→3, 5→4, 3→5
142	－	213	4の拓影不要	4の拓影を消去
145	－	222	標高の写植無し	「9.00m」の写植を入れる
147	－	225	標高の写植無し	「9.00m」の写植を入れる
149	16	－	228-1～228-3は	228-1・228-2は
149	16	－	228-4～228-6は	228-3～228-6は

市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田　畑　遺　跡

2000年3月

出　雲　市　教　育　委　員　会

序

このたび、市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う田畑遺跡発掘調査を実施しましたところ、中世の土坑、弥生時代の溝など多数の遺構や、これらに伴う土器片などが出土しました。

田畑遺跡は古志遺跡群を形成する遺跡のひとつであり、近年の発掘調査で付近の古代像が明らかになりつつあります。今回の調査成果が、さらなるこの地域の歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成12年(2000)3月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　　言

1．　本書は出雲市（道路河川課）の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成9年度から平成10年度にかけて実施した、市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う田畑遺跡発掘調査の記録である。

2．　発掘調査を行った遺跡と地番は次のとおりである。

田畑遺跡（出雲市遺跡地図N09）

1区:古志町1066番地3外、2: 下古志町670外、3区:下古志町677番地1外、4区:下古志町709番地1、5区:下古志町1089番地3外、6区:下古志町1095番地1

3．　発掘調査は、平成10年（1998）1月19日に着手し、平成10年（1998）9月30日に終了した。

4．　調査組織は次のとおりである。

調査主体　　出雲市教育委員会
事務局　　後藤政司（出雲市教育委員会　文化振興課長）
調査指導　　田中義昭（元島根大学法文学部教授）
　　岩橋孝典（島根県教育委員会　文化財課　主事）
調査担当者　三原一将（出雲市教育委員会　文化振興課　副主任主事）
　　園山　薫（出雲市教育委員会　文化振興課　嘱託員）
調査補助員　今岡司郎、羽木伸幸、永田貴子、伊藤めぐみ（文化振興課　臨時職員）

5．　本書の執筆・編集は三原が行った。

6．　遺構の略称記号は、次のとおりである。

SK：土坑　P：柱穴　SD：溝状遺構　SX：その他の遺構

＊但し、柱穴の数字上二桁は所在グリッドを示す。

7．　本書で使用した方位は真北を示す。

8．　遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋はL380mm×W260mmのものである。

9．　発掘調査、遺物整理の全般にわたり、田中義昭氏から有益なご助言をいただいた。

10．　発掘調査、遺物整理、報告書作成等については、次の方々の協力を得た。

発掘調査　　吾郷　栄、安食　勉、池内宏史、石飛富美江、板倉セツ子、岡　省吉、岡　久男、鎌田　悟、神田鶴子、小玉順子、曽田早苗、高根常代、滝　彩子、長島節子、西村誠治、原　郁子、前島正喜、山根幸枝、吉田　栄、渡部政義、吉田貴俊
遺物実測　　井上喜代女、村田理恵、山本敦子、山本春香、佐々木知子、浅野智子、竹田章乃ほか
遺物整理　　小村睦子、川谷真弓、園山美千代、吹野初子、荒木恵理子、飯國陽子

11．　出土遺物の写真撮影は三原が行った。

12．　本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次
表目次
写真図版目次

第１章　位置と環境 …… 1
第２章　田畑遺跡の調査・研究小史 …… 3
第３章　調査の経緯と概要 …… 4
第４章　調査の結果
　１.１区の調査結果 …… 7
　２.２区の調査結果 …… 49
　３.３区の調査結果 …… 81
　４.４区の調査結果 …… 101
　５.５区の調査結果 …… 119
　６.６区の調査結果 …… 135
第５章　まとめ …… 152
　引用・参考文献一覧 …… 153

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１章　位置と環境

第１図　田畑遺跡周辺の主要遺跡(75,000) ･･･ 2

第３章　調査の経緯と概要

第２図　田畑遺跡調査区配置図(1:1,500) ･･ 5･6

第４章　調査の結果

１．１区の調査結果

第３図　田畑遺跡１区遺構配置図１(1:50) ･･ 8･9
第４図　田畑遺跡１区遺構配置図２(1:50) 10～12
第５図　ＳＩ01実測図(1:40) ･････････････ 13
第６図　ＳＩ01出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 14
第７図　ＳＫ02実測図(1:30) ･････････････ 14
第８図　ＳＫ02出土土師器実測図(1:3) ････ 14
第９図　ＳＫ05実測図(1:30) ･････････････ 15
第10図　ＳＫ05出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 15
第11図　ＳＫ09実測図(1:30) ･････････････ 16
第12図　ＳＫ09出土土器実測図(1:3) ･･････ 16
第13図　ＳＫ10実測図(1:30) ･････････････ 17
第14図　ＳＫ10出土土器実測図(1:3) ･･････ 17
第15図　ＳＫ12実測図(1:30) ･････････････ 17
第16図　ＳＫ12出土須恵器･土製品実測図(1:3)　17
第17図　ＳＫ13実測図(1:30) ･････････････ 18
第18図　ＳＫ13出土土器実測図(1:3) ･･････ 18
第19図　ＳＫ14実測図(1:3) ･･････････････ 18
第20図　ＳＫ14出土土器実測図(1:3) ･･････ 19
第21図　ＳＫ14出土石製品実測図(1:2) ････ 20
第22図　ＳＫ15実測図(1:30) ･････････････ 20
第23図　ＳＫ15出土土器実測図(1:3) ･･････ 20
第24図　ＳＫ16実測図(1:30) ･････････････ 21
第25図　ＳＫ16出土土器実測図(1:3) ･･････ 21
第26図　ＳＫ17実測図(1:30) ･････････････ 21
第27図　ＳＫ17出土土器実測図(1:3) ･･････ 22
第28図　ＳＫ18実測図(1:30) ･････････････ 22
第29図　ＳＫ18出土須恵器実測図(1:3) ････ 22
第30図　ＳＫ19実測図(1:30) ･････････････ 22
第31図　ＳＫ19出土土器実測図１(1:3) ････ 23
第32図　ＳＫ19出土土器実測図２(1:7) ････ 23
第33図　ＳＫ24実測図(1:30) ･････････････ 24
第34図　ＳＫ24出土土師器実測図(1:3) ････ 24
第35図　ＳＫ25実測図(1:30) ･････････････ 24
第36図　ＳＫ25出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 24
第37図　ＳＫ26実測図(1:30) ･････････････ 25
第38図　ＳＫ26出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 26
第39図　ＳＫ26出土石製品実測図(1:2) ････ 26
第40図　ＳＫ27実測図(1:30) ･････････････ 26
第41図　ＳＫ27出土土器実測図(1:3) ･･････ 26
第42図　ＳＫ28実測図(1:30) ･････････････ 27
第43図　ＳＫ28出土土師器実測図(1:3) ････ 27
第44図　ＳＫ32・ＳＫ33実測図(1:30) ･････ 27
第45図　ＳＫ32出土陶器実測図(1:3) ･･････ 27
第46図　ＳＫ33出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 28
第47図　ＳＫ33出土石製品実測図(1:2) ････ 28
第48図　ＳＫ34実測図(1:30) ･････････････ 29
第49図　ＳＫ34出土土器･土製品実測図(1:3)　29
第50図　主要ピット実測図(1:30) ･････････ 31
第51図　主要ピット出土土器実測図(1:3) ･･ 32
第52図　ＳＤ01･ＳＤ02実測図(1:30) ･･････ 33
第53図　ＳＤ01出土弥生土器実測図(1:3) ･･ 34
第54図　ＳＤ02出土須恵器実測図(1:3) ････ 34
第55図　ＳＤ05実測図(1:30) ･････････････ 35
第56図　ＳＤ05出土土器実測図(1:3) ･･････ 35
第57図　ＳＤ06実測図(1:30) ･････････････ 35
第58図　ＳＤ06出土土器等実測図(1:3) ････ 35
第59図　ＳＤ06出土石製品実測図(1:2) ････ 36
第60図　ＳＤ11実測図(1:30) ･････････････ 36
第61図　ＳＤ11出土土師器実測図(1:3) ････ 36
第62図　ＳＤ12実測図(1:30) ･････････････ 37
第63図　ＳＤ12出土土師器実測図(1:3) ････ 38
第64図　ＳＤ14実測図(1:30) ･････････････ 38
第65図　ＳＤ14出土土器実測図(1:3) ･･････ 39
第66図　ＳＤ19実測図(1:30) ･････････････ 39
第67図　ＳＤ19出土土器･土製品実測図(1:3)　40
第68図　ＳＸ02実測図(1:30) ･････････････ 41
第69図　ＳＸ02出土土器実測図(1:3) ･･････ 41
第70図　１区遺構外出土弥生土器実測図１(1:3)　42
第71図　１区遺構外出土弥生土器実測図２(1:3)　43
第72図　１区遺構外出土土師器実測図１(1:3)　44

第73図　1区遺構外出土土師器実測図2（1:3）45
第74図　1区遺構外出土土師器実測図3（1:3）46
第75図　1区遺構外出土須恵器実測図（1:3）47
第76図　1区遺構外出土製塩土器・土製品実測図(1:3)　48
第77図　1区遺構外出土陶磁器実測図(1:3)　48
第78図　1区遺構外出土石製品実測図(1:2)　48

2．2区の調査結果

第79図　田畑遺跡2区遺構配置図1（1:50）50・51
第80図　田畑遺跡2区遺構配置図2（1:50）52・53
第81図　田畑遺跡2区遺構配置図3（1:50）54・55
第82図　田畑遺跡2区遺構配置図4（1:50）56～58
第83図　SK04実測図（1:30）…… 59
第84図　SK04出土土器実測図（1:3）…… 59
第85図　SK18実測図（1:30）…… 59
第86図　SK18出土土師器実測図（1:3）…… 60
第87図　SK18出土石製品実測図（1:2）…… 60
第88図　SK19実測図（1:30）…… 61
第89図　SK19出土土師器実測図（1:3）…… 61
第90図　SK19出土石製器実測図（1:2）…… 62
第91図　SK21実測図（1:30）…… 63
第92図　SK21出土土師器実測図（1:3）…… 63
第93図　SK22実測図（1:30）…… 63
第94図　SK22出土土師器実測図（1:3）…… 63
第95図　SK23実測図（1:30）…… 64
第96図　SK23出土土師器実測図（1:3）…… 64
第97図　SK25実測図（1:30）…… 65
第98図　SK25出土土師器実測図（1:3）…… 65
第99図　SK27実測図（1:30）…… 65
第100図　SK27出土陶磁器実測図（1:3）…… 65
第101図　SK28実測図（1:30）…… 66
第102図　SK28出土土師器実測図（1:3）…… 66
第103図　SK30実測図（1:30）…… 66
第104図　SK30出土土師器実測図（1:3）…… 66
第105図　SK32実測図（1:30）…… 67
第106図　SK32出土土器実測図 …… 67
第107図　その他の主要土坑実測図（1:30）… 68
第108図　その他の主要土坑出土土器実測図(1:3)　69
第109図　SK17出土古銭拓影（1:1）…… 69
第110図　主要ピット実測図（1:30）…… 71
第111図　主要ピット出土土師器等実測図（1:3）・72
第112図　P1017出土古銭拓影（1:1）…… 73
第113図　SD01出土土器等実測図（1:3）…… 73
第114図　SD02出土土器実測図（1:3）…… 74
第115図　SD04出土土器等実測図（1:3）…… 74
第116図　SD04出土石製品実測図（1:2）…… 75
第117図　SD05出土土師器実測図（1:3）…… 75
第118図　SD06・SD07エレベーション図(1:50)　76
第119図　SD06出土弥生土器等実測図(1:3)　76
第120図　SD07出土弥生土器等実測図(1:3)　77
第121図　2区遺構外出土弥生土器等実測図(1:3)　78
第122図　2区遺構外出土土師器実測図(1:3)　79
第123図　2区遺構外出土陶磁器等実測図(1:3)　80

3．3区の調査結果

第124図　田畑遺跡3区遺構配置図1（1:50）・82・83
第125図　田畑遺跡3区遺構配置図2（1:50）・84～86
第126図　SK01実測図（1:30）…… 87
第127図　SK01出土弥生土器実測図（1:3）・88
第128図　SK01出土石製品実測図（1:2）…… 87
第129図　SK05実測図（1:30）…… 87
第130図　SK05出土陶磁器等実測図（1:3）・89
第131図　SK06実測図（1:30）…… 90
第132図　SK06出土鉄製品実測図（1:2）…… 90
第133図　SK08実測図（1:30）…… 90
第134図　SK08出土陶器実測図（1:3）…… 90
第135図　SK17実測図（1:30）…… 90
第136図　SK17出土弥生土器実測図（1:3）・90
第137図　主要ピット実測図（1:30）…… 91
第138図　主要ピット出土陶磁器等実測図(1:3)　92
第139図　P0302出土鉄製品実測図（1:2）…… 91
第140図　SD01出土弥生土器実測図(1:3)・・93
第141図　SD01出土石製品実測図（1:2）…… 93
第142図　SD02実測図（1:30）…… 94
第143図　SD02出土陶磁器実測図（1:3）…… 95
第144図　SD03出土弥生土器実測図（1:3）・94
第145図　SD04出土弥生土器実測図（1:3）・96
第146図　SD04出土石製品実測図（1:2）…… 97
第147図　SD06実測図（1:30）…… 97
第148図　SD06出土弥生土器実測図（1:3）・98
第149図　SD07断面図（1:30）…… 98
第150図　SD07出土弥生土器実測図（1:3）・99
第151図　3区遺構外出土弥生土器等実測図(1:3)・99
第152図　3区遺構外出土鉄製品実測図(1:2)・100

第153図　３区遺構外出土古銭拓影（1:1）… 100

５．５区の調査結果

４．４区の調査結果

第154図　田畑遺跡４区遺構配置図１（1:50）102・103
第155図　田畑遺跡４区遺構配置図２（1:50）104～106
第156図　ＳＢ01実測図（1:50）…… 107
第157図　ＳＢ02実測図（1:50）…… 108
第158図　ＳＫ05実測図（1:30）…… 108
第159図　ＳＫ05出土弥生土器実測図（1:3）・109
第160図　ＳＫ09実測図（1:30）…… 109
第161図　ＳＫ09出土古銭拓影（1:1）…… 110
第162図　ＳＫ10実測図（1:3）…… 110
第163図　ＳＫ10出土土師器実測図（1:3）… 110
第164図　ＳＫ11実測図（1:30）…… 110
第165図　ＳＫ11出土弥生土器実測図（1:3）・110
第166図　ＳＫ17実測図（1:30）…… 111
第167図　ＳＫ17出土管玉実測図（1:1）…… 111
第168図　ＳＫ17出土弥生土器実測図（1:3）・111
第169図　ＳＫ19実測図（1:30）…… 111
第170図　ＳＫ19出土土器実測図（1:3）…… 111
第171図　ＳＫ28実測図（1:30）…… 112
第172図　ＳＫ28出土土器実測図（1:3）…… 112
第173図　ＳＫ34実測図（1:30）…… 112
第174図　ＳＫ34出土弥生土器実測図（1:3）・112
第175図　ＳＫ37実測図（1:40）…… 113
第176図　ＳＫ37出土陶磁器実測図（1:3）… 113
第177図　ＳＫ38実測図（1:30）…… 113
第178図　ＳＫ38出土弥生土器実測図（1:3）・113
第179図　主要ピット実測図（1:30）…… 114
第180図　主要ピット出土弥生土器実測図（1:3）・114
第181図　ＳＤ01実測図（1:30）…… 115
第182図　ＳＤ01出土弥生土器実測図（1:3）・115
第183図　ＳＤ11実測図（1:40）…… 116
第184図　ＳＤ11出土墨書土師器等実測図（1:3）・116
第185図　４区遺構外出土弥生土器等実測図（1:3）・117
第186図　４区遺構外出土石製品実測図（1:3）・117
第187図　４区遺構外出土鉄製品実測図（1:2）・118
第188図　田畑遺跡５区遺構配置図１（1:50）120・121
第189図　田畑遺跡５区遺構配置図２（1:50）122・123
第190図　田畑遺跡５区遺構配置図３（1:50）124～126
第191図　ＳＫ03実測図（1:30）…… 127
第192図　ＳＫ03出土土器実測図（1:3）…… 128
第193図　ＳＫ03出土鉄製品実測図（1:2）… 129
第194図　ＳＫ01・ＳＫ02実測図（1:30）……129
第195図　ＳＫ01出土弥生土器実測図（1:3）・129
第196図　ＳＫ02出土弥生土器実測図（1:3）‥130
第197図　ＳＫ05実測図（1:30）…… 130
第198図　ＳＫ05出土土師器実測図（1:3）… 130
第199図　ＳＫ08実測図（1:30）…… 130
第200図　ＳＫ08出土弥生土器実測図（1:3）・131
第201図　ＳＫ16実測図（1:30）…… 131
第202図　ＳＫ16出土弥生土器実測図（1:3）・131
第203図　Ｐ0202実測図（1:30）…… 132
第204図　Ｐ0202出土弥生土器実測図（1:3）・132
第205図　ＳＤ09出土土器実測図（1:3）…… 132
第206図　ＳＤ15実測図（1:30）…… 133
第207図　ＳＤ15出土土器実測図（1:3）…… 133
第208図　５区遺構外出土土器実測図（1:3）・134

６．６区の調査結果

第209図　田畑遺跡６区遺構配置図１（1:50）136・137
第210図　田畑遺跡６区遺構配置図２（1:50）138～140
第211図　ＳＢ01実測図（1:50）…… 141
第212図　ＳＥ01実測図（1:30）…… 141
第213図　ＳＥ01出土土器実測図（1:3）…… 142
第214図　ＳＫ04実測図（1:30）…… 142
第215図　ＳＫ04出土弥生土器実測図（1:3）・143
第216図　ＳＫ06実測図（1:30）…… 143
第217図　ＳＫ06出土須恵器実測図（1:3）… 143
第218図　ＳＫ09実測図（1:30）…… 144
第219図　ＳＫ09出土土師器実測図（1:3）… 144
第220図　ＳＫ19実測図（1:30）…… 144
第221図　ＳＫ19出土土師器実測図（1:3）… 144
第222図　ＳＤ02実測図（1:40）…… 145
第223図　ＳＤ02出土土器等実測図（1:3）… 146
第224図　ＳＤ07出土陶器実測図（1:3）…… 146
第225図　ＳＤ08実測図（1:30）…… 147
第226図　ＳＤ08出土弥生土器等実測図（1:3）・148
第227図　ＳＤ10実測図（1:30）…… 149
第228図　ＳＤ10出土弥生土器等実測図（1:3）・150
第229図　６区遺構外出土土器・土製品実測図（1:3）151

表 目 次

表１　田畑遺跡１区基準杭座標一覧 …… 7
表２　田畑遺跡２区基準杭座標一覧 …… 49
表３　田畑遺跡３区基準杭座標一覧 …… 81
表４　田畑遺跡４区基準杭座標一覧 …… 101
表５　田畑遺跡５区基準杭座標一覧 …… 119
表６　田畑遺跡６区基準杭座標一覧 …… 135

写 真 図 版 目 次

図版１－１　１区調査風景（西から）
2　ＳＩ01調査状況（南東から）
3　ＳＫ05調査状況（北西から）
図版２－１　ＳＫ05完掘状況（北西から）
2　ＳＫ10調査状況（北から）
3　ＳＫ14調査状況（東から）
4　ＳＫ19調査状況（南西から）
5　ＳＫ19調査状況（南東から）
6　ＳＫ19調査状況（北西から）
図版３－１　ＳＫ25調査状況（北西から）
2　ＳＫ26検出状況（北東から）
3　ＳＫ32調査状況（北西から）
4　ＳＤ01・ＳＤ02完掘状況（南東から）
5　ＳＤ06調査状況（北西から）
6　ＳＤ19調査区北壁断面（南東から）
図版４－１　ＳＫ05出土弥生土器
2　ＳＫ05出土弥生土器
3　ＳＫ02･ＳＫ15･ＳＫ19出土土師器
4　ＳＫ14出土土師器・石製品
5　ＳＫ19出土須恵器
6　ＳＫ25出土弥生土器
図版５－１　ＳＫ26出土弥生土器・石製品
2　ＳＫ27出土土器
3　ＳＫ33出土弥生土器
4　ＳＫ33出土石製品
5　ＳＫ34出土土師器・土製品
6　ＳＤ01出土弥生土器
図版６－１　ＳＤ14出土土器
2　ＳＤ19出土土器・土製品
3　１区遺構外出土弥生土器
4　１区遺構外出土土師器
5　１区遺構外出土須恵器
6　１区遺構外出土土製品・陶磁器・石製品
図版７－１　ＳＫ18調査状況（北から）
2　ＳＫ27検出状況（北西から）
3　ＳＤ01調査状況（南西から）
4　ＳＤ０２完掘状況（北東から）
5　ＳＤ04調査状況（南西から）
6　ＳＤ06土器(119－１)出土状況(北西から)
図版８－１　ＳＤ06・ＳＤ07調査状況(南西から)
2　ＳＫ04出土土器
3　ＳＫ18出土土師器
図版９－１　ＳＫ25出土土師器
2　ＳＫ27出土陶磁器
3　主要ピット出土土師器等
4　ＳＤ01出土土器等
5　ＳＤ02出土土器
6　ＳＤ04出土土器等
図版10－１　ＳＤ06出土土器
2　ＳＤ06出土弥生土器等
3　ＳＤ07出土弥生土器等
4　２区遺構外出土弥生土器等
5　２区遺構外出土土師器
6　２区遺構外出土陶磁器等

図版11－1　３区調査風景（北東から）
2　ＳＫ01調査状況（南東から）
3　ＳＤ02調査状況（南東から）
図版12－1　ＳＤ01調査状況（北東から）
2　ＳＤ03完掘状況（北東から）
3　ＳＤ04・ＳＤ06・ＳＤ07調査状況(南西から)
4　ＳＫ01出土弥生土器
図版13－1　ＳＫ01出土弥生土器
2　ＳＫ05出土陶器
3　ＳＫ05出土陶磁器
4　ＳＫ06・Ｐ0302出土鉄製品
5　主要ピット出土陶磁器等
6　ＳＤ01出土弥生土器・石製品
図版14－1　ＳＤ02出土陶磁器
2　ＳＤ04出土弥生土器
3　ＳＤ06出土弥生土器
4　ＳＤ07出土弥生土器
5　３区遺構外出土弥生土器等
6　３区遺構外出土鉄製品
図版15－1　４区全景（南西から）
2　ＳＫ05調査状況（北西から）
3　ＳＫ09調査状況（南西から）
図版16－1　ＳＫ10調査状況（南東から）
2　ＳＫ37調査状況（北東から）
3　ＳＫ28・ＳＫ38検出状況（南西から）
4　ＳＢ01検出状況（南から）
図版17－1　ＳＢ02調査状況（北から）
2　ＳＫ05出土弥生土器
3　ＳＫ19・ＳＫ28出土土器
4　主要ピット出土弥生土器
5　ＳＤ01出土墨書土師器等
6　４区遺構外出土遺物
図版18－1　５区全景（北東から）
2　ＳＫ03調査状況（北西から）
3　ＳＫ03完掘状況（北西から）
図版19－1　ＳＫ01・ＳＫ02調査状況（西から）
2　ＳＫ08調査状況（北から）
3　Ｐ0202調査状況（南西から）
4　ＳＤ09調査状況（西から）
5　ＳＤ15調査状況（東から）
図版20－1　ＳＫ03出土土器
2　ＳＫ03出土鉄製品
3　ＳＫ01・ＳＫ02出土弥生土器
4　ＳＫ08・ＳＫ16出土弥生土器
5　Ｐ0202・ＳＤ09出土土器
6　ＳＤ15・５区遺構外出土土器
図版21－1　６区調査風景（南西から）
2　ＳＥ01調査状況（北西から）
3　ＳＥ01完掘状況（北西から）
図版22－1　ＳＫ04調査状況（北東から）
2　ＳＢ01・ＳＫ16等完掘状況（北東から）
3　ＳＤ02調査状況（北西から）
4　ＳＤ08調査状況（北から）
5　ＳＤ10土器(228－５・228－６)
出土状況（北東から）
図版23－1　ＳＤ10完掘状況（南西から）
2　６区調査風景（北東から）
3　６区遺構外土製品(229－11)出土状況(北から)
4　ＳＥ01出土土師器
5　ＳＫ04出土弥生土器
図版24－1　ＳＤ02出土土器等
2　ＳＤ07出土陶器
3　ＳＤ08出土弥生土器等
4　ＳＤ10出土弥生土器等
5　ＳＤ10出土土器
6　６区遺構外出土土器・土製品

第1章　位置と環境

田畑遺跡は出雲平野の南丘陵寄り、神戸川左岸に位置しており、古志本郷遺跡、下古志遺跡などとともに古志遺跡群を形成する遺跡のひとつである。南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海によって囲繞された出雲平野は、中国山地に源流を辿り、ともに日本海に注いでいた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。沖積作用が開始されたのは約3600年前頃と考えられており、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは、古宍道湖湾が占めていたと推定されている。したがって、遺跡が出現する箇所は出雲平野形成と密接に関わっていると考えられる。以下古代の出雲平野の集落の消長について概観しておく。なお、現在斐伊川は日本海に、神戸川は宍道湖に注いでいる。

縄文時代の出雲平野は古宍道湖湾が占めていたため、遺跡の出現は山麓付近などに限られていたようである。早期末の遺跡としては、上長浜貝塚、菱根遺跡があげられる。後・晩期の遺跡としては、以前から矢野遺跡、出雲大社境内遺跡が知られていたが、近年の調査で蔵小路西遺跡、三田谷遺跡Ⅰ遺跡などで、この時期の遺物が確認されている。

弥生時代前期の遺跡としては、矢野遺跡、原山遺跡などがあげられる。弥生時代中期からは神門水海の汀線付近に、天神、四絡、古志遺跡群などの大規模な集落が出現する。近年の調査では、天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡で環濠と考えられる大溝の検出が相次いでおり、出雲平野においても環濠を配した集落形態が広く採用されていたと考えられる。これらの遺跡を背景に、弥生時代後期にはこの地の首長を葬ったとされる西谷3号墓など6基の四隅突出型墳丘墓を含む、西谷墳墓群が平野の南丘陵上に築造されるに至る。

古墳時代前期・中期には集落跡はほとんど確認されていない。この時期の古墳として、大寺古墳、山地古墳などが知られているものの、その数は少ない。集落が衰退傾向にあったと推定される。しかし、後期後半以降には、島根県内では最大級の石室を有する今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳を筆頭に多数の古墳が築造され、上塩冶横穴墓群に代表される横穴墓群が飛躍的に増える。

奈良時代以降のこの地の様子は、733年に編纂された『出雲国風土記』で辿れるほか、近年の調査でも新発見が相次いでいる。光明寺3号墓では石櫃が検出され、既知の小坂古墳や朝山古墓とともに、この地の初期火葬墓の解明に進展をみせつつある。また、古志本郷遺跡では官衙跡と推定される大型の掘立柱建物跡が確認され、神門郡家との関連が注目されている。また、蔵小路西遺跡からは、周囲を濠で囲繞した約1ヘクタールの規模を有する館跡が発見され、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている。

これら相次ぐ発掘調査の成果から、出雲平野の古代像は、今後ますますその姿を顕わにしていくことが期待されている。

第１図　田畑遺跡周辺の主要遺跡（1：75,000）

1. 田畑遺跡　2. 下古志遺跡　3. 古志本郷遺跡　4. 宝塚古墳　5. 妙蓮寺山古墳　6. 放れ山古墳　7. 地蔵堂横穴墓群　8. 知井宮多聞院遺跡　9. 井上横穴墓群　10. 神門横穴墓群　11. 浅柄遺跡　12. 山地古墳　13. 北光寺古墳　14. 高浜Ⅰ遺跡　15. 高浜Ⅱ遺跡　16. 里方八石原遺跡　17. 里方別所遺跡　18. 山持川川岸遺跡　19. 高岡遺跡　20. 稲岡遺跡　21. 小山遺跡第１地点　22. 小山遺跡第２地点　23. 小山遺跡第３地点　24. 矢野遺跡　25. 大塚遺跡　26. 白枝荒神遺跡　27. 渡橋沖遺跡　28. 姫原西遺跡　29. 蔵小路西遺跡　30. 上長浜貝塚　31. 大寺古墳　32. 斐伊川鉄橋遺跡　33. 塚山古墳　34. 今市大念寺古墳　35. 天神遺跡　36. 高西遺跡　37. 藤ヶ森南遺跡　38. 藤ヶ森遺跡Ⅰ地点　39. 藤ヶ森遺跡Ⅱ地点　40. 善行寺遺跡　41. 角田遺跡　42. 大廻城跡（向山城）　43. 西谷墳墓群　44. 弓原遺跡　45. 神門寺境内廃寺　46. 宮松遺跡　47. 上塩冶築山古墳　48. 築山遺跡　49. 上塩冶地蔵山古墳　50. 半分城跡　51. 大井谷城跡　52. 上塩冶横穴墓群　53. 三田谷Ⅰ遺跡　54. 三田谷Ⅱ、Ⅲ遺跡　55. 光明寺３号墓　56. 出雲大社境内遺跡　57. 原山遺跡　58. 菱根遺跡

第２章　田畑遺跡の調査・研究小史

田畑遺跡は1972年の神西神門地区田圃整理工事に伴う幅2mに及ぶ水路掘削の際に、西尾克己氏によって遺構や遺物が確認されその存在が明らかとなった。この事実は1973年に東森市良氏による遺跡破壊の危機について問題提起を行う趣旨の報告に際し、事例として取り上げられた。これによると幅1m、深さ50cm程度のピット7～8基が掘削断面に観察され、そのピット周辺から弥生土器片数点及び石包丁状の石器が採取されたとみられる。東森氏は遺物の時期について「弥生時代中期後半のごく限られた時期のもの」としている。

1980年に東森・西尾の両氏がとともに出雲平野の原始・古代遺跡を総覧した際にも、再び先の出土遺物が取り上げられており、時期については「弥生時代中期中葉」とし、田畑遺跡について「神戸川西岸における集落を知る上で貴重な遺跡」と述べている。

1987年には1984年と翌'85年の荒神谷遺跡における大量青銅器発見を契機に、出雲平野の一帯に分布する集落遺跡の実相を正確に把握して、集落群のグルーピングとその変遷過程を明らかにする目的で、出雲平野集落遺跡研究会を中心に、主として神戸川の両岸と旧斐伊川筋の踏査が行われ、田畑遺跡では弥生時代中期中葉及び古墳時代後期以降の土器片が採取されたようである。なお、同会は田畑遺跡の出現期を「弥生時代中期中葉段階」としている。

1989年には出雲平野に散在する集落遺跡の分布状況とそれらの消長過程、相互関係をトータルに把握すること、とりわけ田畑遺跡と同じ自然堤防状上に占地する古志本郷遺跡、知井宮多聞院遺跡などとの集落の相互関係を明らかにすることを重要視し、再び西尾氏採集の出土遺物が田中・宮本両氏により取り上げられ、編年上の位置づけが試みられた。その結果、一部のものは「弥生時代中期中葉の新段階にさかのぼる要素も残している」としながらも「田畑遺跡出土土器の編年上の位置は弥生時代中期後葉に比定することができる」と述べている。

以上は主に出土遺物についての研究史であったが、遺構については1988年に出雲市教育委員会が神門地区遺跡詳細分布調査において、発掘調査実施しているのでそれについて触れたい。

この調査では田畑遺跡内に4ヶ所トレンチを設置し発掘調査を行っている。主な検出遺構は第1トレンチで検出された溝状遺構で、環溝の可能性を指摘しており、弥生時代中期の土器が出土したとのことである。また、同時期と考えられる竪穴住居跡が第3トレンチで検出されており、遺構内から石鋸、石鏃、黒曜石、瑪瑙が出土しており、玉作が行われていた可能性が強いという。これらのほかに、土師器、須恵器、中世陶器、土師質土器などが出土していることから、長期にわたる集落造営が推定されている。

第3章　調査の経緯と概要

平成9年(1993)7月3日付けで、出雲市長（道路河川課）より、市道浅柄古志線歩道設置予定地の試掘調査依頼があった。工事予定地は周知の遺跡である田畑遺跡の範囲内及びその付近であったため、平成9年7月23日、24日の2日間にわたり出雲市教育委員会が現地の試掘調査を実施した。その結果、工事予定地の大部分が埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。調査対象となる工事予定地は約1800㎡あり、これを便宜上1区～6区の6区間に分け、調査班を2班設置し調査を実施した。いずれの調査区も遺構に影響のない深さまで重機により表土掘削を行い、さらに下位については手掘りで調査を進めた。

1区の調査は、第1班が平成10年(1998)1月19日から3月30日まで実施した。調査区の長さは92mを測るが、幅は1.5m～3mである。調査区北壁際の同一直線上に5m間隔で19本の基準杭を設置し、東から西へ順番に杭1から杭19と命名し、その西のグリッド名とした。調査の結果、竪穴住居跡、土坑、ピット、溝状遺構など多数の遺構を検出し、土器片を主とする遺物も多く出土した。

2区の調査は、第2班が平成10年(1998)2月16日から5月21日まで実施した。調査区の長さは86m、幅は2m～4mである。調査区南壁際の同一直線上に5m間隔で18本の基準杭を設置し、東から西へ向かい杭1から杭18と呼称し、その西のグリッド名とした。調査の結果、土坑、ピット、溝状遺構などを検出し、土器片を中心とする遺物が出土した。

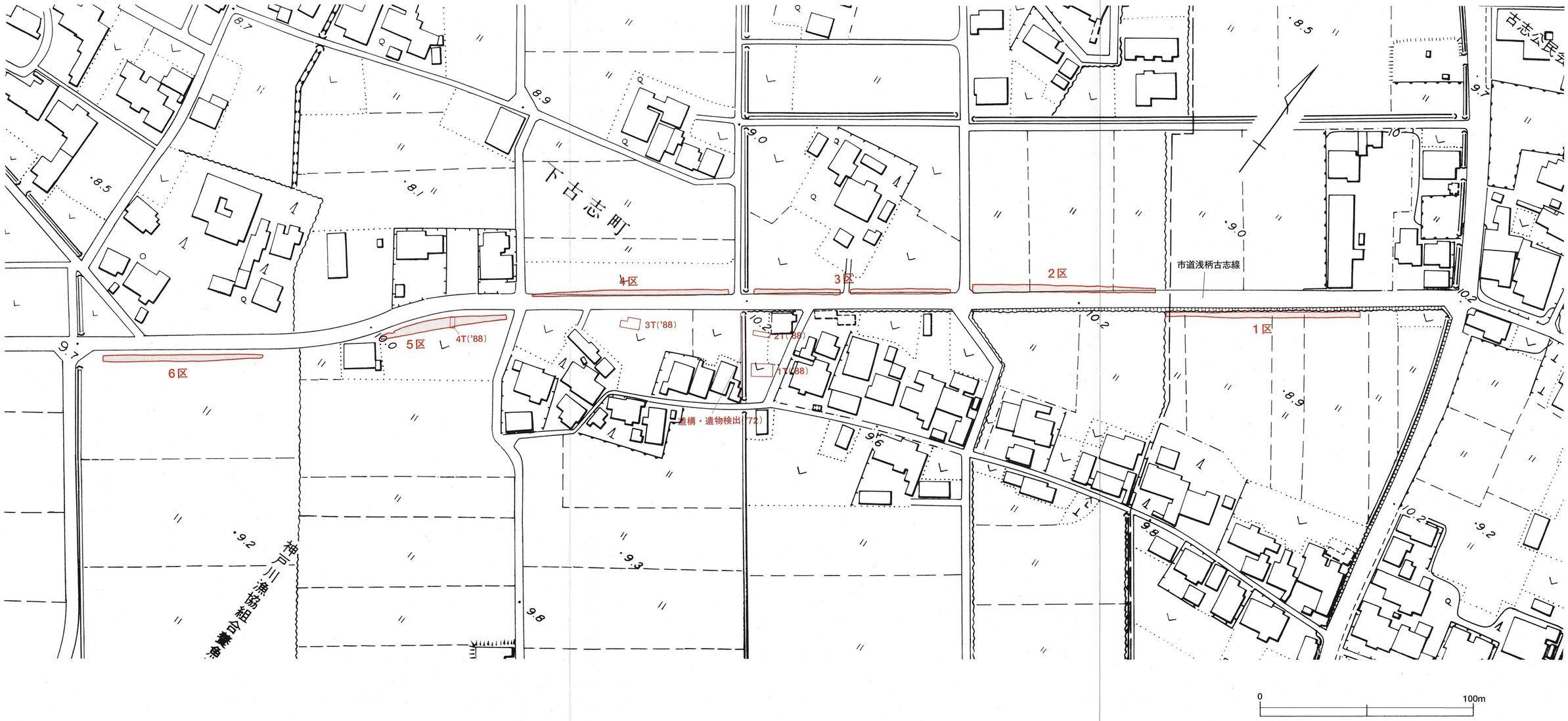
3区の調査は、第2班が平成10年(1998)5月22日から8月17日にかけて実施した。調査区の長さは95m、幅は2m～3mを測るが、一部は民家へ進入路として掘り残した。調査区内の同一直線上に5m間隔で19本の基準杭を設置し、東から西に昇順で杭1から杭19と名付け、その西のグリッド名とした。調査の結果、土坑、ピット、溝状遺構などを多数検出し、土器片を主とする遺物が出土した。

4区の調査は、第1班が平成10年(1998)6月4日から9月30日まで実施した。調査区の長さは92m、幅は1m～2.5mを測る。調査区内の同一直線上に5m間隔で20本の基準杭を設置し、東から西へ順番に杭1から杭20と呼称し、その西のグリッド名として用いた。調査の結果、掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝状遺構などを検出すると同時に、土器片を主とする遺物も出土した。

5区の調査は、第2班が平成10年(1998)7月13日から9月30日にかけて実施した。調査区の長さは61m、幅は1.5m～5mを測る。調査区内の同一直線上に5m間隔で13本の基準杭を設置し、東から西に向かい杭1から杭13と呼称し、その西のグリッド名とした。調査の結果、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構などを検出し、土器片を主とする遺物も出土した。

6区の調査は、第1班が平成10年(1998)4月20日から6月22日まで実施した。調査区の長さは75m、幅は1.5m～3mを測る。調査区北壁際の同一直線上に5m間隔で17本の基準杭を設置し、東から西に向かって順番に杭1から杭17と命名し、その西のグリッド名として用いた。調査の結果、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝状遺構などを検出し、土器片を主とする遺物も同時に出土した。

なお、平成11年度から出土遺物の整理作業を本格的に着手し、平成12年(2000)3月に本書を発行するに至っている。



第2図　田畑遺跡調査区配置図（1：1500）

田畑遺跡１区

1. 1区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第3・4図）

1区は今回の発掘調査の最も東の調査区であり、田畑遺跡の東端に位置している。北を市道浅柄古志線に、南を田畑によって挟まれているため、調査区壁が崩壊しても周囲に影響を与えないよう、調査対象地の境界から50㎝程度内側において発掘調査を実施している。この1区の平面プランは細長く、規模は長さ92m、幅1.5m～3mを測り、面積は約220㎡である。

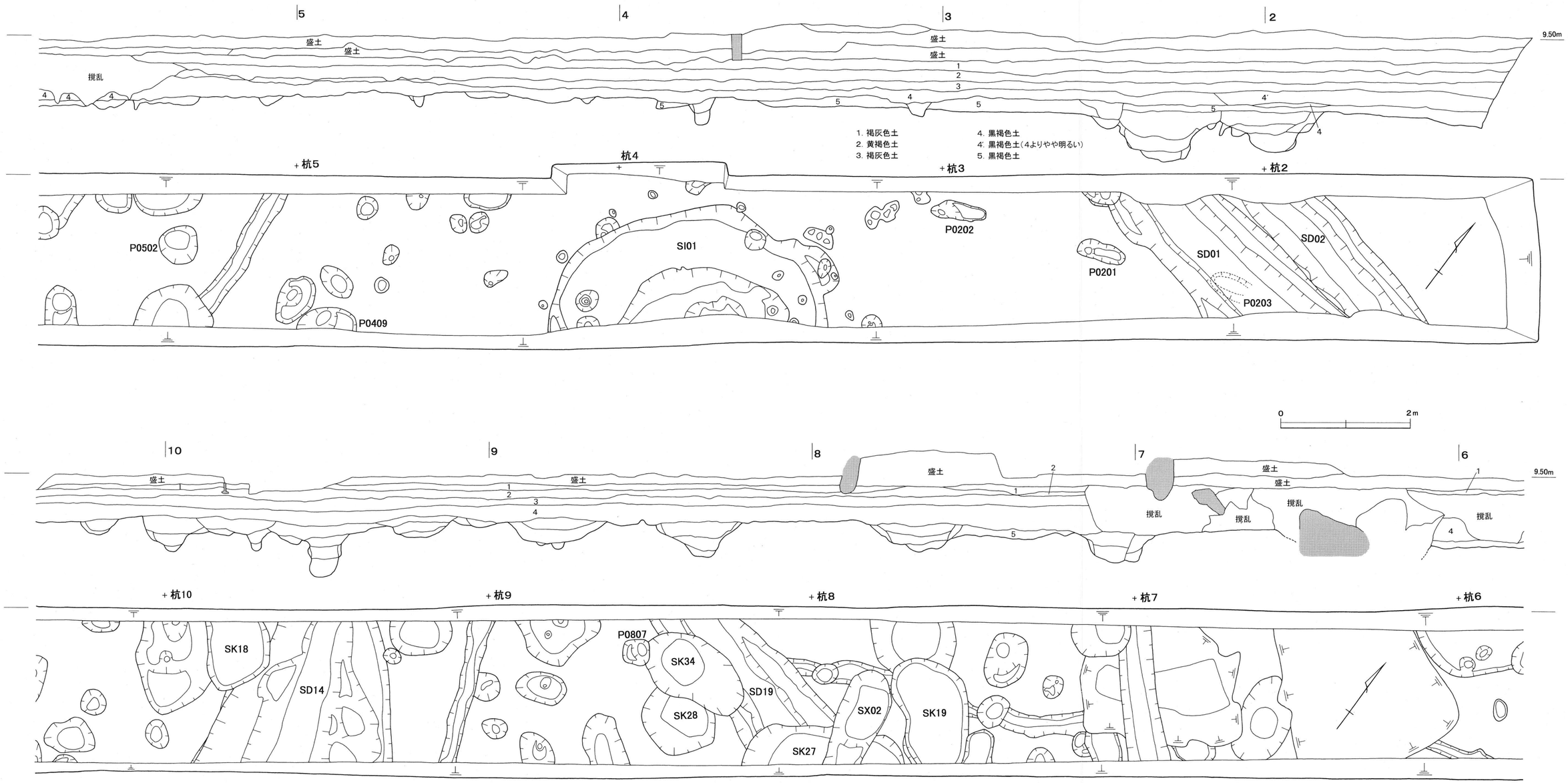
調査にあったっては、まず重機で表土掘削を行った後に、調査区北壁沿いの表土面に基準杭を5m間隔で一列に設置した。その後、遺物包含層以下については手掘りで掘削を進めたところ、標高8.35m～8.95m程度で地山面に至ると同時に遺構が検出できた。よって、この面を調査面として各遺構の調査を行い、成果を田畑遺跡1区遺構配置図にまとめた。また、調査区北壁において土層堆積状況の把握のために分層を行い、調査区北断面図を作成ししたため、この成果もあわせて示した。

なお、1区の調査に用いた基準杭の座標は表1に示すとおりである。

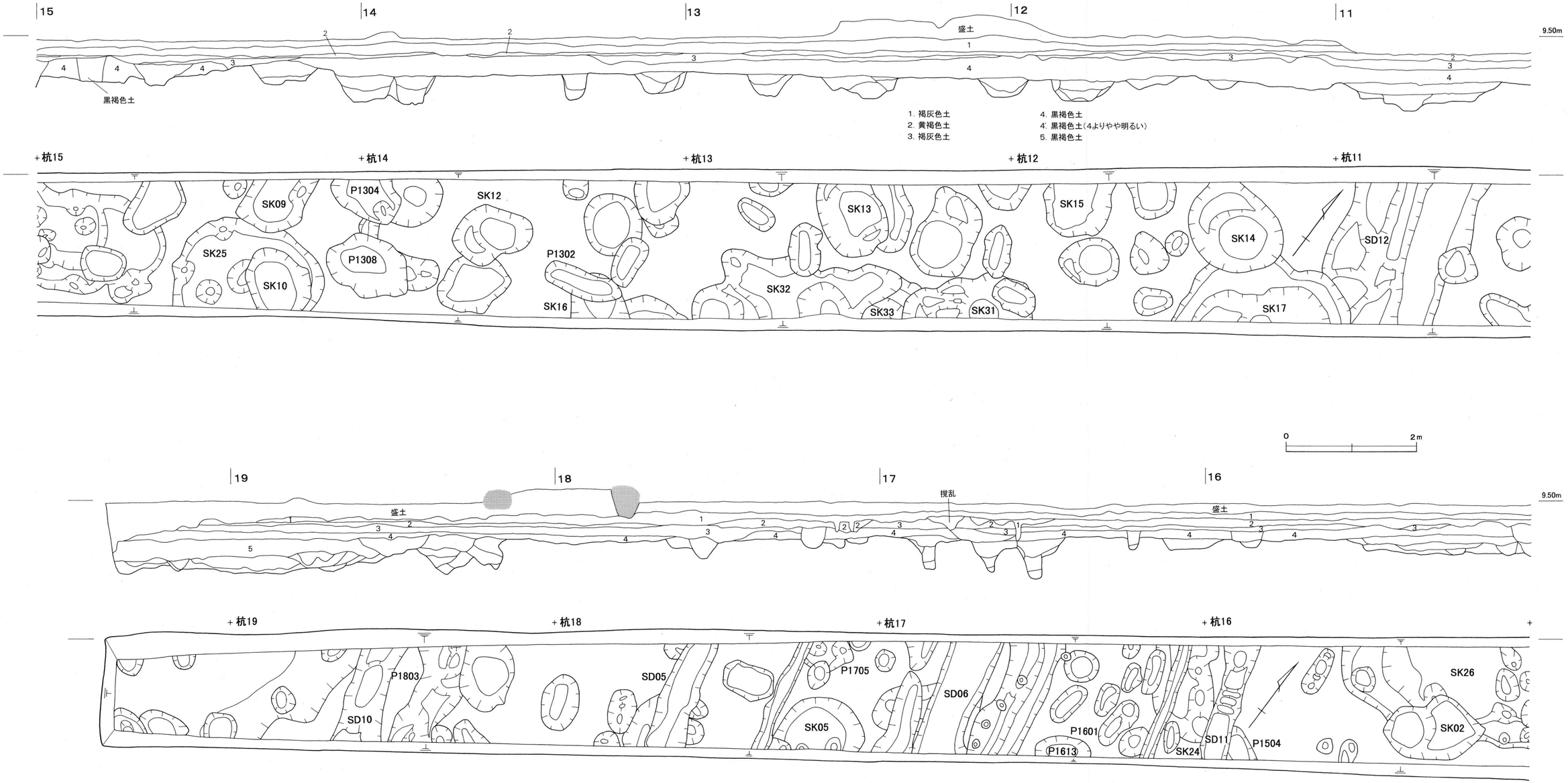
杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73184.492	52439.276
杭 2	-73187.460	52435.248
杭 3	-73190.422	52431.225
杭 4	-73193.384	52427.199
杭 5	-73196.344	52423.171
杭 6	-73199.282	52419.171
杭 7	-73202.265	52415.108
杭 8	-73205.230	52411.081
杭 9	-73208.189	52407.046
杭10	-73211.151	52403.021

杭名称	X座標	Y座標
杭11	-73214.112	52398.995
杭12	-73217.069	52394.971
杭13	-73220.036	52390.947
杭14	-73222.997	52386.913
杭15	-73225.959	52382.893
杭16	-73228.916	52378.856
杭17	-73231.888	52374.828
杭18	-73234.849	52370.809
杭19	-73237.810	52366.778

表１　田畑遺跡1区基準杭座標一覧



第３図　田畑遺跡1区遺構配置図1（1：50）



第４図　田畑遺跡1区遺構配置図2（1：50）

1区の遺構と遺物

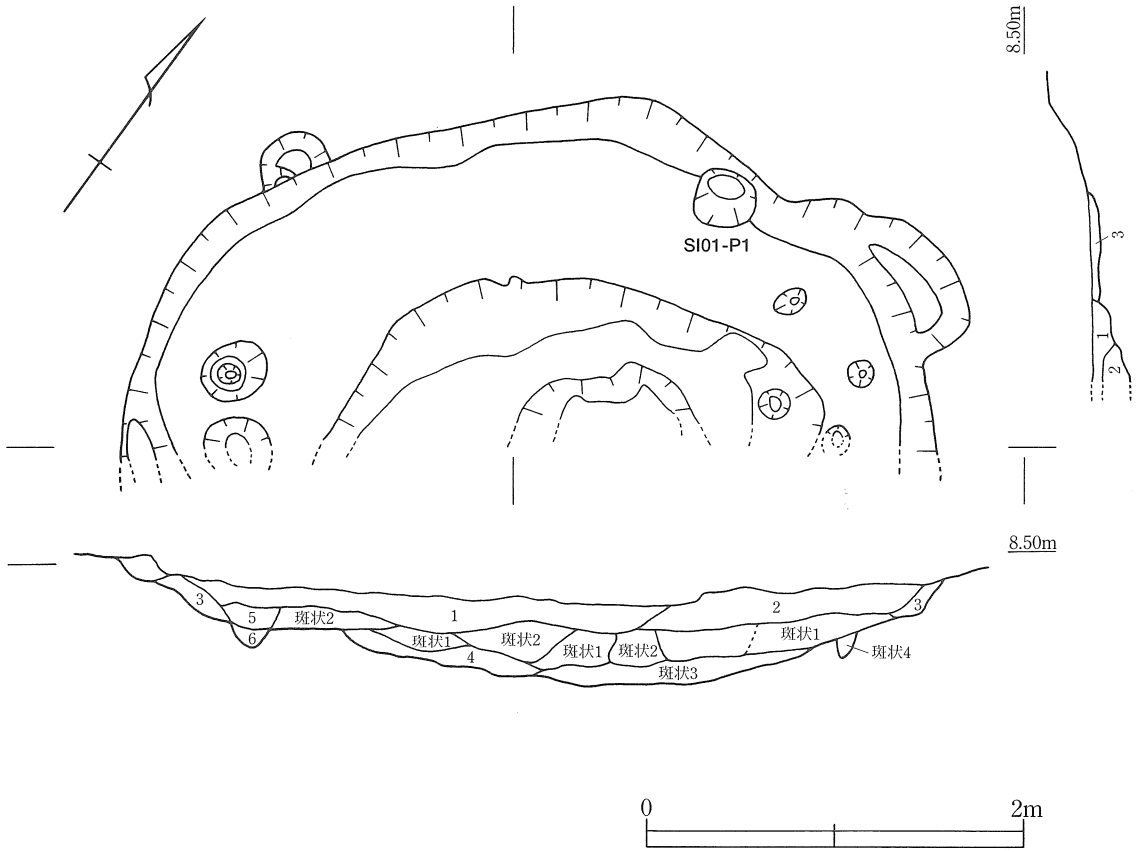
1区は多数の遺構が検出されたため、図化可能な出土遺物があった遺構を中心に、竪穴住居跡、土坑、ピット、溝状遺構、その他の遺構の順で以下報告する。

竪穴住居跡

SI01（第5・6図）

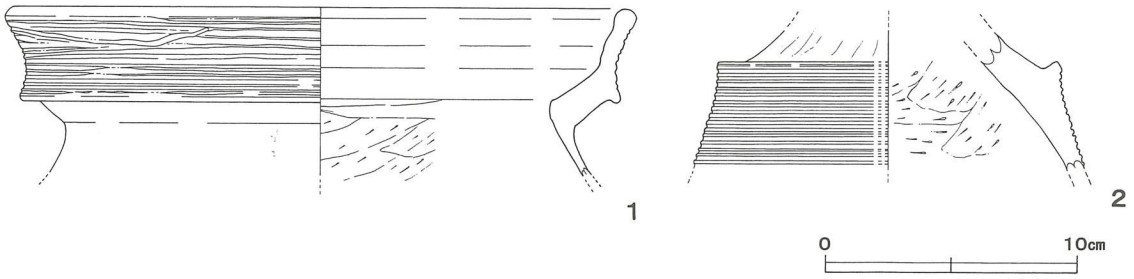
3Grから4GrにかけてSI01を検出した。調査区の幅が狭いため半分程度の検出にとどまった。平面プランは円形を呈していると推定され、検出規模は径430㎝（推定）、深さ26㎝～55㎝を測り、最下底は標高7.84ｍである。床面は中央付近で一段落ち込み、一見、二段掘り状を呈するが、断面を観察するとこの部分には斑状の土が確認できることから、人工的に埋められた可能性が高い。このことから、もともと径3ｍ弱の小規模な竪穴住居を築いていたが、後に建て替えの際にひとまわり大きなものを築き、床面中央の旧住居の落ち込みを埋めた可能性も考えられる。

覆土の第1層と第2層を中心に須恵器、土師器、弥生土器の破片が出土し、その量は全部でビニール袋半分に満たない。磨滅した小片が主であり、実測可能な遺物は少なく図示した2点を数えるに過ぎない。6-1は遺構内のピットであるSI01-P1から出土した弥生時代後期の甕口縁部である。鹿島町の南講武草田遺跡出土遺物の3期に相当するものと考えられる。6-2は高坏あるいは器台脚裾部と思われる。草田2期に相当するものと考えられる。

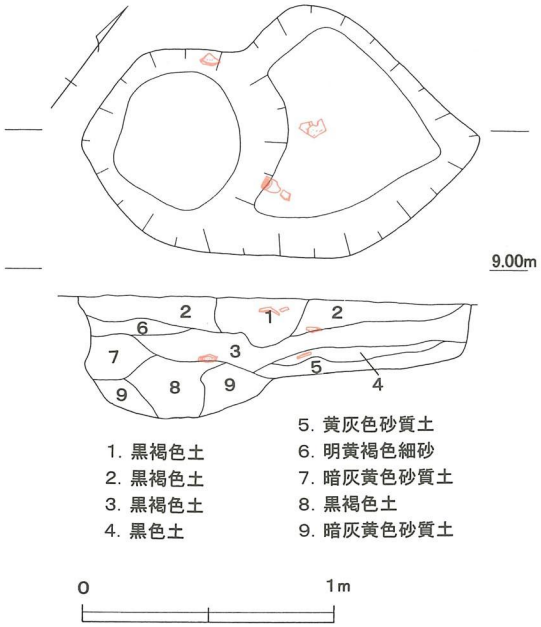


第５図　SI01実測図（1：40）

遺構の時期については資料数が少なく断言はできないが、覆土の第1層と第2層からは回転糸切り痕を残す坏底部片など、奈良・平安時代の所産と推定される土師器の小片が主に出土することから、これに近い時期と思われる。また、SI01-P1から出土した6-1は、比較的大きな破片であることから、SI01-P1の時期を示すと考えられる。よって、調査時には、SI01-P1をSI01に伴うピットとして捉えていたが、時期差があるため別遺構である可能性が高い。



第６図　SI01出土弥生土器実測図（1：3）

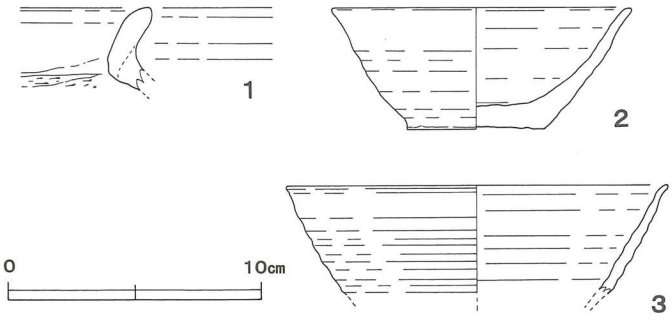


第７図　SK02実測図（1：30）

土坑

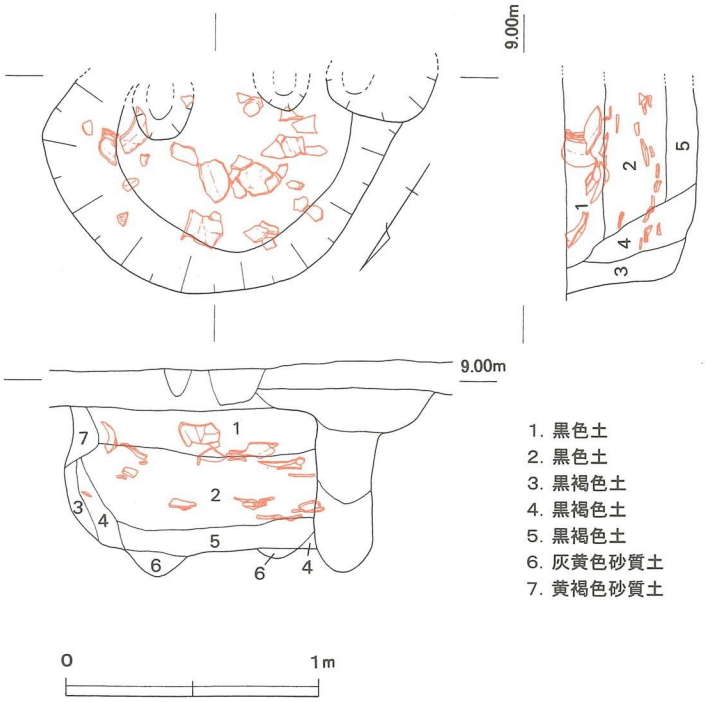
SK02（第7・8図）

15Grの標高8.98ｍの地山面でSK02検出した。検出規模は長さ158㎝、幅70㎝～100㎝、深さ48㎝を測り、N-54°-E方向に長軸をとる。坑底から20㎝の高さに平坦な段を有する二段掘りであり、側壁の立ち上がりは急である。覆土からはビニール袋半分程度の土器片が出土した。これらは弥生土器、土師器、須恵器の小片であるが、土師器片がその大半を占めており、図化可能な遺物は少ない。8-1は土師器の甕である。口縁部は単純に外反し、頸部以下の内面にはケズリが認められる。8-2は土師器の坏で、底面には回転糸切り痕が残り、器壁は内湾気味に立ち上がった後に、口縁部付近で若干外反して開口する。平安時代の所産であろう。8-3の土師器の坏は器表が強くナデつけられているため、稜線が認められる。やはり平安時代の所産と思われる。



第８図　SK02出土土師器実測図（1：3）

覆土は9層認められるが、ほとんどの層で土師器が出土している。また、回転糸切り痕を残す底部片も上層から下層にわたり数点認められ、その他の小片も概ね8-1・8-2と同時期の11世紀から12世紀頃のものと考えられることから、遺構の時期は平安時代の範疇に収まるものと推測できる。

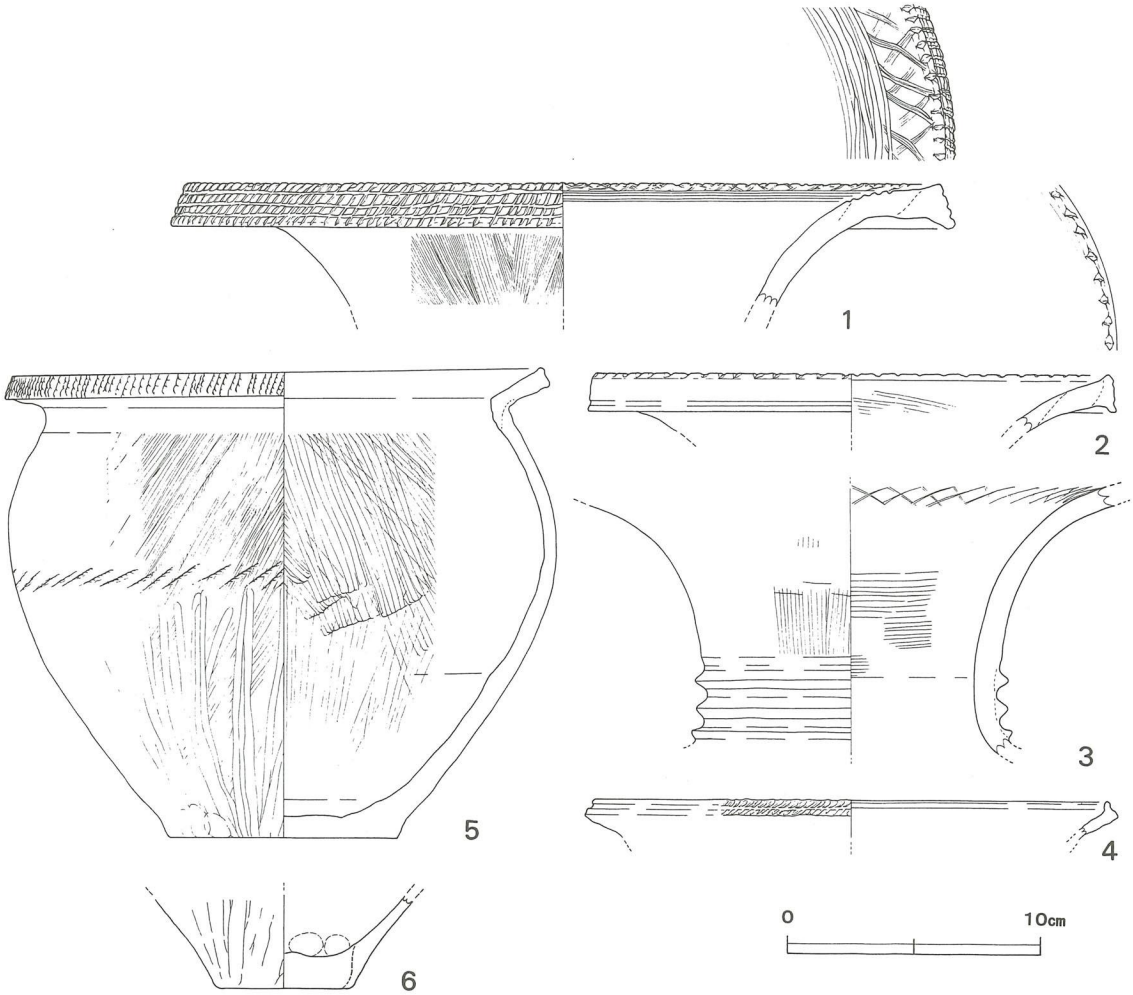


第９図　SK05実測図（1：30）

SK05（第9・10図）

17Grの標高8.78ｍの地山面でSK05を検出した。調査区南壁際で確認したため部分的な検出にとどまったが、径140㎝程度の円形平面プランを呈すると思われる。深さは112㎝を測り、坑底は若干小さな窪みを有するが概ね平坦であり、側壁は急な傾斜である。

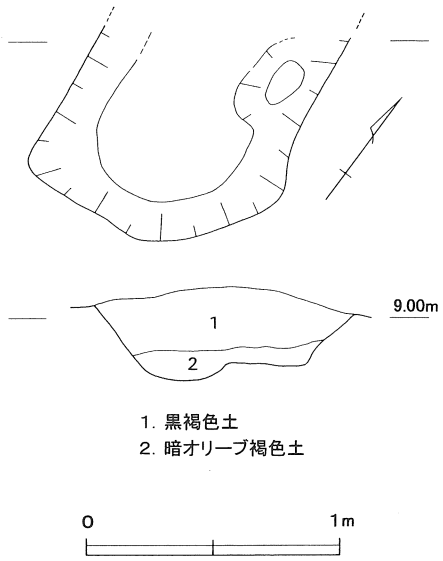
7層に分層可能な覆土からは、ビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土した。第1層と第2層を中心に出土し、比較的大きな破片も含まれている。10-1～10-3は松本Ⅲ期に相当すると考えられる広口壷である。10-1は口縁部端面と内面を複数の文様を用いて賑々しく飾られている。10-2は口縁部端面と内



第10図　SK05出土弥生土器実測図（1：3）

面の境に刻目文が巡らされている。10-3は頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部寄りの内面には斜格子文が施され、肩部寄りの外面には断面三角形の貼り付け突帯が3条巡らされている。10-4は口縁端部が上方に若干拡張し、端面には刻目文が施された後に1条の凹線文が巡らされている。松本Ⅲ-2期に相当すると思われる。10-5は口縁部端面と胴部最大径付近に刺突文が巡らされている。胴部の内面には全面にハケメが観察でき、松本Ⅲ-2期に相当するものであろう。

このように、覆土からの出土遺物には時期差がほとんどないことから、松本Ⅲ-2期が中核の時期と考えられる。図示したもの以外の小片にも、数点同時期のものが含まれると同時に、弥生時代以降の遺物も認められないことから、遺構の時期は弥生時代中期中葉であると推定できる。

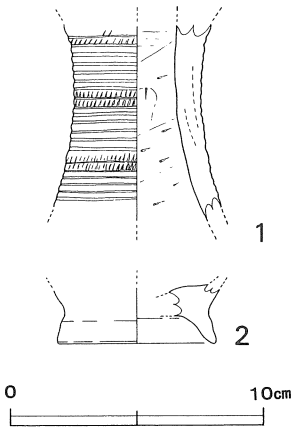


第11図　SK09実測図（1：30）

SK09（第11・12図）

14Grの調査区北壁際9.05ｍの地山面で、SK25を切った状態でSK09を確認した。部分的な検出にとどまったが検出規模は長さ80cm以上、幅87cm～93cm、深さ23cm～30cmを測り、N-5°-W方向に長軸をとると考えられる。坑底は丸味を帯び、側壁はやや緩やかに立ち上がっている。

2層に分層可能な覆土からは、ビニール袋半分に満たない土器片が出土した。ほとんどは土師器のごく小片であるが、弥生土器片、須恵器片も1～2点混ざっている。実測に耐える遺物は少なく、図示した2点だけである。12-1は弥生土器の高坏脚部片である。凹線が20条以上施されており、刻目文が3段観察できる。12-2に示す土師器の坏は「ハ」字状に開く高台を有しており、11世紀頃の所産と思われる。他の土師器の小片も胎土が似ており同時期頃のものと思われるため、遺構の時期は平安時代終わり頃と推測できる。



第12図　SK09
出土土器実測図（1：3）

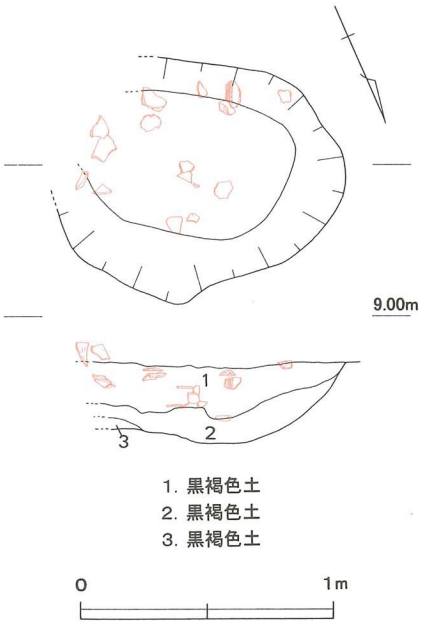
SK10（第13・14図）

14Grの標高8.82ｍの調査面で、SK25を切った状態でSK10を確認した。調査区南壁際での検出であったため、遺構の一部は調査区外に達している。平面プランはN-55°-W方向に長軸をとる不整な楕円形を呈すると思われる。検出規模は長径115cm程度、短径95cm、深さ32cmを測り、側壁は丸味を帯びた坑底から曲面をなして立ち上がっている。

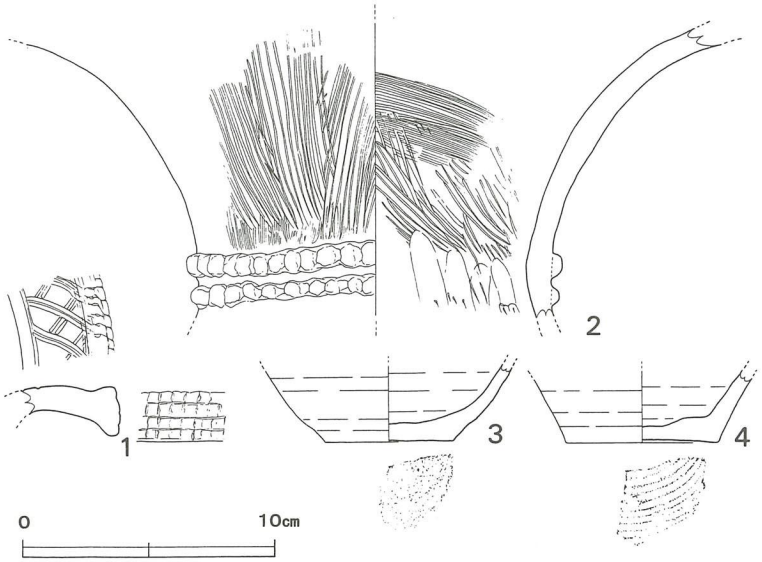
覆土は3層観察でき、第1層を中心に弥生土器、土師器、須恵器の破片がビニール袋1袋分出土しているが、弥生土器片と土師器片の割合が高く、須恵器片は数点を数えるに過ぎない。14-1・14-2など弥生土器片は比較的大きなものも出土しているが、SK25から混入したものと考えられる。14-3は土師器の坏である。内湾して立ち上がる器壁は底部付近では若干絞られており、底面に回転糸切り痕が残る。14-4に示す土師器の器種は定かでは

ないが、器壁が直線的に開口しており、底面には回転糸切り痕が残っている。

遺構の時期については、図示したもの以外の小片も勘案し、平安時代から鎌倉時代にかけてと考えられる。



第13図　SK10実測図（1：30）



第14図　SK10出土土器実測図（1：3）

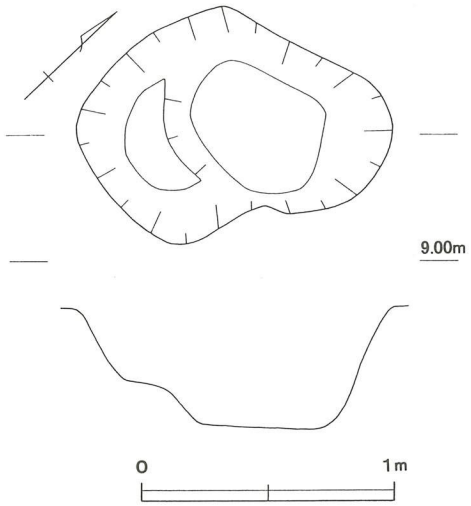
SK12（第15・16図）

13Grの標高8.81cmの地山面でSK12を確認した。N-44°-E方向に長軸をとるが、不整形な平面プランである。検出規模は長さ125cm、幅60cm～90cm、深さ47cmを測る。平坦な坑底から17cmの高さに段を有する二段掘りであり、側壁の立ち上がりはやや急である。

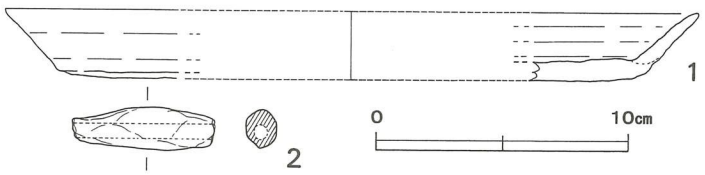
覆土からはビニール袋半分程度の土器片が出土しているが、大半は土師器の小片であり、須恵器片も数点出土している。図化に耐える遺物は少なく図示した2点を数えるに過ぎない。16-1は須恵器の皿である。復元口径27.4cmを測る比較的大きなものである。16-2は管状紡錘形土錘であるが今回の調査での出土数は少ない。

遺構の時期については、小片も勘案し平安時代から鎌倉時代までの時期と思われる。

なお、管状紡錘形土錘は、出雲市内の遺跡では上長浜貝塚で多数出土している。



第15図　SK12実測図（1：30）



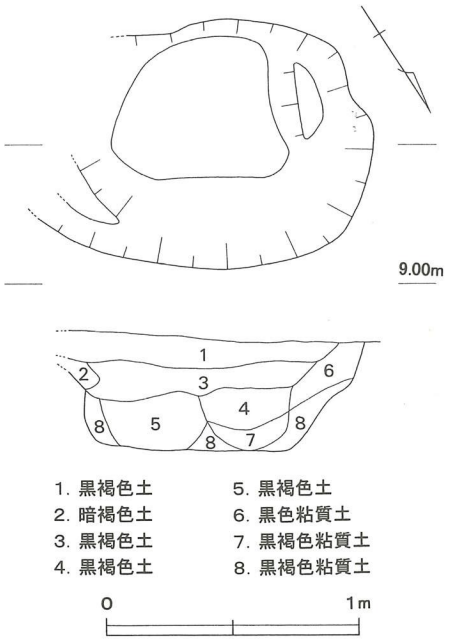
第16図　SK12出土須恵器・土製品実測図（1：3）

SK13（第17・18図）

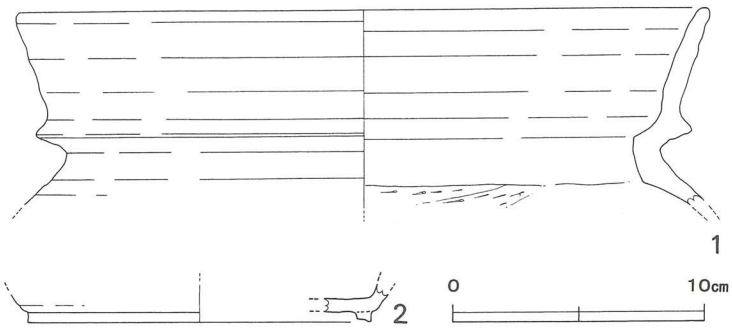
12Grの調査区北壁際標高8.80mの地山面でSK13を確認した。全容は観察できなかったが、N-57°-W方向に長軸をとり、検出規模が長さ130cm、幅100cm、深さ43cmを測る土坑である。

8層に分層可能な覆土からは、ビニール袋半分に満たない弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土ており、土師器の割合が高い。小片が多いため、実測可能な遺物は図示した2点だけである。18-1は草田5期に相当する甕である。複合部の稜は水平方向に突出している。18-2は須恵器の坏である。底面外縁に高台を貼り付けており、高広Ⅳ期に相当するものと考えられる。

小片も含めて出土土器を観察すると弥生時代中期後葉から平安時代前半までのものが出土しているようである。よって、遺構の時期は平安時代前半と思われる。



第17図　SK13実測図（1：30）

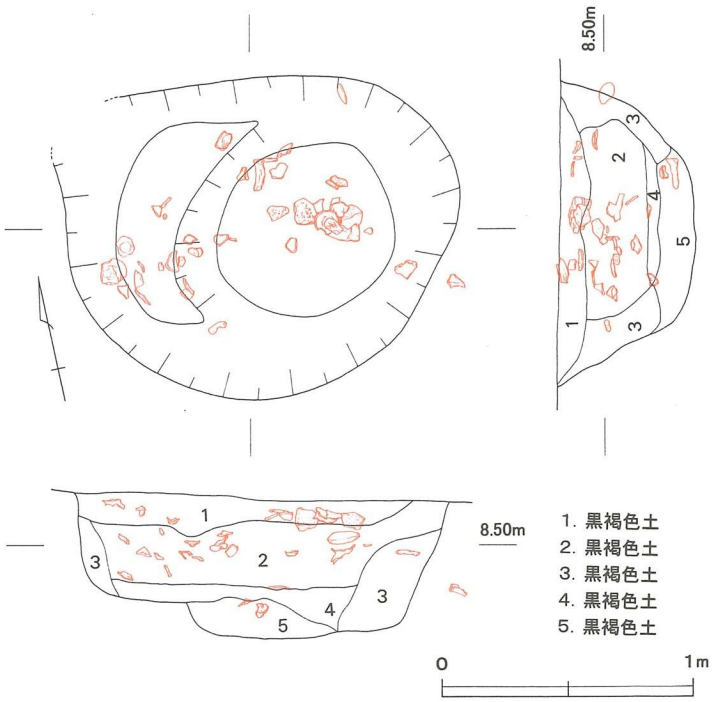


第18図　SK13出土土器実測図（1：3）

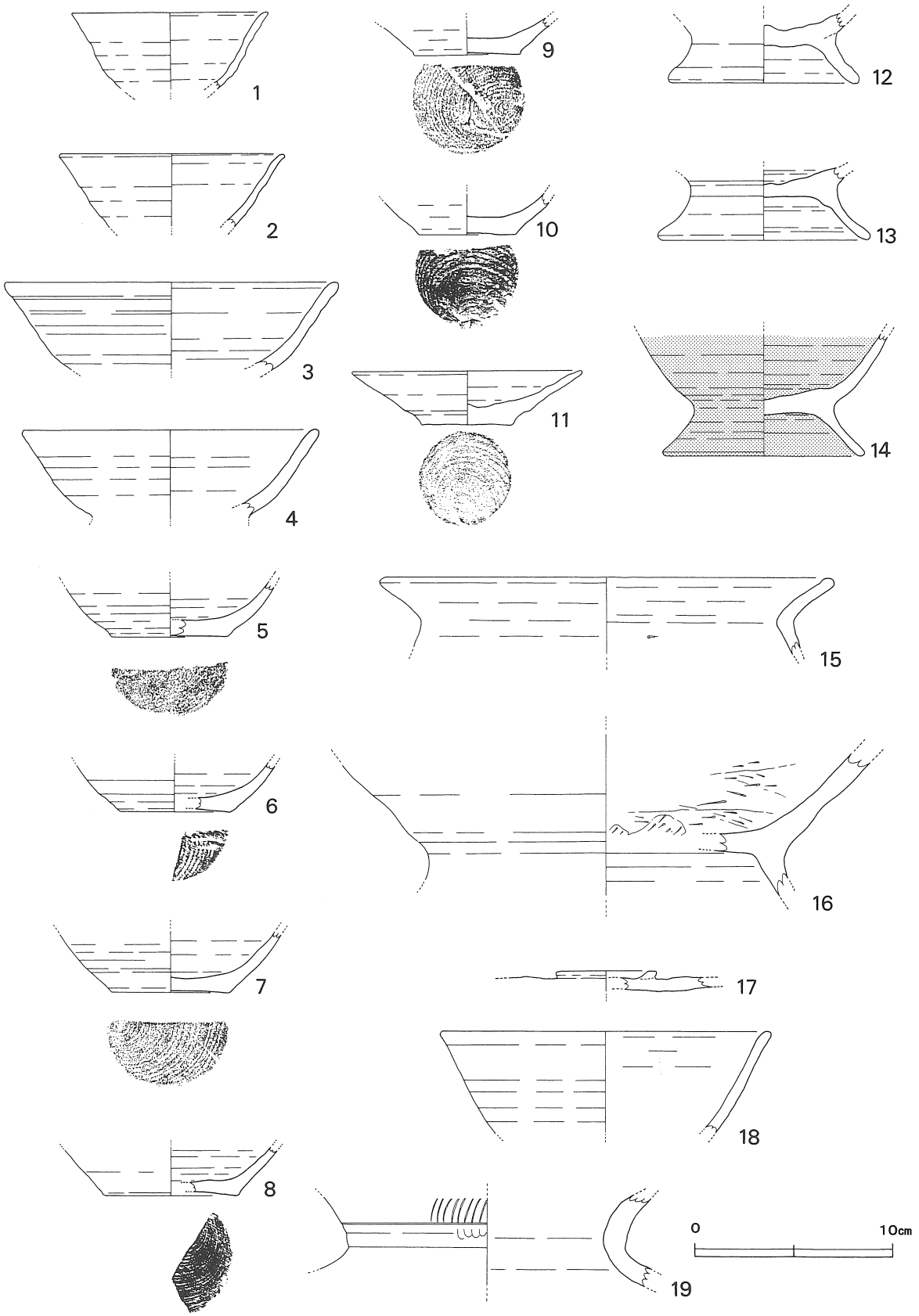
SK14（第19～21図）

11Grの標高8.68mの地山面でSK14を検出した。平面プランは径約140cmのいびつな楕円形を呈しているが、坑底は径70cmの比較的整った円形をなしている。平坦な坑底の標高は8.13mであり、最下底より12cmの高さに段を有する二段掘りである。

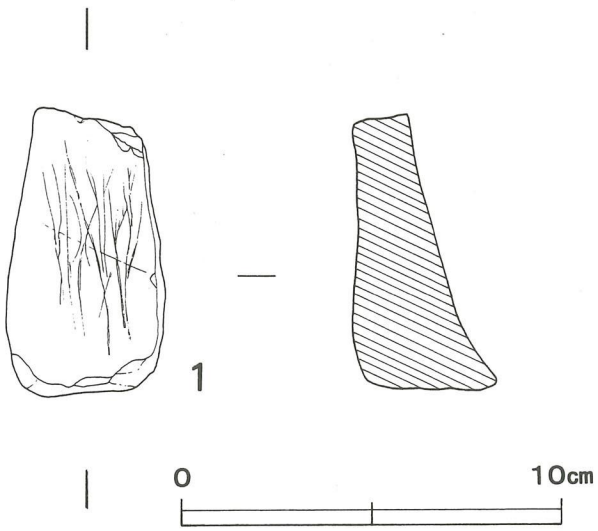
5層に分層可能な覆土からは、ビニール袋1袋強の出土遺物があった。第1層



第19図　SK14実測図（1：30）



第20図　SK14出土土器実測図（1：3）



第21図　SK14出土石製品実測図（1：2）

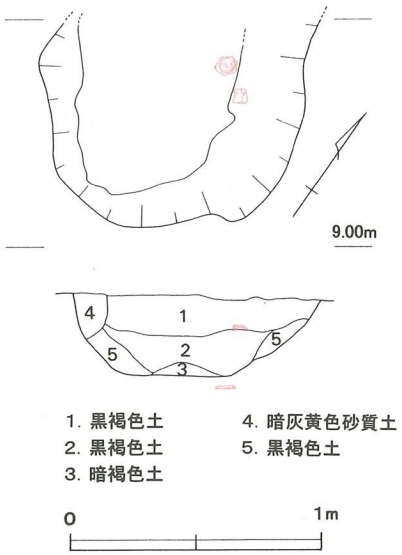
と第2層を中心に出土しており、大半は土師器片であるが同時期頃の坏片が多い。したがって、小片については図示を割愛している。20-1～20-16は土師器を示した。20-1～20-7の杯は器壁が底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がつた後に、口縁部では外反気味に開口する。20-8～20-11の杯は底部を絞り、器壁は口縁部にかけて直線的に広く開口するようである。また、20-12～20-14の杯は「ハ」字状に広く開く高い高台を有しており、器壁は内湾気味に立ち上がっている。20-15は甕であり他の土師器よりは古いと考えられる。20-17～20-19は須恵器である。20-17は輪状撮を有する蓋であり、20-18の坏は器壁が底部からやや内湾し立ち上がった後に、口縁部では外反気味に開口している。須恵器は高広Ⅲ期～Ⅳ期に属すると思われるが、土師器の多くは11世紀から12世紀頃のものが多い。このことから、遺構の時期は中世初め頃と推定できる。

土器の他に21-1に示す砥石も1点出土した。4面に研磨面を有し、このうち1面には鋭利なもので引っ掻いたような細い条溝が多数残っている。

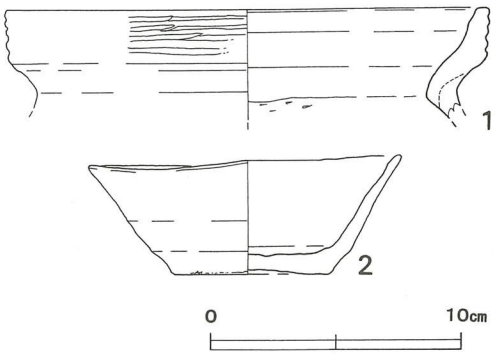
SK15（第22・23図）

11Grの調査区北壁際標高8.80mの地山面でSK15を確認したが、遺構の一部は調査区外に続いている。N-27°-W方向に長軸をとると思われ、検出規模は長さ85cm以上、幅100cm、深さ31cmを測る。平坦な坑底からの側壁の立ち上がりは、東壁で比較的緩やかである。

5層に分層できる覆土からは、図に示す遺物が2点出土した。23-1は弥生土器の甕である。口縁部端面に4条の凹線文を施し、草田1期に相当するものである。23-2は土師器の底面には回転糸切り痕が観察でき、器壁は直線的に開口しており、9世紀頃の所産と考えられる。これらの出土遺物から、遺構の時期は平安時代と推定できる。



第22図　SK15実測図（1：30）

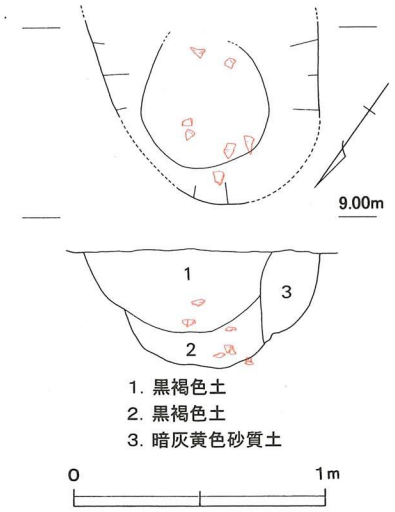


第23図　SK15出土土器実測図（1：3）

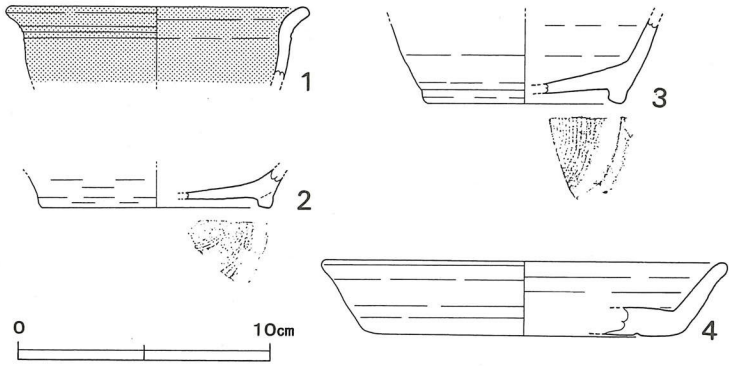
SK16（第24・25図）

13Grの調査区南壁際標高8.85mの地山面でSK16を確認した。他の遺構に浅い撹乱を受けてはいるが、検出規模は長さ75cm以上、幅80cm、深さ45cmを測り、N-51°-W方向に長軸をとるようである。坑底の平面プランは径50cm程度の円形を呈するものと思われ、側壁は中ほどで傾斜を変えて立ち上がっている。

3層に分層可能な覆土からはビニール袋半分に満たない土師器、須恵器の破片が出土した。図化可能なものは図示した4点だけである。25-1は土師器の口縁部であり、内外面に赤色塗彩が施されている。25-2～25-4はいずれも高広Ⅳ期に相当する須恵器である。これらから遺構の時期は奈良時代から平安時代と一応の推測は可能であるが、いずれも小片であるため不確かである。



第24図　SK16実測図（1：30）

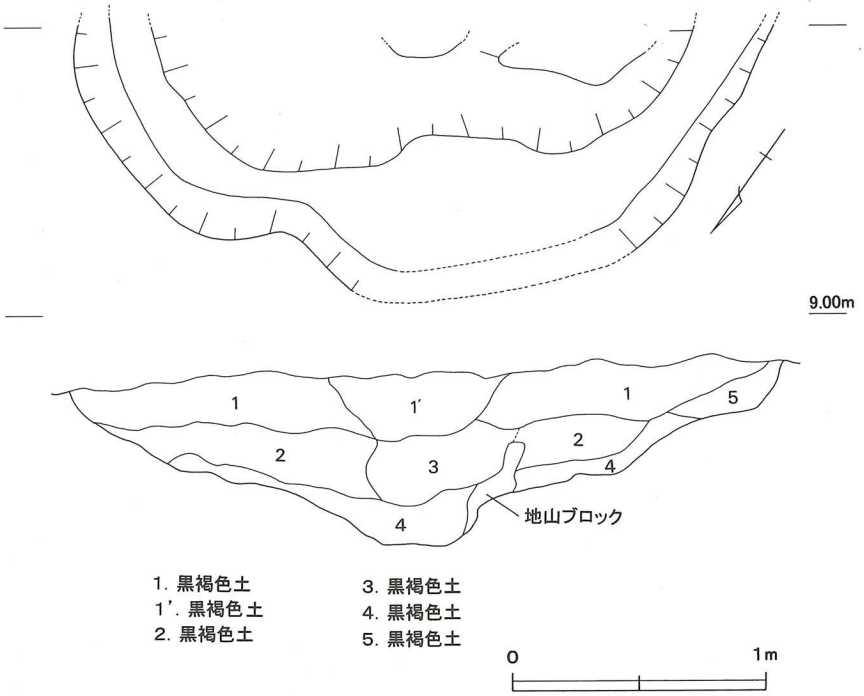


第25図　SK16出土土器実測図（1：3）

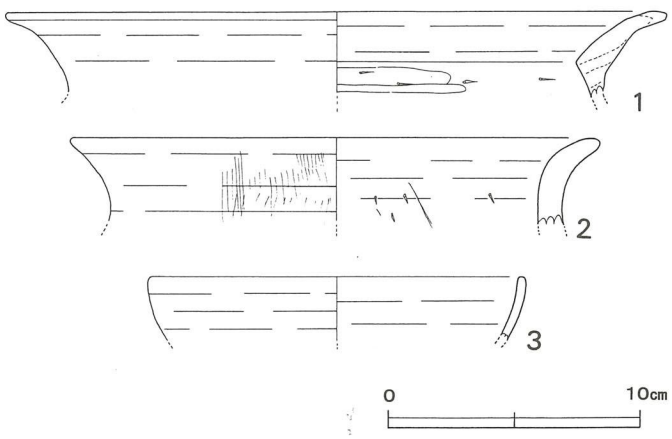
SK17（第26・27図）

11Grの調査区南壁際標高8.70m～8.80mの地山面でSK17を確認した。本来、いびつな円形の平面プランを呈するものと思われるが、遺構の半分は調査区外に続いている。検出規模は径275cm、深さ67cmを測る。標高8.60m付近で段を有する二段掘りで、側壁は狭い坑底から緩やかに立ち上がる。

覆土は概ね5層認められ、主に上層から土師器の破片を中心とした出土遺物が少量あった。27-1・27-2は土師器の



第26図　SK17実測図（1：30）



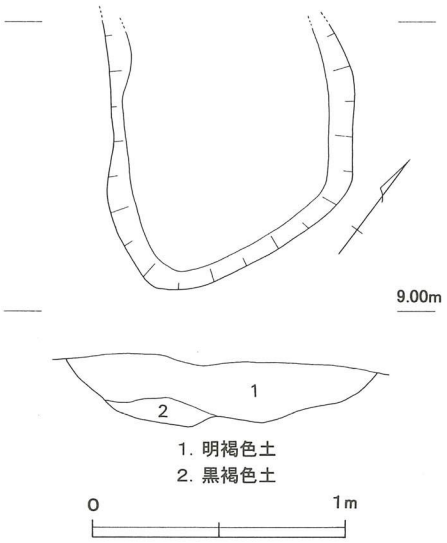
第27図　SK17出土土器実測図（1：3）

甕である。前者の口縁部は単純に外反し開口するが、内面に粗いケズリが施されているために、頸部が「く」字状に屈曲した断面を呈している。これに対し後者の頸部の屈曲は曲線的である。27-3は須恵器の坏と思われるが小片のため時期は不明である。図示したもの以外の遺物の中には、中世土師器と思われる破片があるため、遺構の時期についてはこれに従うと思われる。

SK18（第28・29図）

9Grの北壁際標高8.80mの調査面で溝状遺構を切った状態でSK18を確認した。一部の検出にとどまったがN-40°-W方向に長軸をとると思われ、検出規模は長さ100cm以上、幅95cm、深さ25cmを測る。側壁は小さな起伏を有する坑底から緩やかに立ち上がっている。

覆土は2層認められ、ここから土器片が少量出土した。図示した須恵器1点を除いて他はすべて土師器の小片である。29-1の蓋は、口縁端部を下方に若干引き出しており高広ⅣB期に相当すると思われるが、遺構の時期を推定する資料にはなり得ない。

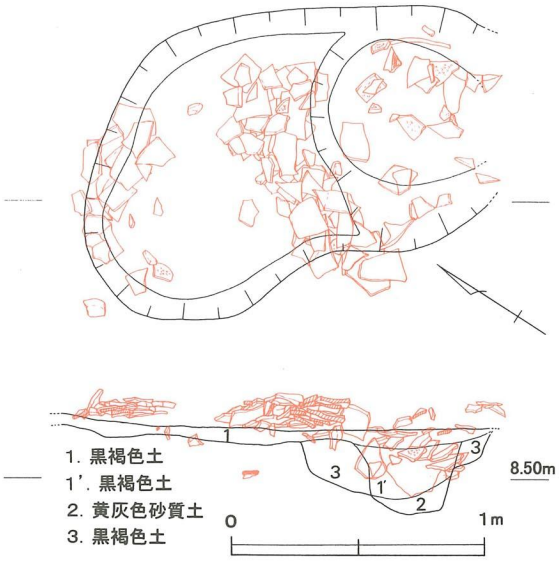


第28図　SK18実測図（1：30）

第29図　SK18出土須恵器実測図（1：3）

SK19（第30～32図）

7Grの標高8.70mの調査面で検出したSK19は、その一部が調査区外続いているため部分的な調査にとどまったが、N-51°-W方向に長軸をとる不整な楕円形平面プランを呈していると考えられる。検出規模は長径190cm程度、短径100cmを測る。遺構の南東寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは35cmを測るが、北西寄りでは5cm前後と浅い。しかし、検出面より上位でこの遺構に伴うと思われる須恵器大甕の比較的大きな破片が多数出土していたため、深さについては、本来はさらに15cm程度深かったと推定される。

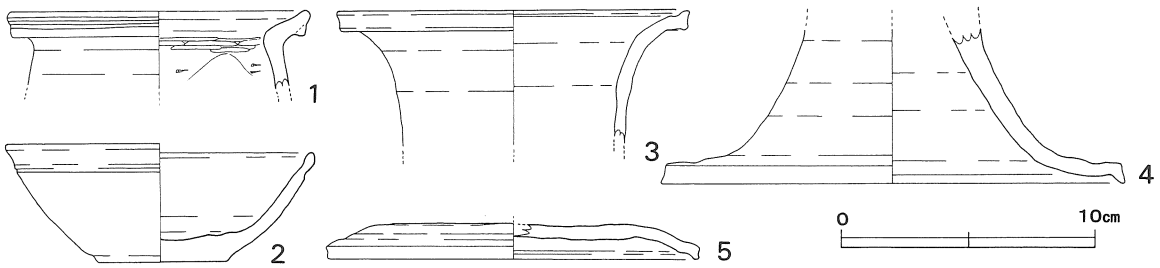


第30図　SK19実測図（1：30）

4層に分層可能な覆土からは、須恵器大甕の破片を中心とした土器片がコンテナ4箱程度出土している。このうち実測可能なものはほとんど図示したが、須恵器大甕の破片は割愛したものがある。

31-1は弥生時代後期の甕である。口縁部外面に2条の平行沈線を巡らせ、頸部以下の内面にはケズリ調整が施されている。31-2はほぼ完形で出土した坏である。器壁は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がっており、12世紀頃の所産と考えられる。検出面やや上位で出土したため、この遺構に伴わない可能性もある。続いて須恵器を示した。31-3は甕の口縁部、31-4は高坏の脚部、31-5は蓋である。これらは古墳時代終末から平安時代にかけてのものと考えられるがいずれも小片である。

次に、須恵器の大甕を示した。出土した土器片のほとんどが大甕の破片であり、接合しないものも多いが、口縁部は32-1・32-2に示した2個体が確認できた。古墳時代終末頃のものと推測され、遺構の時期を示すと考えられる。



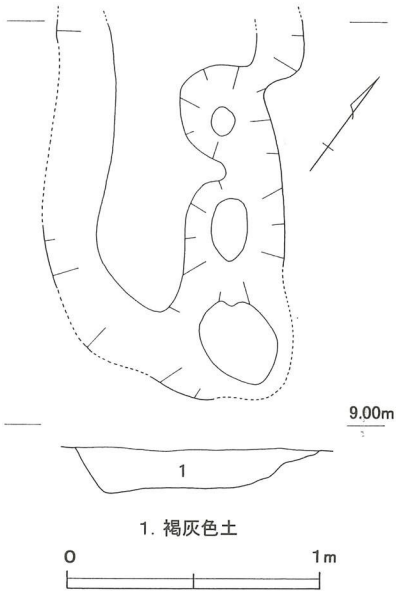
第31図　SK19出土土器実測図1（1：3）

第32図　SK19出土土器実測図2（1：7）

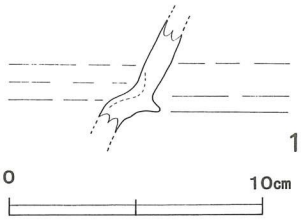
SK24（第33・34図）

16Grの調査区北壁際標高8.90mの地山面でSK24を確認した。遺構の一部は調査区外に続いているが、N-36°-W方向に長軸をとる細長い平面プランを呈する。検出規模は長さ150cm以上、幅95cm、深さ15cmを測る。坑底には、3箇所にピット状の落ち込みが認められ、側壁の立ち上がりは変則的である。

覆土は1層観察でき、土師器を主とする少量の土器片が出土した。実測に耐えるものは34-1に示した甕1点のみである。複合部の稜が水平方向に突出しており、古墳時代初頭のものと考えられる。しかし、他の小片にはより新しいものが含まれているため、遺構の時期は不明である。



第33図　SK24実測図（1：30）

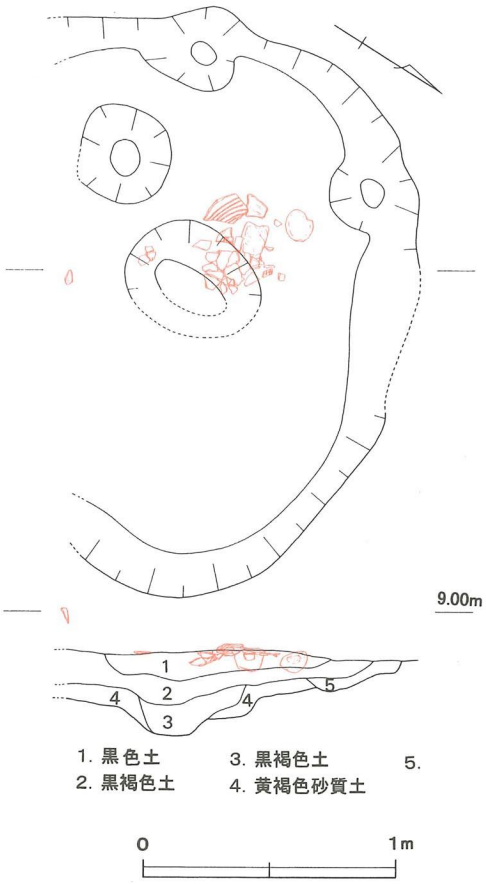


第34図　SK24出土土師器実測図（1：3）

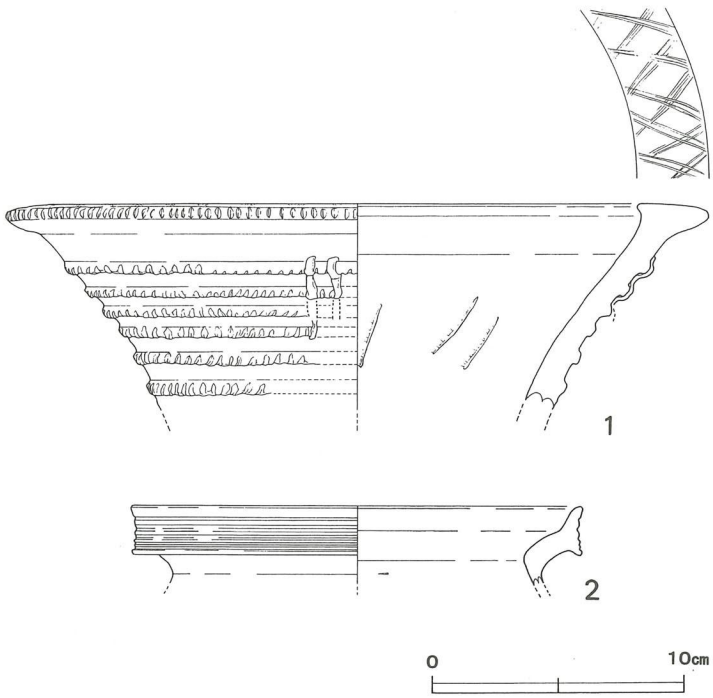
SK25（第35・36図）

14Grの調査区南壁際標高8.85mの地山面で、SK10に切られた状態でSK25を確認した。N-58°-E方向に長軸をとる不整な楕円形の平面プランを呈すると思われるが、遺構の一部が調査区外に伸びているため全容の確認は行っていない。検出規模は長径230cm、短径140cm以上、深さ20cmを測る。坑底に深さ13cm程度のピットを2基有し、側壁にも2基のピットが認められる。

5層に分層可能な覆土からは、比較的大きな弥生土器片が



第35図　SK25実測図（1：30）



第36図　SK25出土弥生土器実測図（1：3）

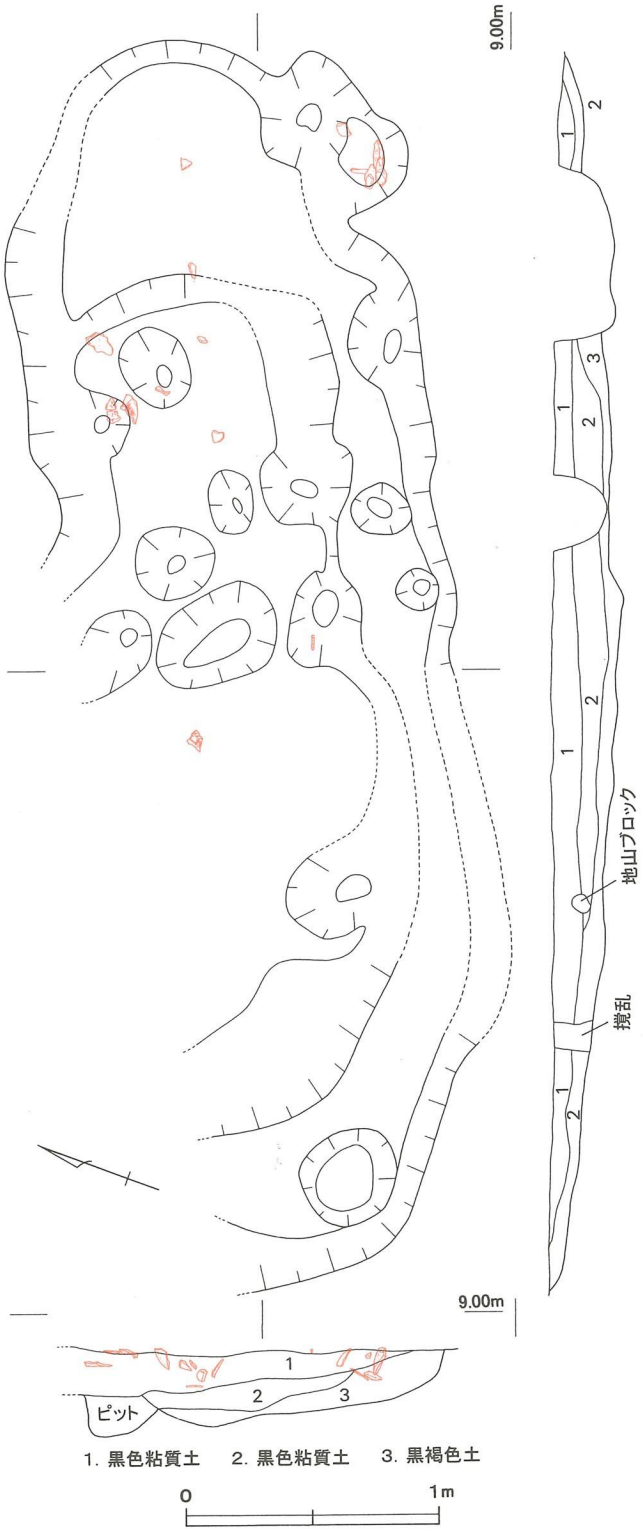
第1層を中心にビニール袋1袋分出土している。このうち口縁部片を図示した。36-1は松本Ⅲ-2期に相当する長頸壷であり、突帯文と刻目文を組み合わせた文様で賑々しく飾っている。36-2は草田1期の甕であり、頸部以下の内面にはケズリが施されている。前者と後者では時期的な開きがあるが、SK10出土の弥生土器が本来SK25に伴うものであった可能性が高いことを考えあわせると、遺構の時期は前者の時期、すなわち弥生時代中期中葉と推測できる。

SK26（第37～39図）

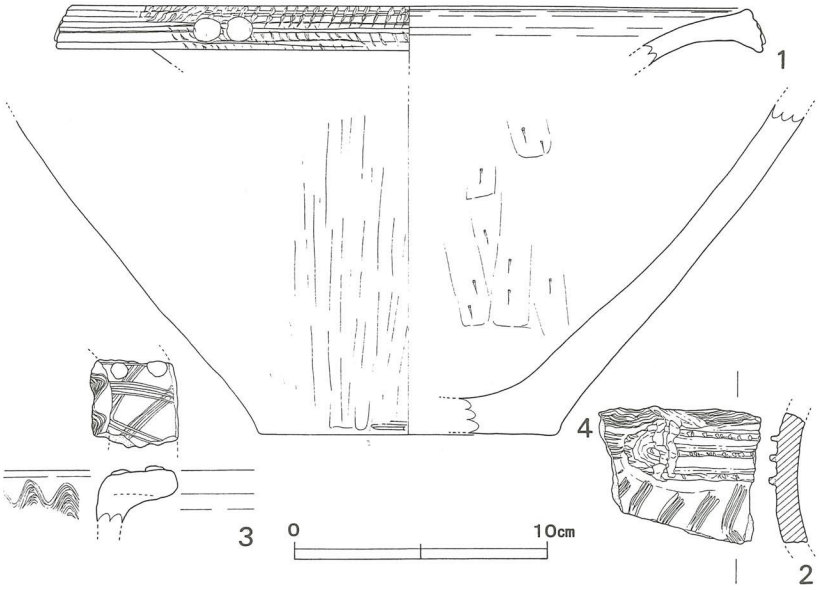
14Grから15Grにかけての標高8.85mの地山面でSK26を検出した。平面プランは細長く不整形ではあるが、N-60°-E方向に長軸をとり、長さ494cm、幅は東寄りが157cm、西寄りが140cm以上、深さ28cmを測る。

坑底にはピット状の落ち込みが13穴認められるが、長軸方向の遺構断面を観察すると、この中には上位の層から掘削されたものも含まれてたことが判明した。また、中央が最も落ち込む坑底は、側壁方向に向かい次第に浅くなっていく様子がうかがえる。

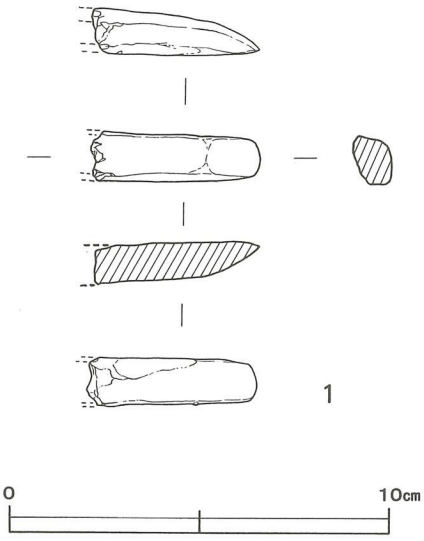
3層観察できる覆土からは、第1層を中心に弥生土器、土師器、須恵器などがあわせて、ビニール袋1袋弱出土している。弥生土器の割合が高く、破片も比較的大きい。出土遺物のうち図化に耐えるものは38-1～38-4、39-1に示した5点だけである。38-1・38-2は広口壷である。前者は口縁端面に5条の凹線文と刻目を巡らせた後に円形浮文を貼り付けている。後者は口縁端部を欠くが、内面には刻目突帯文と棒状浮文を組み合わせた文様を施している。38-3は器種は不明であるが口縁部片と思われる。頸部内面に波状文が施されており特徴的である。これらはいずれも松本Ⅲ-2期～Ⅳ-1期の範疇に収まるものと考えられる。また、土器以外には頁岩製の鑿状片刃石斧が1点出土したため、39-1に示した。図示したような弥生土器片が出土するが、出土遺物の中には土師器片も少なからず含まれることから、この遺構は弥生中期中葉から後葉に



第37図　SK26実測図（1：30）



第38図　SK26出土弥生土器実測図（1：3）



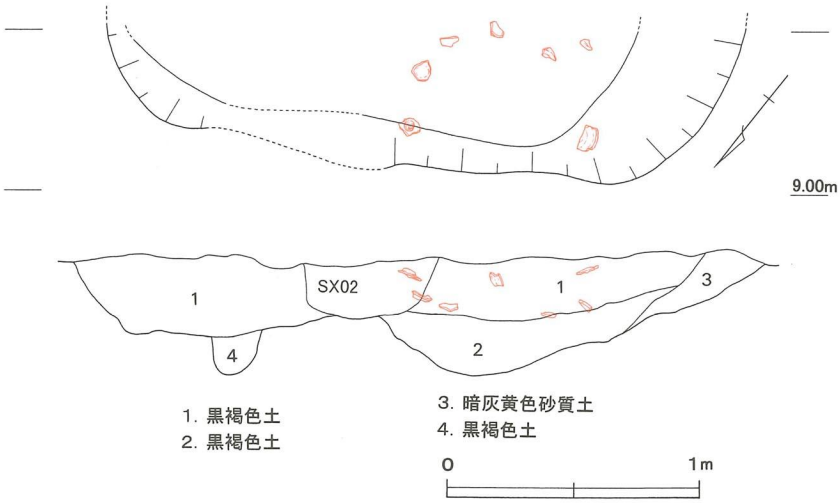
第39図　SK26出土石製品
実測図（1：2）

築かれ、後世に撹乱を受けたものと思われる。

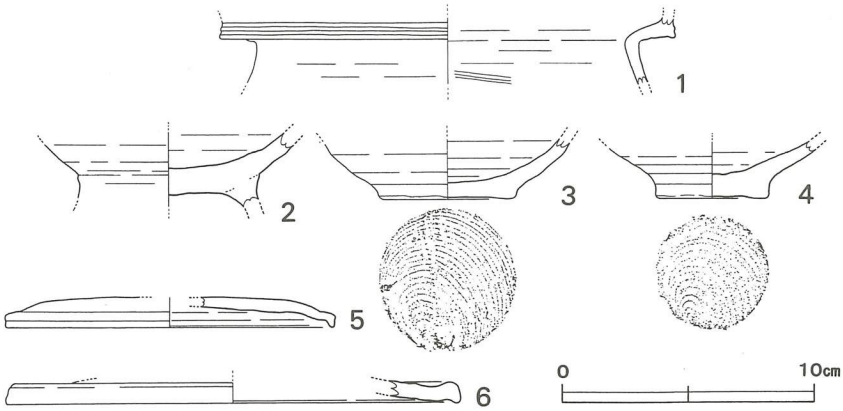
SK27（第40・41図）

7Grから8Grにかけての調査区南壁際標高8.75mの地山面においてSK27を確認した。部分的な検出にとどまったがN-52°-E方向に長軸をとると思われ、SD19を切り、SX02に切られている。検出規模は長さ252cm、幅60cm、深さ32cm～47cmを測る。坑底は中ほどで高まり西寄りが最も深く、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

4層に分層可能な覆土からは、ビニール袋半分程度の土器片が出土している。これらは弥生土器、土師器、須恵器の破片で、第1層を中心に出土しており、弥生土器の割合が高い。小片が多く実測可能な遺物は少ない。41-1は弥生土器であるが混入品であろう。41-2～41-4の土師器



第40図　SK27実測図（1：30）



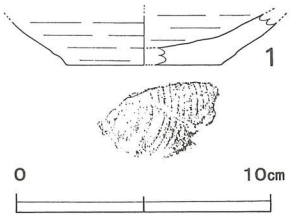
第41図　SK27出土土器実測図（1：3）

の坏は11世紀から12世紀の所産と考えられ、遺構の時期を示していると考えられる。なお、41-5・41-6に示す須恵器の蓋は41-1同様混入品であろう。

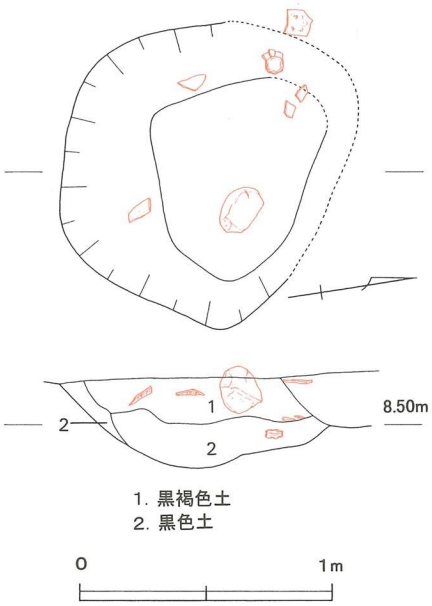
SK28（第42・43図）

8Grの標高8.67ｍの地山面でSK34に切られた状態でSK28を確認した。N-60°-W方向に長軸をとるが、平面プランは不整形である。坑底は丸味を帯び、側壁の立ち上がりは緩やかである。

2層に分層可能な覆土からは、自然石のほかビニール袋半分に満たない土師器、須恵器の破片が出土している。このうち実測に耐える遺物は43-1に示した坏1点のみである。底部の切り離しは回転糸切りにより、器壁の立ち上がりは直線的である。中世前半の所産と考えられ、遺構の時期もこの頃であろう。



第43図　SK28出土土師器実測図（1：3）

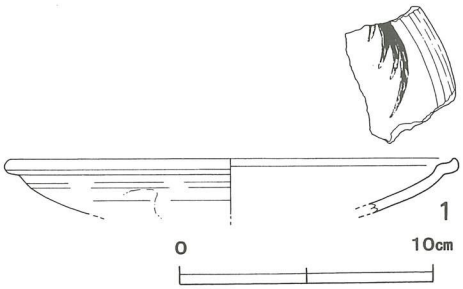


第42図　SK28実測図（1：30）

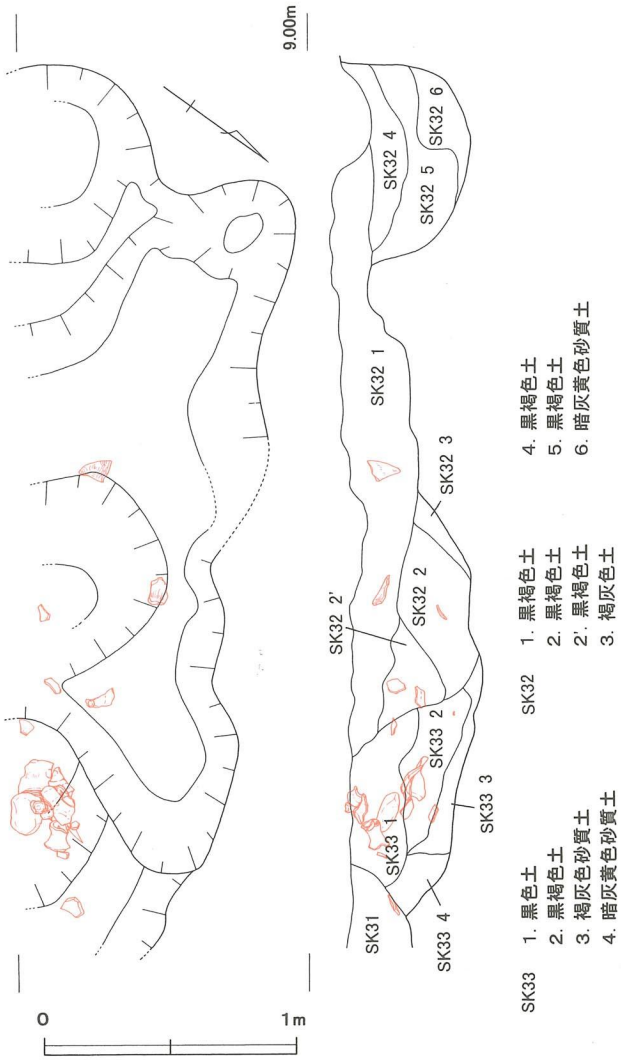
SK32（第44・45図）

12Grの調査区南壁際標高8.85ｍの調査面で、弥生時代の遺構であるSK33を切った状態でSK32を確認した。平面プランはいびつであるが、覆土の1層を掘削すると下位に径80cm程度の2穴の土坑状落ち込みと、径40cm程度の1穴のピット状落ち込みを検出した。

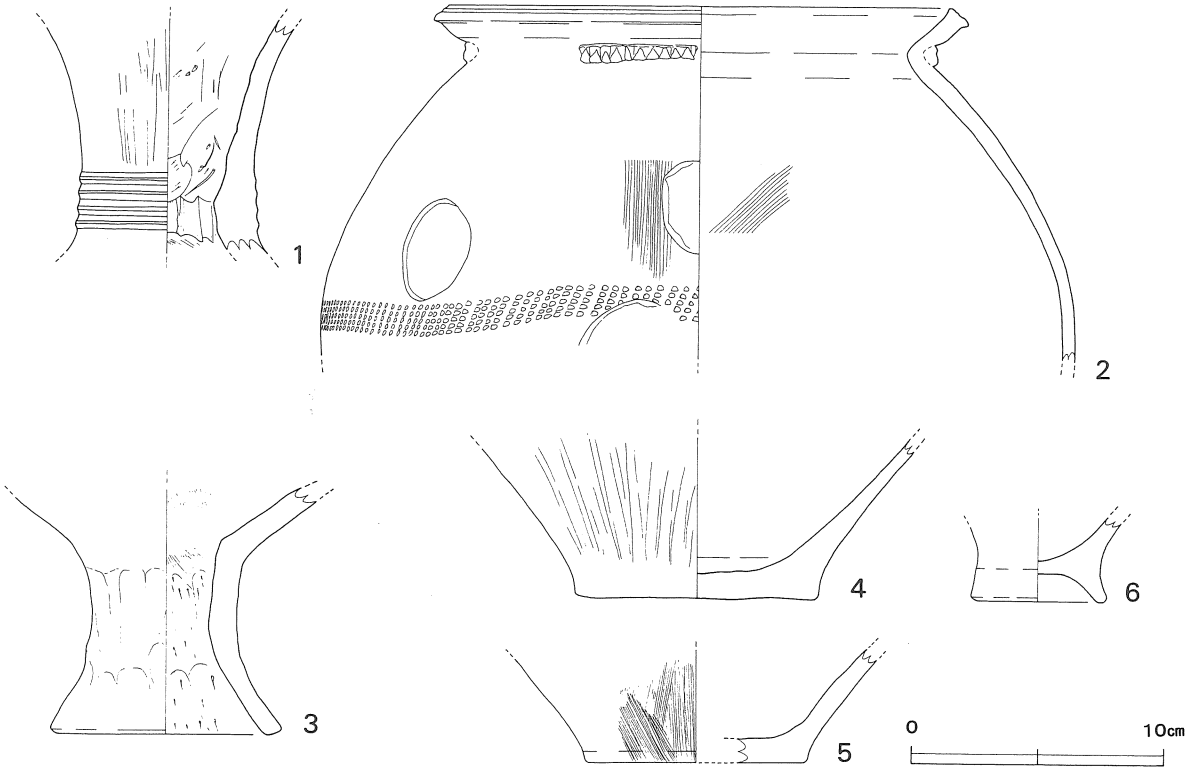
大きく6層に分層できる覆土からは、第1層を中心に弥生土器、土師器、須恵器など破片がビニール袋半分程度出土する。弥生土器片の占める割合が最も高いが、これはSK33を撹乱した際



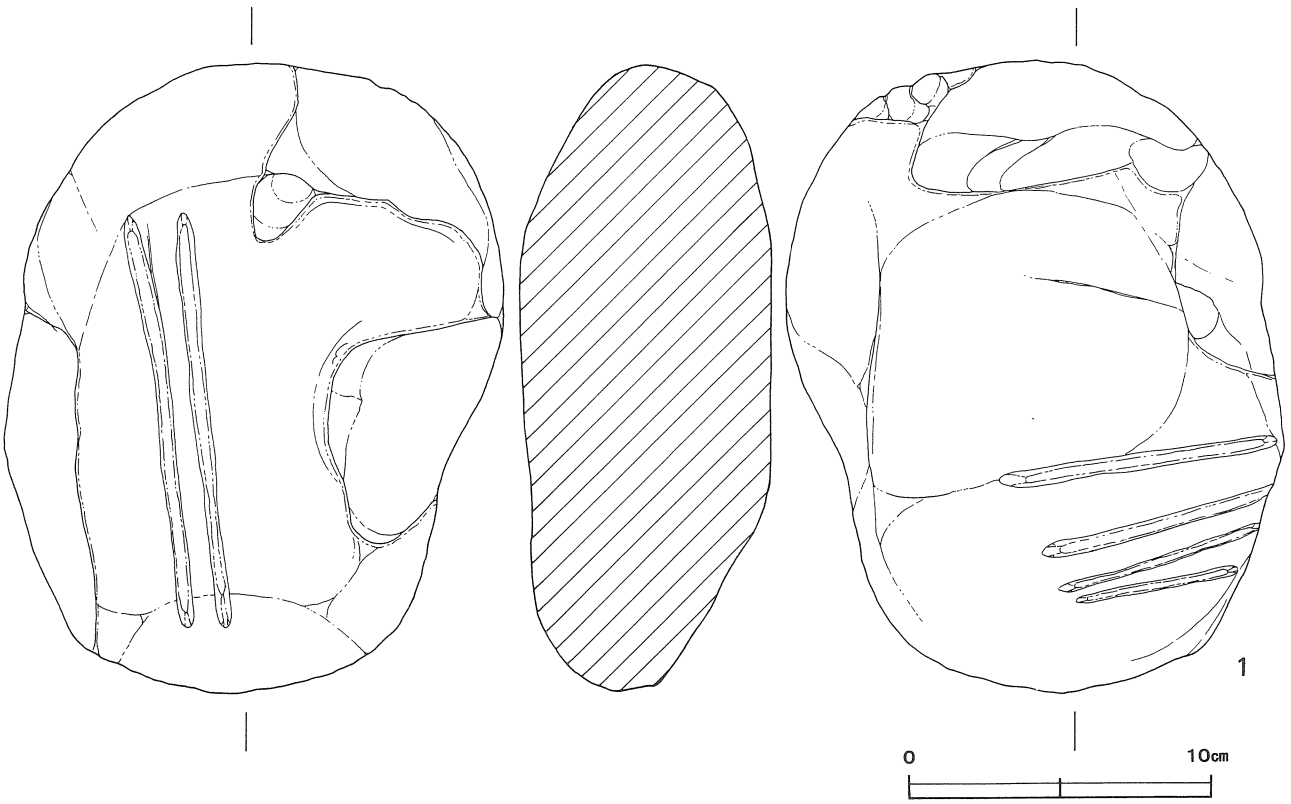
第45図　SK32出土陶器実測図（1：3）



第44図　SK32・SK33実測図（1：30）



第46図　SK33出土弥生土器実測図（1：3）



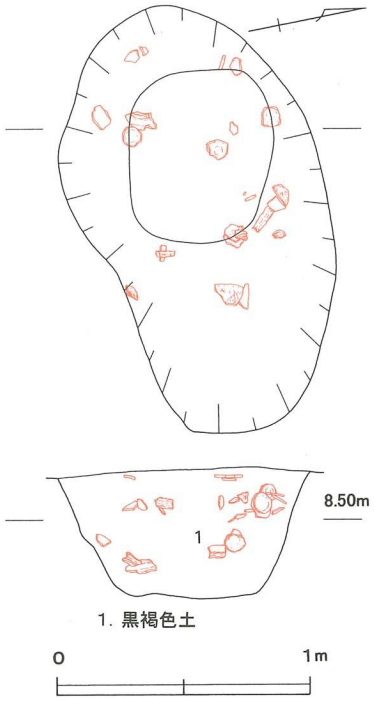
第47図　SK33出土石製品実測図（1：2）

に混入したものと思われる。45-1に示す唐津焼は唯一出土した陶磁器である。17世紀の所産と考えられ、遺構の時期の下限を示している。

SK33（第44・46・47図）

12Grの調査区南壁際標高8.84mの調査面でSK33を確認した。SK31とSK32に切られているため、ごく一部の検出にとどまったが土坑であると考えられる。断面の観察から規模は、長さ130cm程度、深さ50cmと推定され、幅については70cm程度を測ると思われる。

4層観察できる覆土からはビニール袋1袋程度の弥生土器片が出土しており、実測可能なものはすべて46-1～46-6に図示した。いずれも、松本Ⅳ期の範疇に収まるものと考えられることから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と推定できる。また、土器片の他に47-1に示す石製品が1点出土している。扁平な石英安山岩の筋砥石で、両面に複数の条溝が残る。

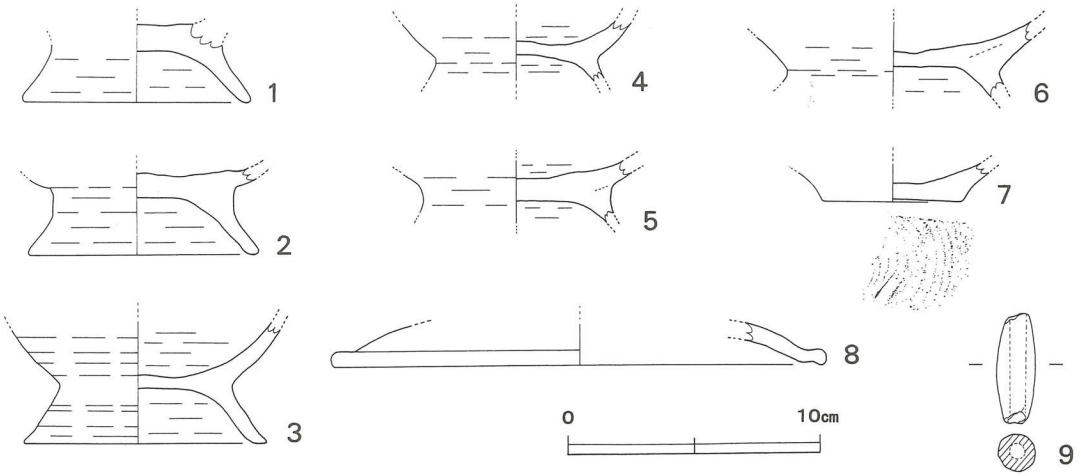


第48図　SK34実測図（1：30）

SK34（第48・49図）

8Grの標高8.70mの調査面で、P0807に切られ、SK28とSD19を切っているSK34を確認した。遺構上端の平面プランは楕円を呈するが、坑底は径65cm程度の不整な円形に収まっている。N-87°-E方向に長軸をとり、検出規模は長径173cm、短径100cm、深さ52cmを測る。坑底は平坦で、東側を除く側壁の立ち上がりは急である。

覆土は2層観察でき、ここからビニール袋2袋分の土師器、須恵器の破片などが出土したが、土師器片の割合が高い。49-1～49-6は「ハ」字状に開く高い高台を有しており、11世紀の所産と考えられ、遺構の時期を示す資料である。49-8は高広ⅣB期に相当すると思われる須恵器の蓋であるが混入品であろう。49-9は土錘で、1区においてはSK12からも1点出土している。なお、図化にあたっては選別を行っている。



第49図　SK34出土土器・土製品実測図（1：3）

ピット（第50・51図）

P0201は標高8.28ｍの地山面で確認した。検出規模は長さ76㎝、幅29㎝、深さ22㎝を測り、平面プランは細長い形状を呈する。N-69°-E方向に長軸をとり、この延長線上で約240㎝離れた地点にはP0202・P0203が位置していることから、これらは一連の遺構であることが指摘できる。覆土からは51-1に示す土師器の坏のほか、土器の小片が数点出土している。これらから遺構の時期は中世以降と推定できる。

P0409は標高8.61ｍの地山面で確認した。調査区南壁際で半分程度の検出にとどまったが、N-54°-E方向に長軸をとるとみられ、長さ91㎝、幅32㎝以上、深さ28㎝を測る。3層に分層可能な覆土からは、51-2に示す弥生土器片が出土している。草田1期に相当するものだが、土師器や須恵器の小片が同時に数点出土しているため、遺構の時期を示すものではない。

P0502は標高8.45ｍの地山面で検出した不整な円形のピットであり、径60㎝、深さ48㎝を測る。覆土からの出土遺物は、図示遺物のほかには土師器の小片1点のみである。51-3は草田6期～7期に相当する甕であるため、遺構の時期は古墳時代初頭以降であろう。

P1302は標高8.77ｍの調査面でSK16を切った状態で検出した。N-75°-E方向に長軸をとる細長いピットで、長さ124㎝、幅41㎝、深さ17㎝を測る。覆土からは20点程度の土師器片が出土したが、磨滅したごく小片がほとんどであり、実測に耐える遺物は51-4・51-5に図示した2点を数えるに過ぎない。比較的大きな破片である前者は12世紀前後の所産と思われ、遺構の時期を推定する資料になり得よう。

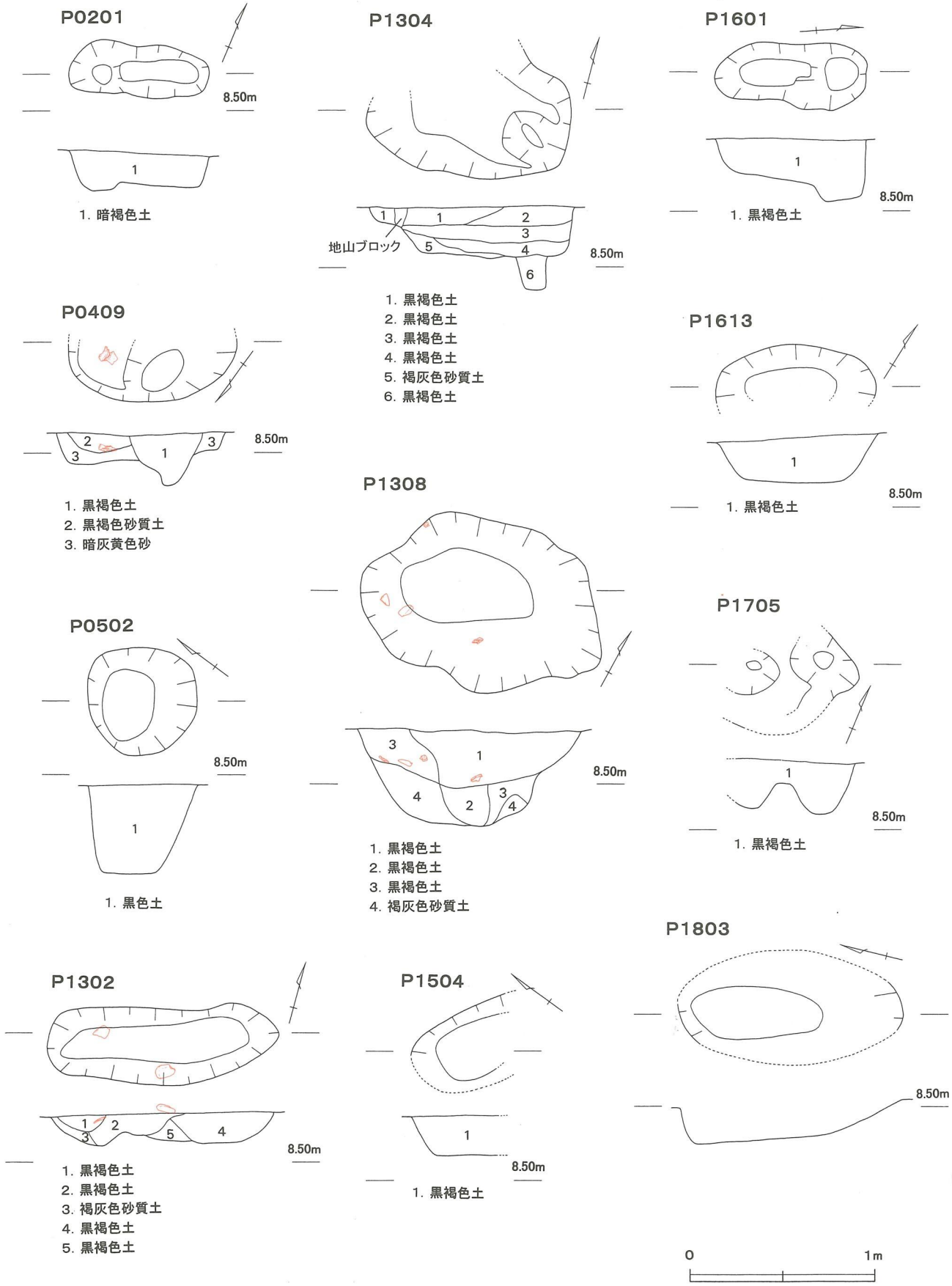
P1304は標高8.83ｍの調査面で他の遺構を切った状態で確認した。調査区北壁際での検出であったため、規模、形態などにおいて不明な点が多いが、深さ26㎝を測る坑底には、小さな落ち込みが1穴観察できた。覆土からはビニール袋半分弱の土師器、須恵器の破片が出土した。51-6は高広Ⅳ期に相当する須恵器の皿で、遺構の時期も同時期頃と思われる。

P1308は標高8.78ｍの調査面で他の遺構を切った状態で確認した。不整な平面プランを呈するが、N-61°-E方向に長軸をとると思われ、検出規模は長さ125㎝、幅95㎝、深さ52㎝を測る。覆土からは土師器を中心とする土器片がビニール袋半分弱出土した。51-7は須恵器の皿であり、51-8は底面に回転糸切り痕を残す土師器の坏である。他の小片も勘案し平安時代までの遺構であろう。

P1504は標高8.85ｍの地山面でSD11に切られた状態で検出した。深さ22㎝を測り、N-63°-W方向に長軸をとる細長い平面プランを呈すると思われるが、ごく一部の検出にとどまったため不明な点が多い。覆土からは51-9・51-10に示す松本Ⅳ-2期と草田1期の弥生土器が出土しているため、遺構の時期もこの頃と推定できる。

P1601は標高8.88ｍの地山面で確認した。N-4°-E方向に長軸をとる細長い平面プランを呈し、検出規模は長さ82㎝、幅33㎝であり、深さについては北寄りが最も深く33㎝を測る。覆土からは数片の土師器のほか、51-11に示す須恵器の坏が出土した。高広ⅣA期に相当するもので、遺構の時期を示す資料であろう。

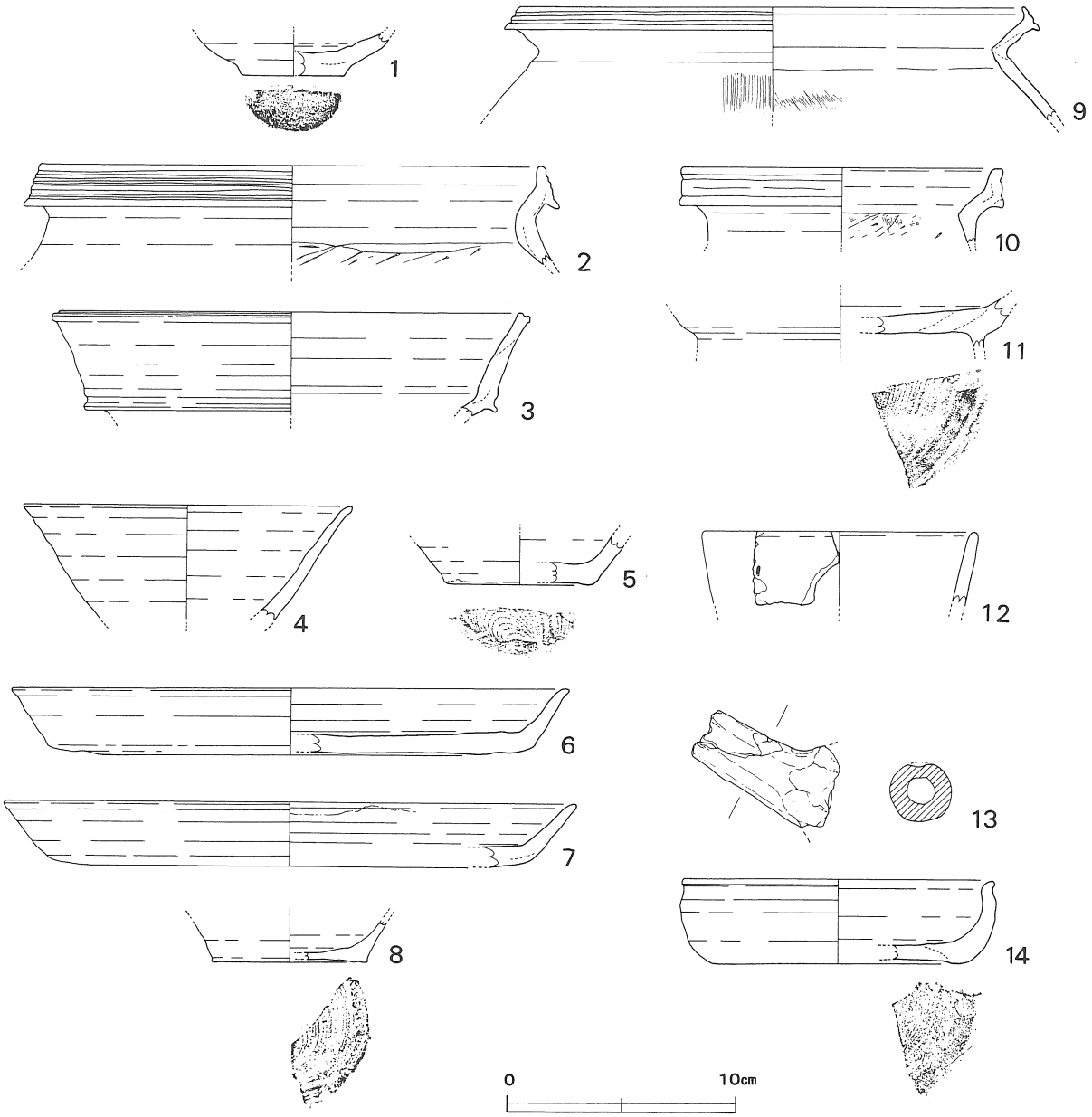
P1613は調査区南壁際標高8.90ｍの地山面で確認した。半分程度の検出にとどまったがN-58°-E方向に長軸をとり、長さ87㎝、幅30㎝以上、深さ24㎝を測る細長い遺構と思われる。覆土からは数片の土師器片のほか、51-12に示す陶器が出土している。近世の所産と思われ、遺構の時期を示すと考えられる。



第50図　主要ピット実測図（1：30）

P1705は標高8.86mの地山面で検出した。他の遺構に切られ、また、調査区北壁際に位置していたため、規模などについては不明な点が多いが、深さ28cmの二つの落ち込みにより構成される遺構である。覆土からは弥生土器あるいは土師器の小片が数片出土したほかに、51-13に示す注口土器の注口部が出土している。出土遺物の絶対数が少ないため、遺構の時期を推測するのは困難である。

P1803は標高8.50mのSD10の底で検出した。本来はSD10に切られていたと思われるが、断面による切り合い関係の確認を行っておらず、また、SD10に出土遺物がなく、遺物による新旧の裏付けもできないため明言はできない。SD10の底からさらに20cm程度の深さで掘り込まれた坑底から推測すると、P1803はN-10°-W方向に長軸をとる長さ120cm、幅60cm程度を測るものと思われる。覆土からは土師器、須恵器の小片が少量出土した。51-14は高広ⅣA期の坏であり、遺構も同時期頃のものと思われる。



第51図　主要ピット出土土器実測図（1：3）

溝状遺構

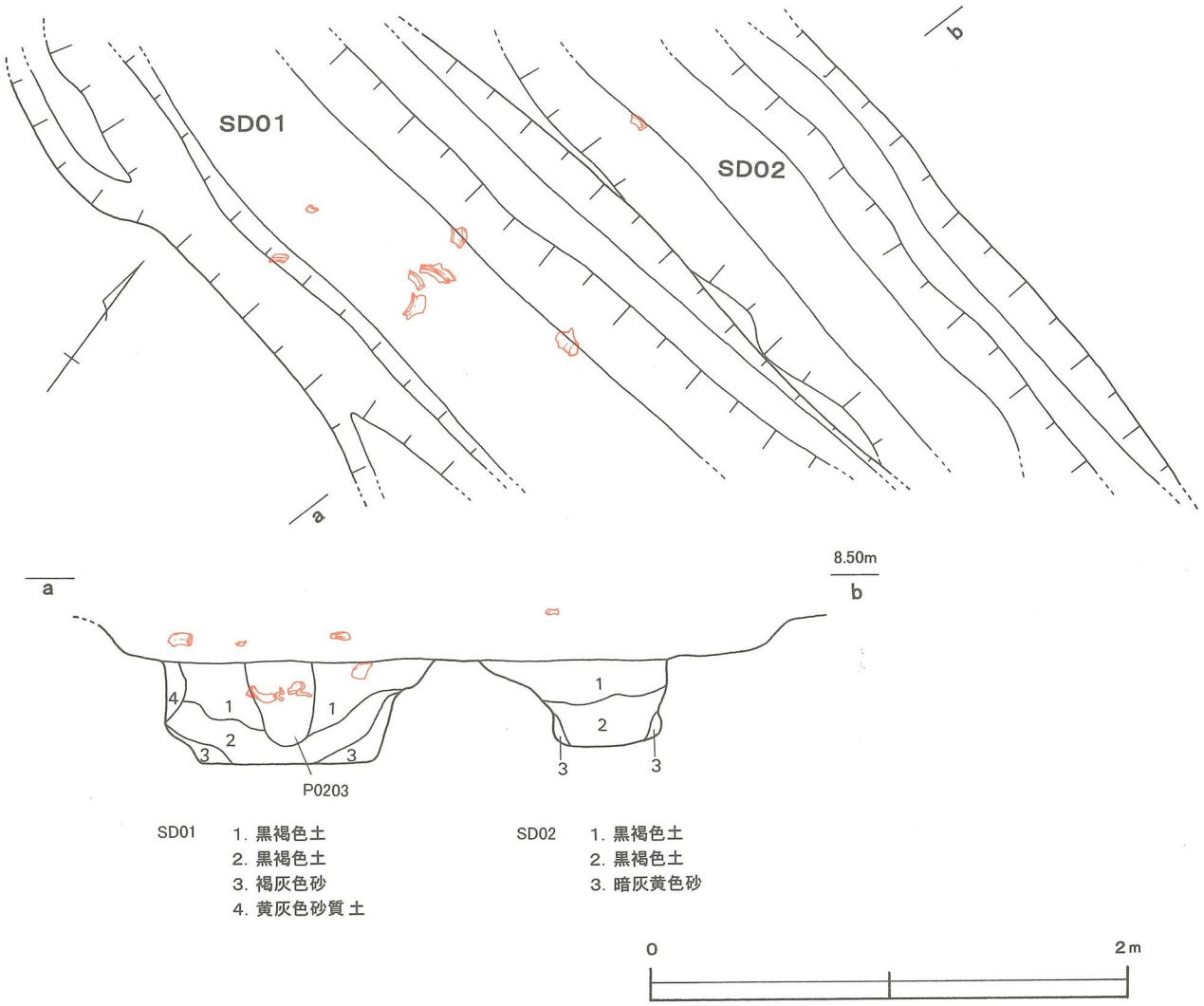
SD01・SD02（第52～54図）

1Grから2GrにかけてSD01・SD02を検出した。標高8.34mの地山上での遺構検出時には幅3m規模の大溝として捉えていたが、覆土を徐々に取り除くと2条のほぼ並行する溝状遺構が確認できたため、西側をSD01、東側をSD02と命名した。調査区北壁で断面を観察したところ、明確ではないものの切り合い関係が認められ、SD01がSD02を切っていると推定できた。両者とも調査区を横切っているため、長さ240cm程度のごく一部の調査にとどまったが、ともにN-80°-W方向に軸をとるようである。

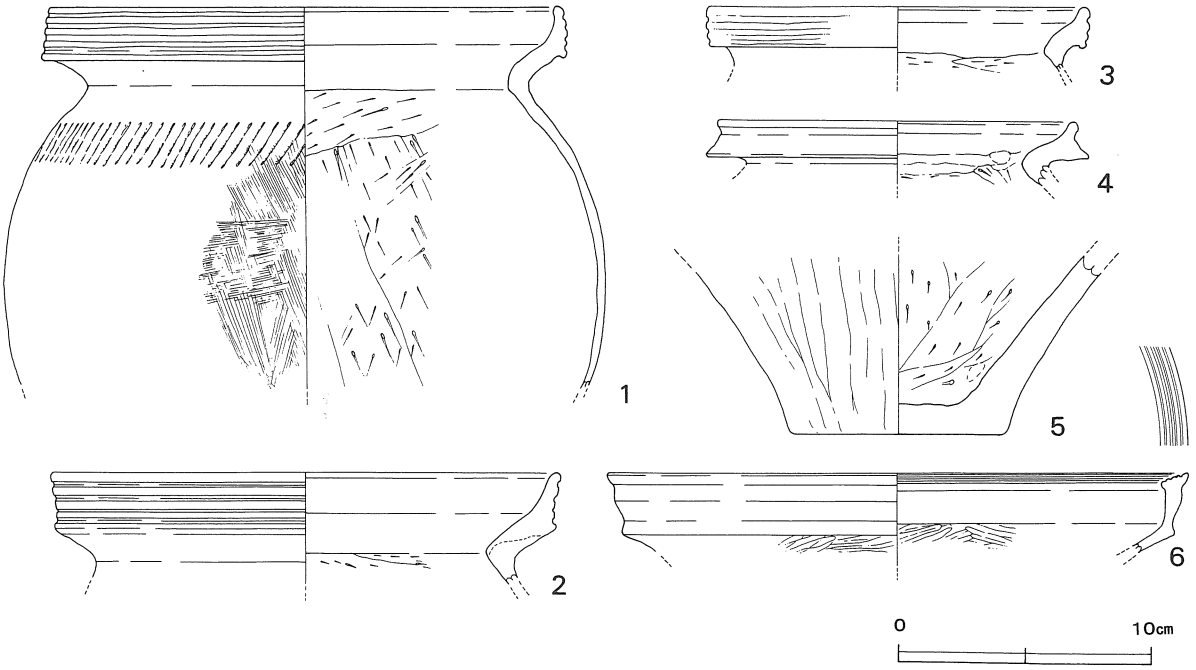
SD01の検出規模は上幅115cm、下幅70cm、深さ44cmを測り、標高7.72mで平坦な底を有している。側壁は中ほどで若干変化するものの、急勾配で立ち上がる。したがって、断面は不整形ではあるが台形を呈している。

4層に分層可能な覆土を観察すると、2回以上の掘り返しが行われたとが推定できる。なお、SD01はP0203により切られていた。

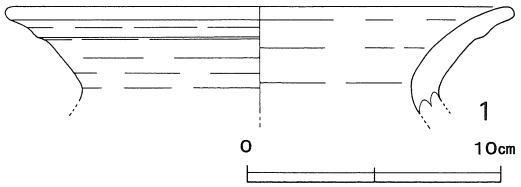
覆土中からはビニール袋半分程度の土器片が出土している。内訳は弥生土器、土師器、須恵器であ



第52図　SD01・SD02実測図（1：30）



第53図　SD01出土弥生土器実測図（1：3）



第54図　SD02出土須恵器実測図（1：3）

るが、弥生土器が量的に多く、破片も比較的大きい。53-1～53-4は弥生土器の甕である。53-1～53-3は直立する口縁部の外面に数条の凹線文を巡らせており、53-1については肩部外面には列点文が観察できる。53-4は口縁部が内傾気味に立ち上がり、外面は強くナデつけられているため凹面状を呈している。いずれも、内面には頸部までケズリ調整が施されており、草田1期～2期に相当するものと考えられる。53-6は吉備系の高坏であり、松本Ⅳ-2に相当するものであろう。図示遺物以外にも弥生時代土器片は多数認められるが、最下層の第3層で土師器や須恵器が出土していることを勘案すると、遺構の時期は古墳時代から平安時代までと推定せざるを得ない。したがって、出土した弥生土器片は後世に付近から混入したものと考えられる。

SD02の検出規模は上幅78cm、下幅32cm、深さ36cmを測り、標高7.78cmで若干丸味を帯びた底を有している。側壁の立ち上がりは東壁では急であるが、西壁では比較的緩やかである。

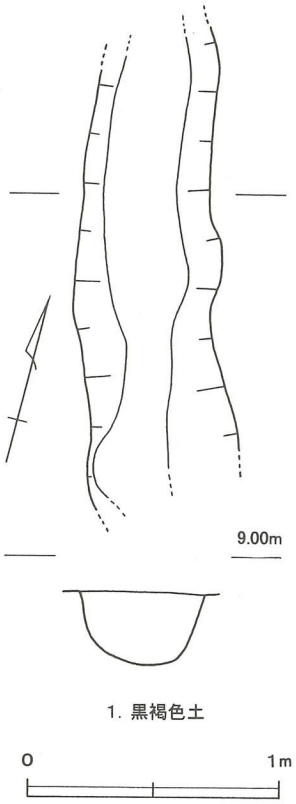
覆土が3層認められることから、2回程度の掘り返しがあった可能性がうかがえる。この覆土からは中期の弥生土器片など数点の土器片が出土しているが、いずれも小片である。54-1は須恵器の壷口縁部片であるが、出土遺物の絶対数が少ないため、遺構の時期を示す資料にはなり得ない。

なお、SD02は田畑遺跡の最東端で検出した遺構であり、これ以東で地山の標高は徐々に下る。

SD05（第55・56図）

17Grの標高8.86cmの地山面でSD05を検出した。N-14°-W方向に軸をとると思われるが、平面プランはやや蛇行しているようである。この遺構も調査区を横切っているため、長さ180cm程度のごく一部の調査にとどまっているが、検出規模は上幅50cm、下幅30cm程度、深さ29cmを測り、標高8.57mで丸味を帯びた底を有している。

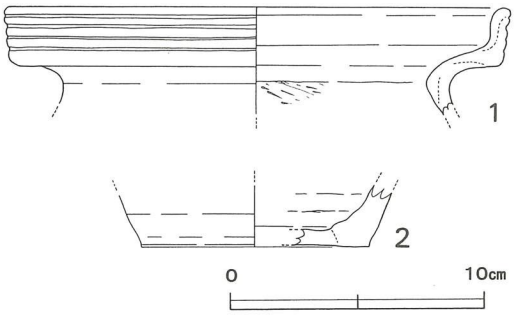
覆土は1層のみ観察でき、ここから弥生土器、土師器、須恵器、陶器の小片が十数点出土している。56-1は草田1期に相当する甕であり、頸部以下の内面にはケズリ調整が施されている。56-2は陶器の底部片であり出土遺物の中では最も新しいものである。陶器はこの1点限りの出土であり、他の遺物と比較し時期に著しい開きがあることから、混入したものとも考えられる。



第55図　SD05実測図（1：30）

SD06（第57～59図）

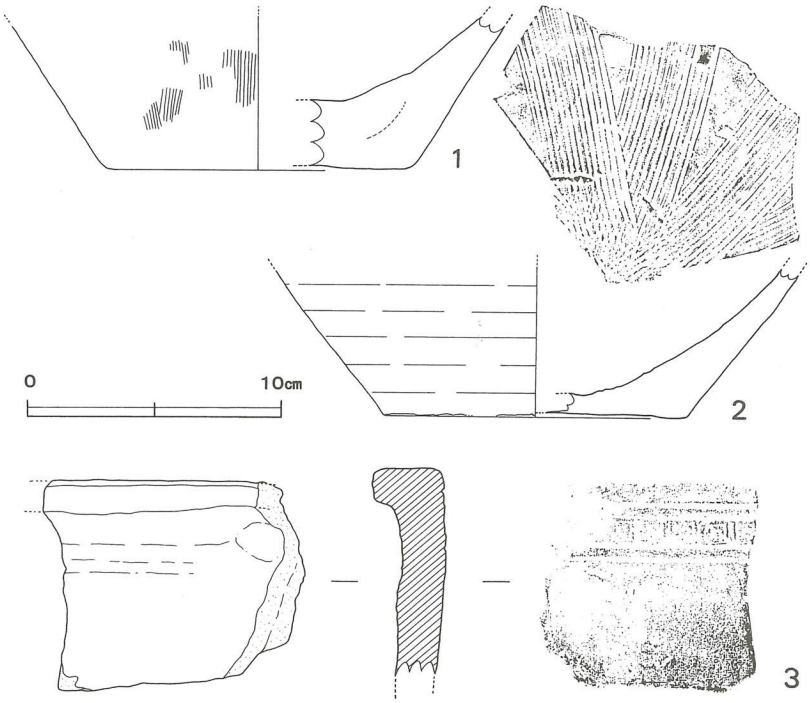
SD06は16Grの標高8.94mの調査面において、他の遺構を切った状態で検出した。調査区を横切っているため、長さ185cmのごく一部の調査にとどまったがN-14°-W方向に軸をとるようである。検出規模は上幅70cm、下幅50cmを測り、標高8.82mで平坦な底を有している。遺構の性格については、多数の石が詰め込まれていることから暗渠である可能性も指摘できよう。



第56図　SD05出土土器実測図（1：3）

石の狭間あるいは覆土からは、弥生土器、土師器、須恵器、陶器の破片がビニール袋半分程度出土している。58-1は弥生土器の底部片であり、厚い底を有している。58-2は肥前系の擂鉢である。14条

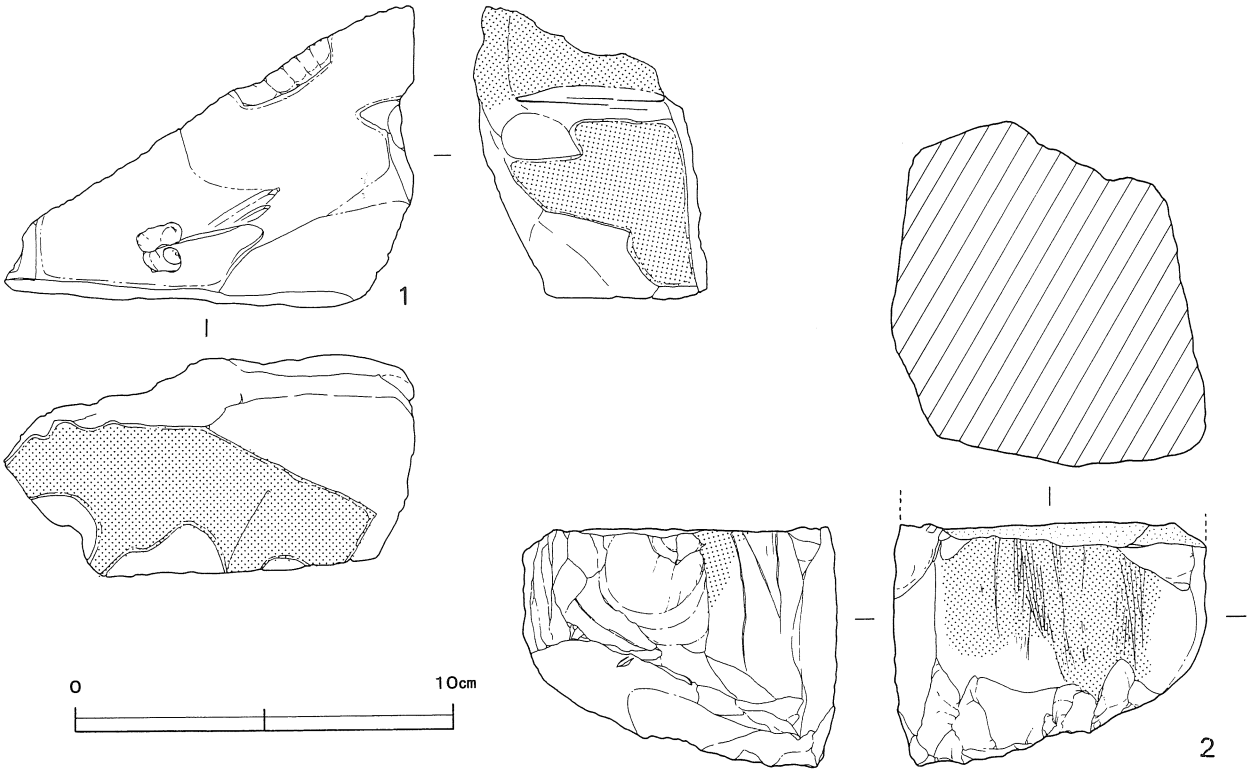
第57図　SD06実測図（1：30）



第58図　SD06出土土器等実測図（1：3）

一単位の擂目を有しており、底面には回転糸切り痕が明瞭に残る。58-3は火鉢と思われるが、時期は不明である。外面は雷文と沈線により施文されている。59-1は砂岩製の砥石である。1面に磨り面を残し、他の面には切り込み状の条溝が観察できる。

なお、SD06とSD05は軸方向が同じであるため、関連する遺構である可能性もある。

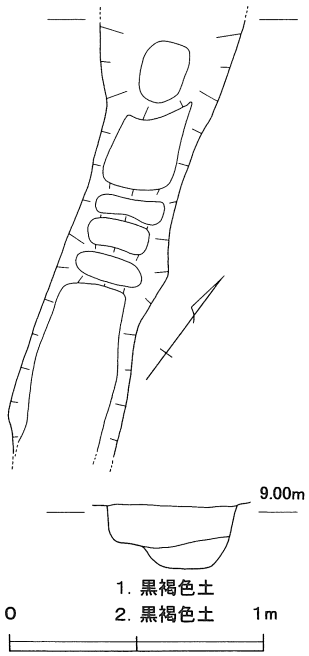


第59図　SD06出土石製品実測図（1：2）

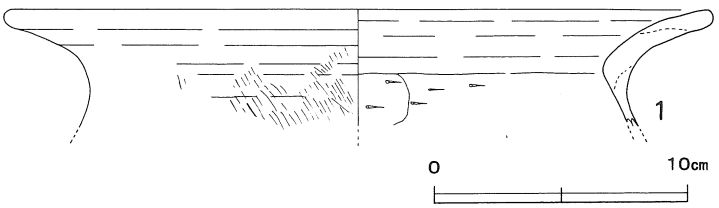
SD11（第60・61図）

15Grの標高9.03mの調査面でSD11を検出した。他の溝状遺構と同様に調査区を横切っているため、長さ180cmのごく一部の調査にとどまっている。N-21°-W方向に軸をとると思われ、検出規模は上幅35cm～55cm、下幅30cm、深さ15cm程度を測るが、部分的にさらに深くなる箇所も認められた。

覆土は2層観察でき、ここから十数点の土師器、須恵器の小片が出土した。61-1は土師器の甕である。口縁部は頸部から大きく外反して開口し、内面は頸部までケズリ調整が施されている。遺構の時期は他の小片も勘案し、古墳時代から奈良時代頃までと思われる。



第60図　SD11実測図（1：30）



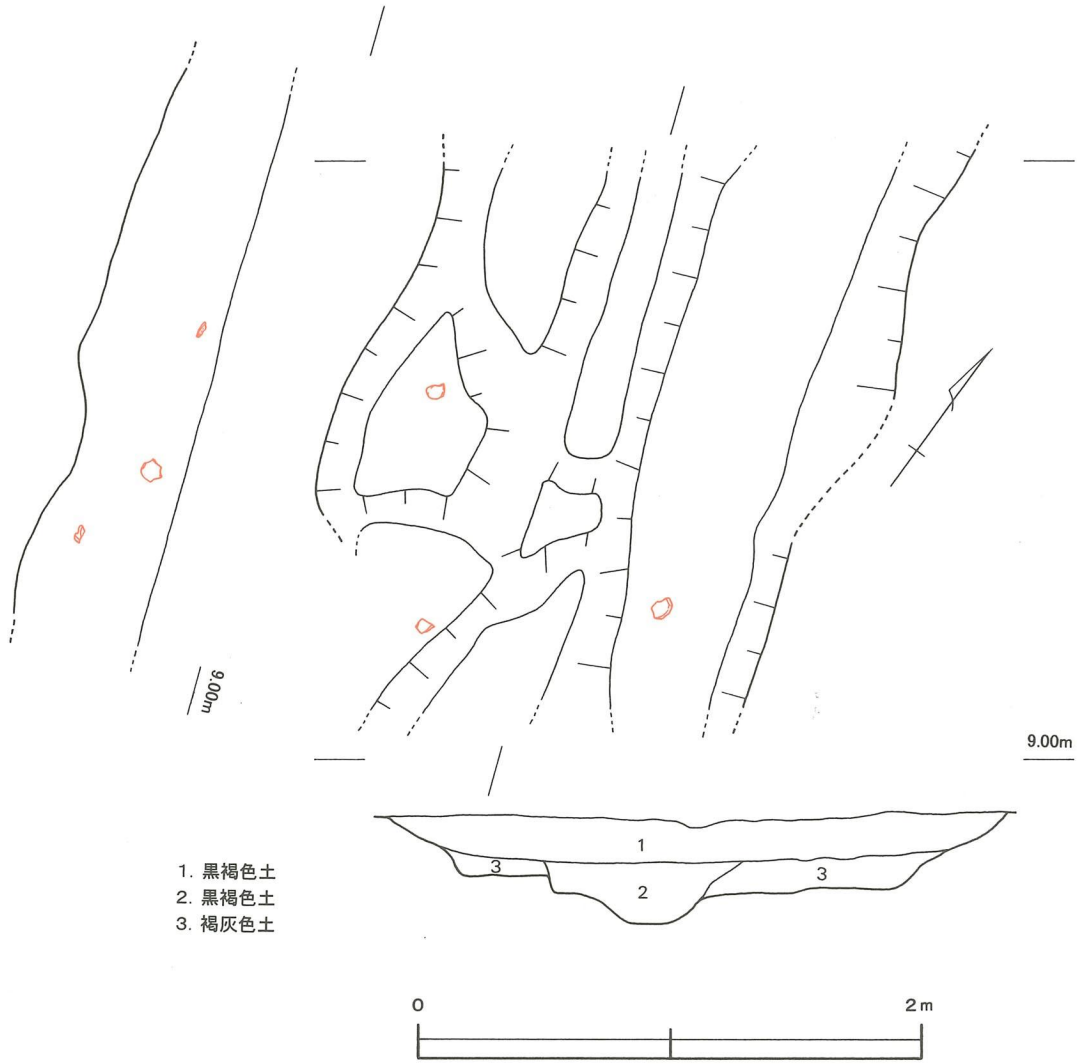
第61図　SD11出土土師器実測図（1：3）

SD12（第62・63図）

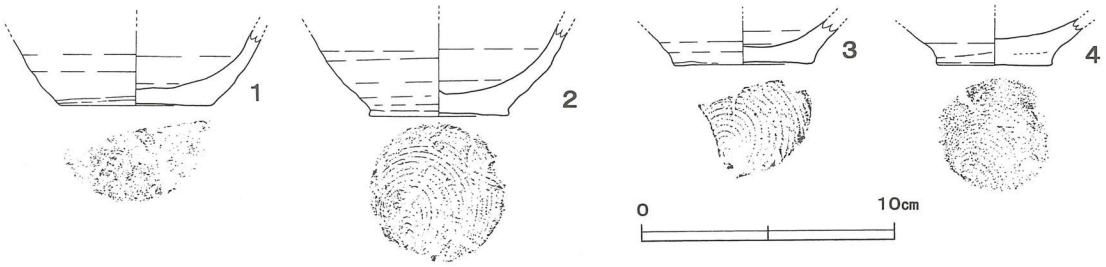
10Grから11Grにかけての標高8.78ｍの地山面において、SK17などにより切られた状態でSD12を確認した。調査区を横切っているため、長さ220cmのごく一部の調査に終始したが、N-21°-W方向に軸をとるようである。検出規模は上幅190cm、下幅20cm、深さ44cmを測り、標高8.34ｍで若干丸味を帯びた坑底を有する。また、遺構の東側では標高8.48ｍ付近で、西側では標高8.76ｍ付近で平坦な段を有していることを特徴としている。

遺構の性格については排水溝と考えられ、通常は遺構中央に流水があり、水かさが増した際に備えて上幅を広くしたものと思われる。また、調査区北壁で断面を観察すると、3層の覆土の切り合いが認められることから、掘り返しを繰り返して使用していたことがうかがえる。

覆土からはビニール袋半分強の土器の小片が出土した。これらは弥生土器、土師器、須恵器であり、土師器が大半を占めている。このうち実測可能なものは63-1～63-4に図示した4点である。いずれも土師器の坏底部片で底面には回転糸切り痕が残っており、平安時代後半の所産と思われる。これらは出土遺物の中でも下限のものであると同時に残存状態も比較的良いことから、遺構の時期を示す資料と言えよう。



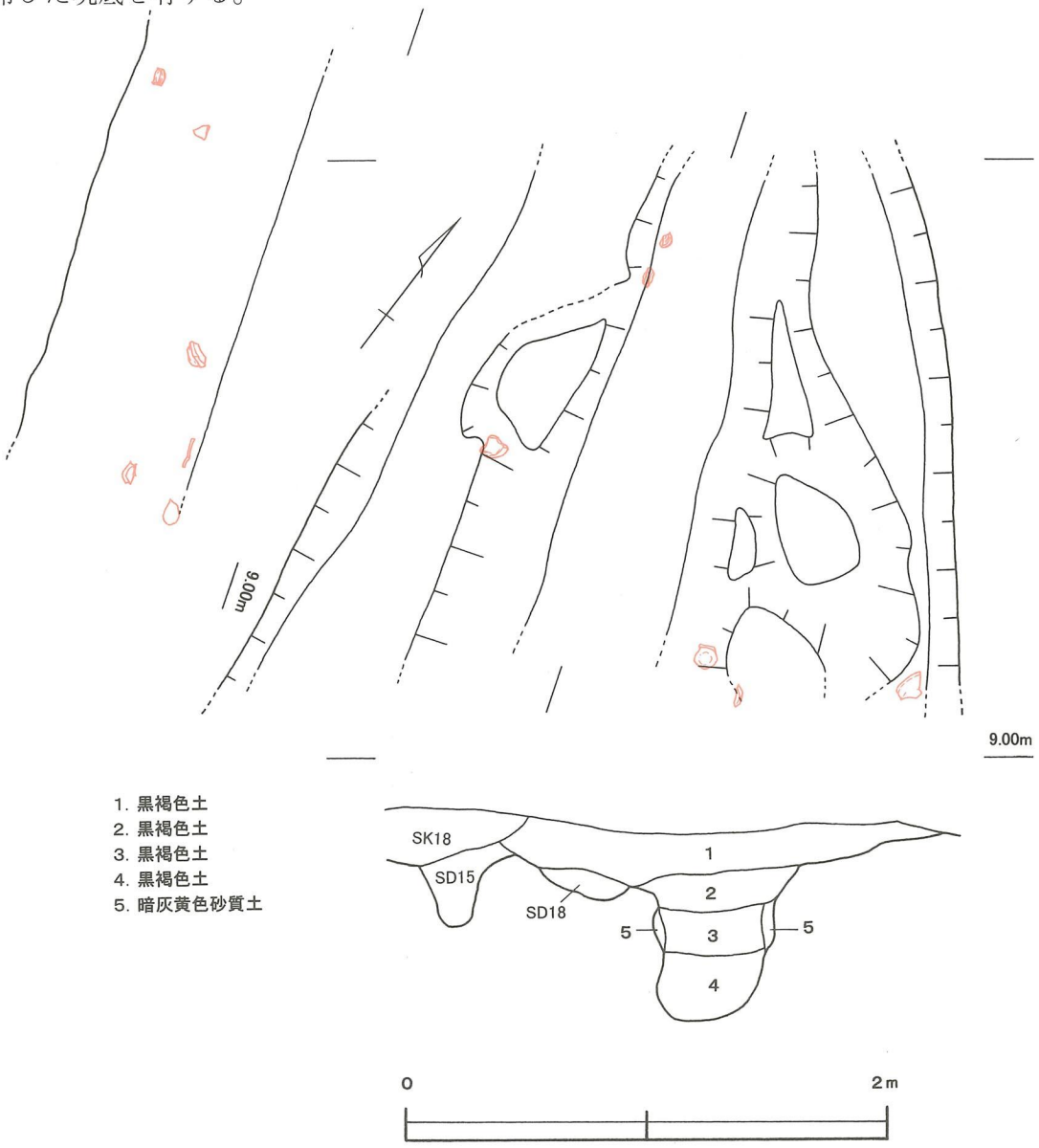
第62図　SD12実測図（1：30）



第63図　SD12出土土師器実測図（1：3）

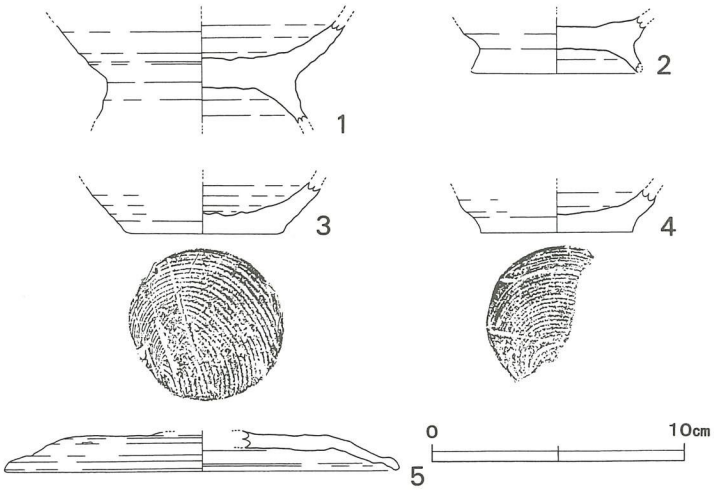
SD14（第64・65図）

9Grの標高8.70mの地山面において、SK18などにより切られた状態でSD14を検出した。調査区を横切っているため、長さ220cm程度のごく一部の調査にとどまったが、N-20°-W方向に軸をとるようである。平面プランは不整形であるが、断面は中央が深く落ち込む漏斗状を呈しており、この遺構の用途としては排水溝が考えられよう。検出規模は幅170cm～280cm、深さ80cmを測り、標高7.70m付近でやや丸味を帯びた坑底を有する。



第64図　SD14実測図（1：30）

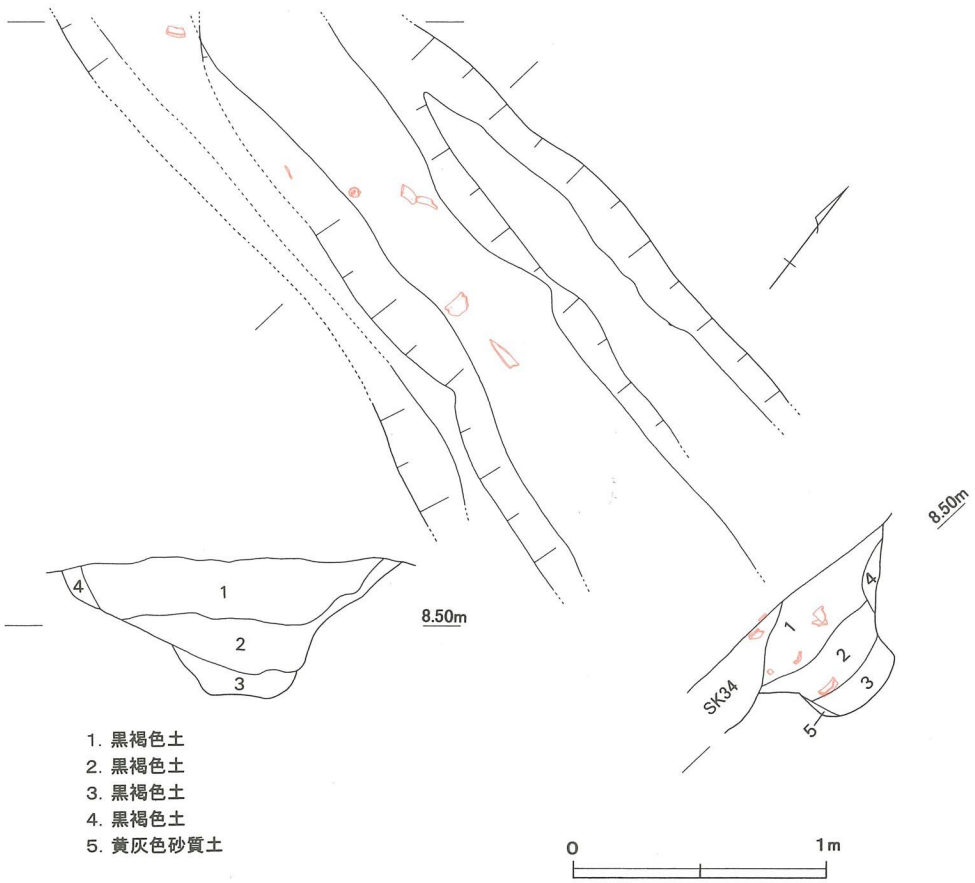
5層観察できる覆土からは、土器の小片がビニール袋2袋分出土している。これらは土師器、須恵器であり、土師器の割合が高い。65-1・65-2は土師器であり底面外縁に「ハ」字状に開く高台を有する。65-3・65-4も土師器である。底面に回転糸切り痕が残り、器壁は内湾して立ち上がる。65-5は須恵器の蓋であり、口縁端部が下方に若干引き出されている。これらはいずれも平安時代の所産と考えられる。また、他の小片についても各層毎で時期差は認められないことなどから、遺構の時期は平安時代後半と推定できる。なお、図示にあたっては選別を行っている。



第65図　SD14出土土器実測図（1：3）

SD19（第66・67図）

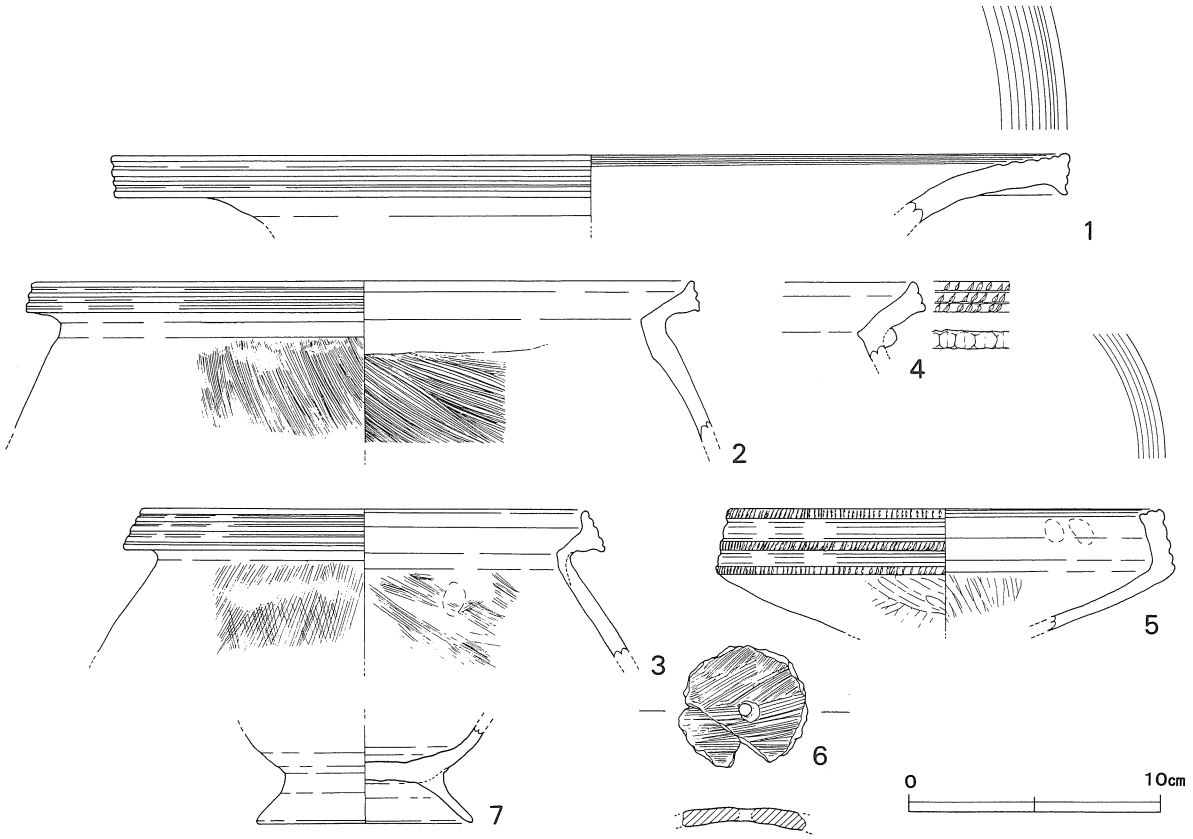
7Grから8Grにかけての標高8.75mの調査面でSD19を検出した。調査区を斜めに横切っており、また、SK34やSK27などによって切られているため、長さ250cm程度のごく一部の検出にとどまっている。N-73°-W方向に軸をとると考えられ、検出規模は幅110cm～140cm、深さ54cmを測り、標高8.21mで丸味を帯びた坑底を有する。側壁の立ち上がりは坑底から20cm程度の高さまでは急であるが、より上位では緩やかである。



第66図　SD19実測図（1：30）

覆土は5層観察でき、数回にわたり掘り返しが行われたようである。遺構の用途としては排水溝として機能したものと思われる。

覆土からはビニール袋半分程度の弥生土器、土師器、須恵器などの破片が出土しており、弥生土器の割合が高く、破片も比較的大きい。したがって、図示遺物は弥生土器が中心となった。67-1は広口壷であり、口縁部端面と内面に凹線文を巡らす。67-2～67-4は甕で、胴部内面にケズリ調整は認められない。67-5は高坏であり、口縁端面に2条の凹線文、外面に4条の凹線文と3段の刻目文を施している。67-6は紡錘車である。断面は反りを呈しており表面にはハケ調整が認められることから、甕胴部片を転用したものと推定できる。以上はいずれも松本Ⅳ期に相当するものである。67-7は土師器の坏である。底面外縁に「ハ」字状に広く開く高い高台が付き、11世紀の所産と考えられる。この他にも、土師器、須恵器は出土しているが、SK34などからの混入品であるとも考えられ、また、弥生土器片は松本Ⅳ期の範疇に収まり比較的残存状態も良い。したがって、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。



第67図　SD19出土土器・土製品実測図（1：3）

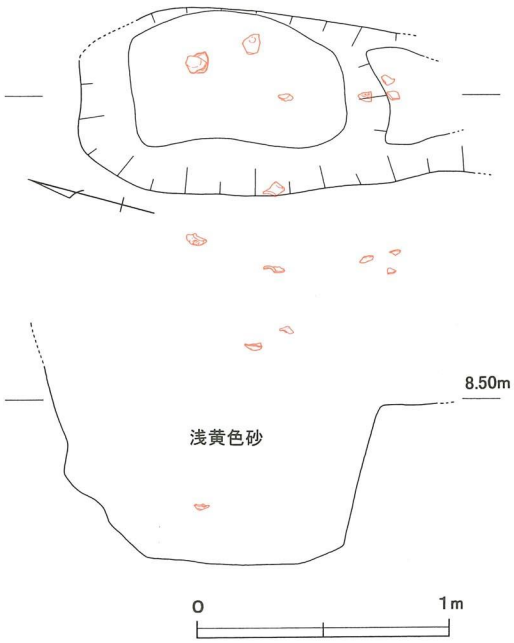
その他の遺構

SX02（第68・69図）

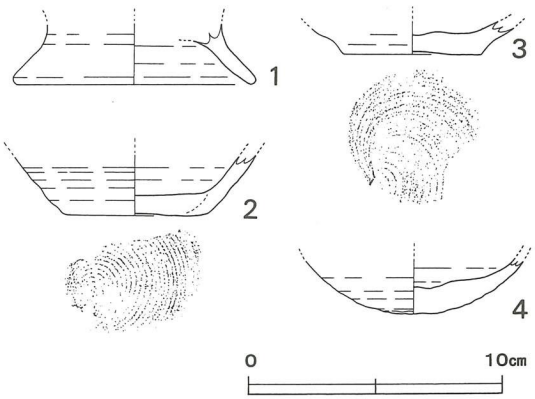
7Grの標高8.75mの調査面において、SK27などを切った状態でSX02を検出した。調査区南壁以南にも遺構が続いているため一部の調査にとどまったが、N-15°-W方向に長軸をとるようである。検出規模は、長さ155cm以上、幅73cm、深さ92cmを測り、標高7.83mで平坦な坑底を有している。遺構の北

寄りで深く、南寄りでは浅く落ち込むことを特徴とするが、遺構の用途については不明である。また、検出面より上位で遺物がややまとまって出土していることから、深さについては実測値以上になる可能性が高い。

覆土は地山に似た浅黄色砂であり、ここからビニール袋半分程度の土器片が出土した。これらは、弥生土器、土師器、須恵器の小片であり、土師器が大半を占めている。実測に耐えるものは少なく、図示した4点を数えるに過ぎない。69-1は土師器の坏の高台部分である。「ハ」字状に広く開き、11世紀の所産と思われる。69-2・69-3に示す土師器の坏には、底面に回転糸切り痕が観察できる。63-4は須恵器の蓋坏である。回転ヘラ起しにより切り離しが行われていおり、古墳時代のものと思われる。他の小片も含めて遺物の上限は中世までと思われるが、出土遺物の時期にはばらつきがあるため、遺構の時期を推定するのは困難である。



第68図　SX02実測図（1：30）



第69図　SX02出土土器実測図（1：3）

1区遺構外の出土遺物

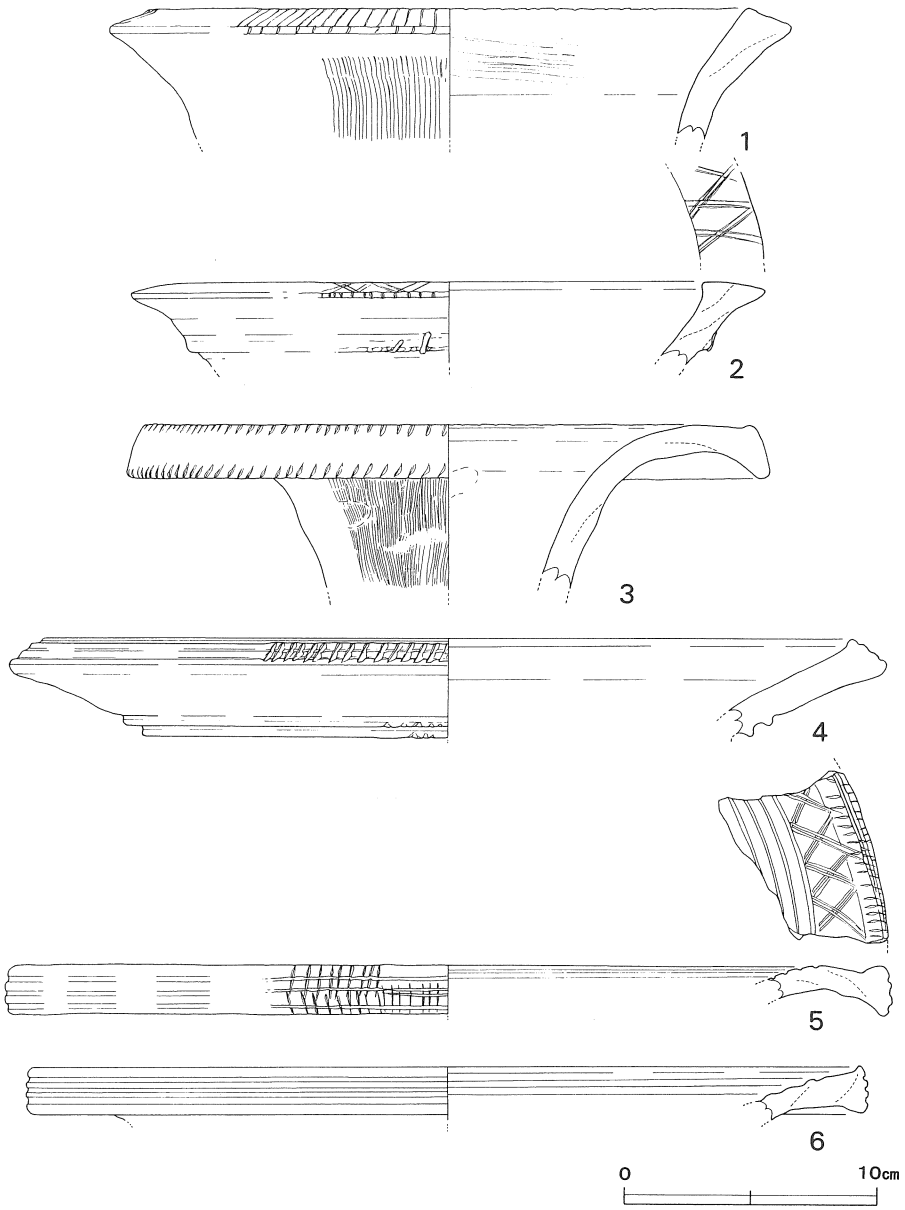
1区は他区と比較し遺構外出土遺物の量が最も多かった。これは1区が田畑遺跡の東端付近に位置し、地山の標高も低いことから、西方から遺物が流れ込んだためと考えられる。その出土量はコンテナ3箱分にのぼり、内訳は中世土師器コンテナ2箱分、須恵器コンテナ1箱弱、弥生土器ビニール袋3袋程度、土製品若干、陶磁器若干、石製品若干である。このほか釘と思われる鉄の棒状小塊、炭なども出土しているが、時期が判然としないため、以下の報告では割愛している。

遺構外遺物は、遺構検出のため地山直上層を掘削中に出土したものがほとんどであるが、精査時に調査面直上で発見したものも含んでいる。よって、本来遺構覆土の上層中にあったものが、遺構外出土遺物として取り扱った場合もあり得る。

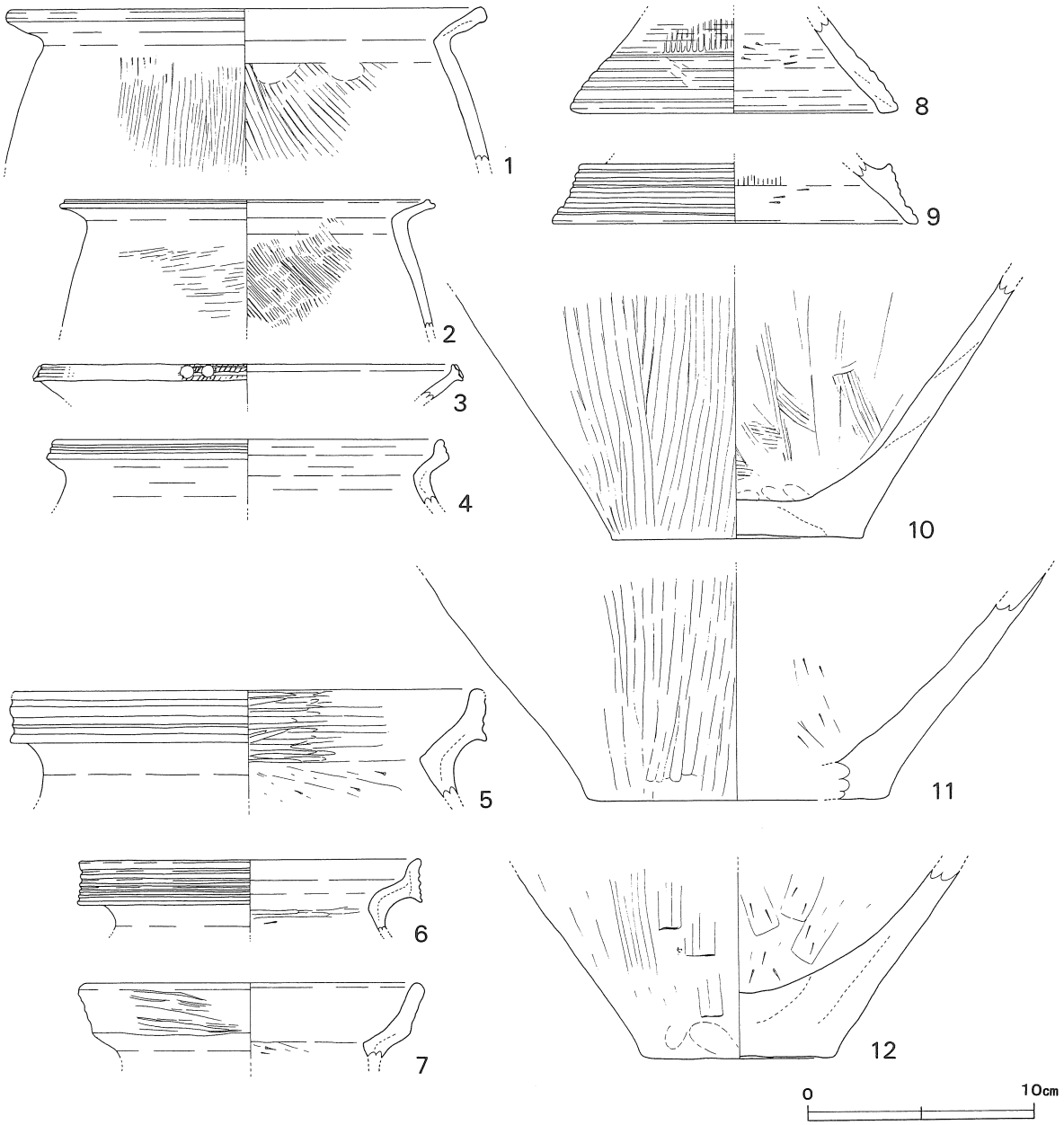
弥生土器（第70・71図）

弥生土器は中期中葉から後期中葉のものが出土するが、中期後葉から後期前葉までのものが比較的多い。図化に耐えるものはほとんど図示しているが、時期観に影響を与えないことを考慮し、若干割愛したものもある。

70-1～70-6には壷の口縁部片を取り上げた。70-1・70-2は長頸壷であり、両者とも口縁端部が肥厚し端面に施文されている。中期中葉のものと考えられる。70-3～70-6は広口壷である。いずれも中期の範疇に収まるものであろう。71-1～71-7は甕である。中期中葉から後期前半のものと考えられる。71-8・71-9は脚部片である。前者は中期後葉、後者は後期初頭の所産と考えられる。71-10～71-12は壷の底部片と思われる。71-10が内面ハケ調整であるのに対し、71-11・71-12はケズリ調整である。



第70図　1区遺構外出土弥生土器実測図1（1：3）

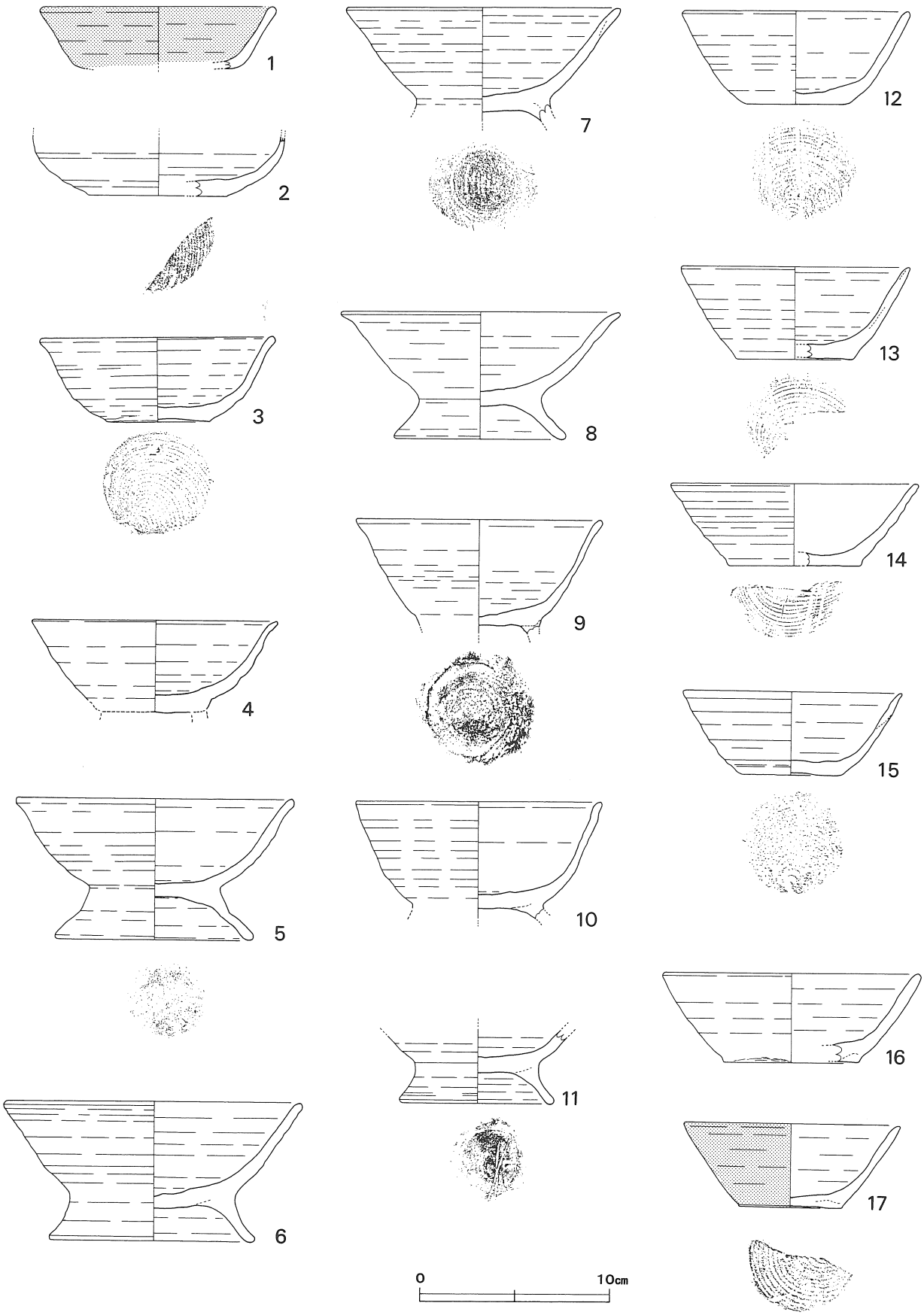


第71図　1区遺構外出土弥生土器実測図2（1：3）

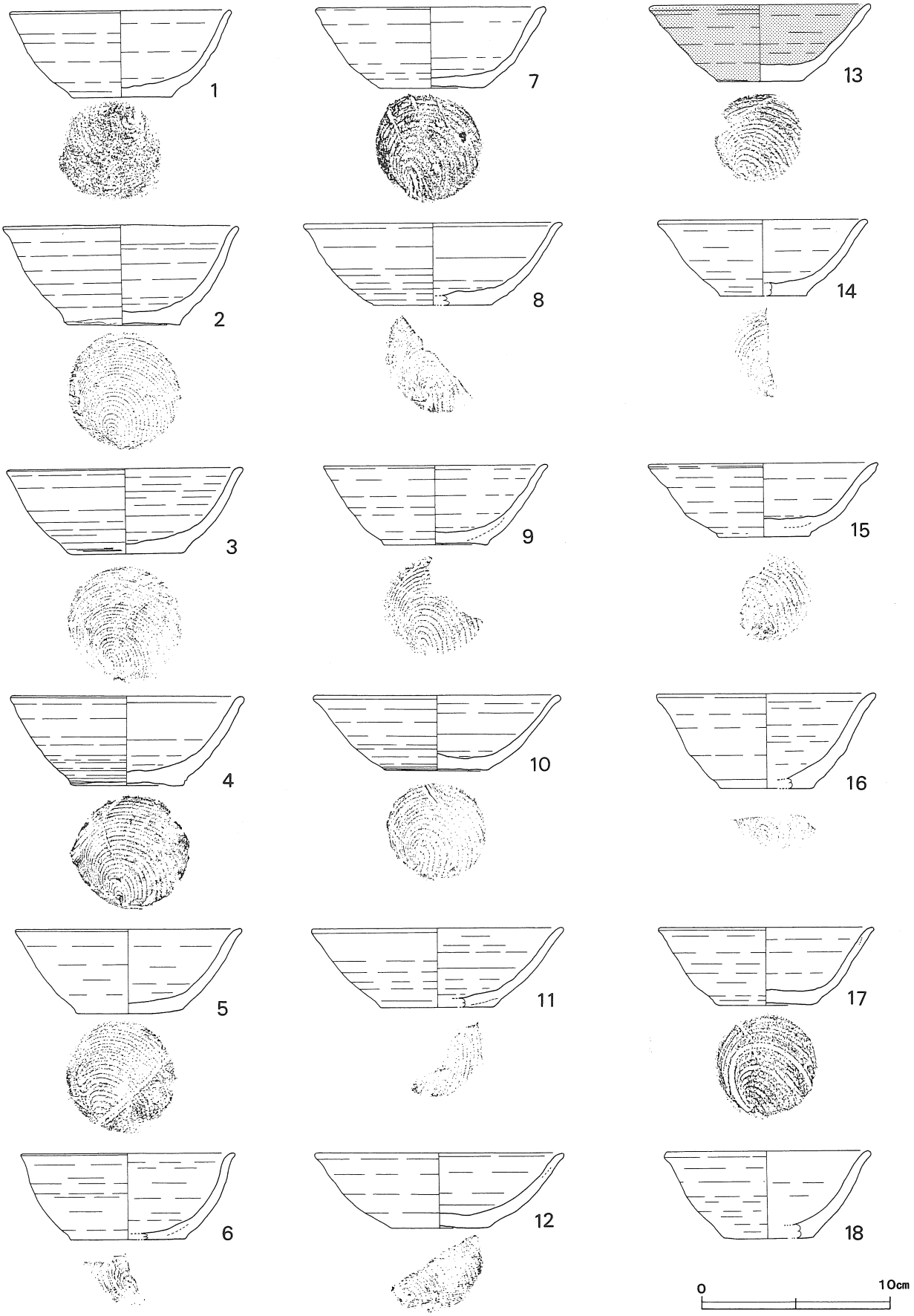
土師器（第72～74図）

土師器は坏、皿、甕などの器種が出土しているが、坏が圧倒的多数を占めている。遺構外から出土する土師器の上限は奈良時代であるが、これらは量的に少ない。最も多く出土したのは12世紀前後の坏で、残存状態も良いことから中核期を示すと言えよう。なお、図示にあたっては、実測に耐えるものは極力掲載したが、中核期の坏は割愛したものが多数ある。

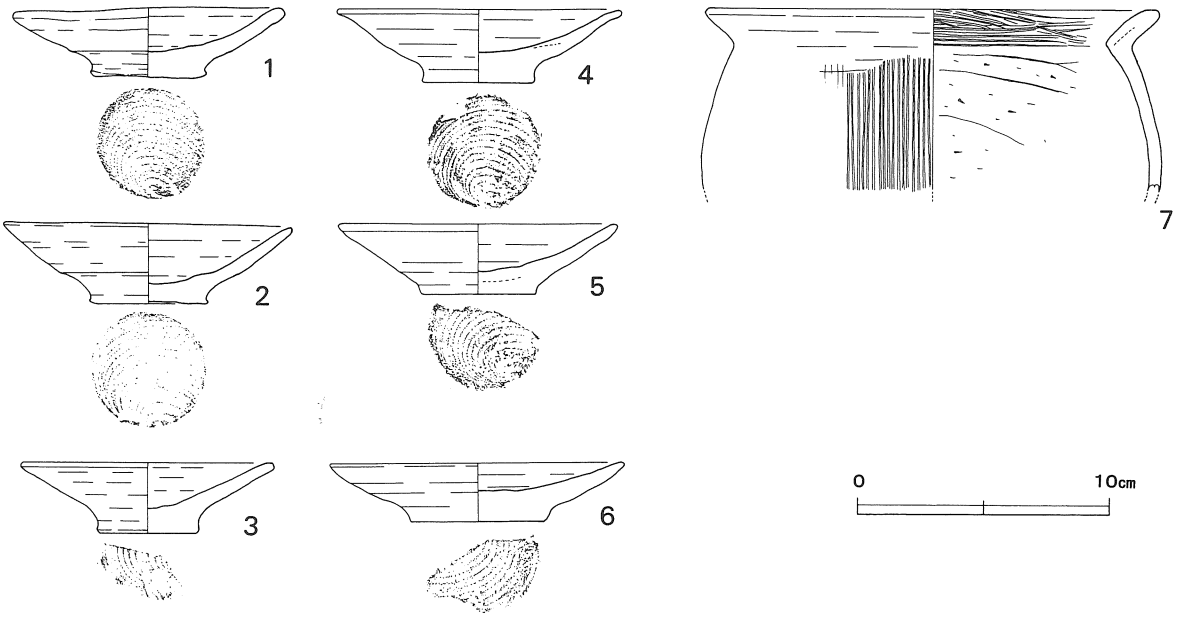
72-1～73-18は坏を取り上げた。72-1は内外面に赤色塗彩が施されており、奈良時代の所産と考えられる。小片でこの頃のものと認められるものは他にもあるが、量的にはごく僅かである。72-4～72-11は高台を有するもので、いずれも器壁が体部で若干内湾し、口縁端部付近でやや外反して開口することを特徴とする。11世紀から12世紀の所産と思われる。72-12～73-18は高台の付かないものである。72-12～72-17は器壁がほぼ直線的に立ち上がるのに対し、73-1～73-18は体部でやや内湾し、口縁部で



第72図　1区遺構外出土土師器実測図1（1：3）



第73図　1区遺構外出土土師器実測図2（1：3）



第74図　1区遺構外出土土師器実測図3（1：3）

外反気味に開口している。いずれも12世紀前後のものと考えられる。

74-1～74-6は皿である。厚い底部は強く絞られ、器壁は口縁部にかけてやや内湾するか、ほぼ直線的に立ち上がっている。11世紀から12世紀の所産と思われる。

74-7は甕である。奈良時代の所産と考えられ、同時期の坏と同様に出土量は僅かである。

須恵器（第75図）

須恵器は大甕、高坏、蓋、坏、皿が出土している。大甕は胴部片が多数出土しているものの、接合するものが少ないため割愛したが、その他は実測に耐えるものはほとんど図示した。

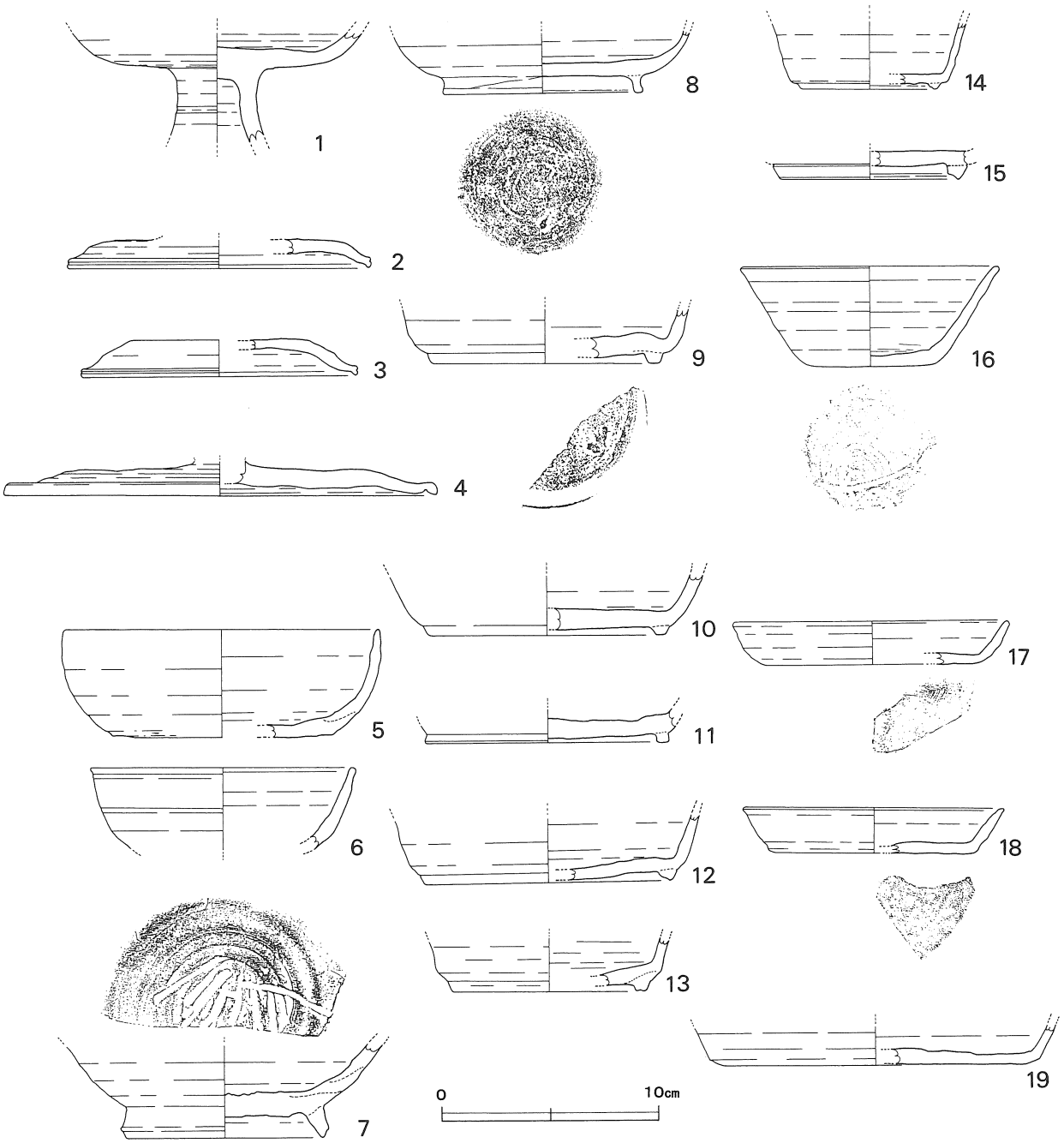
75-1は高坏である。坏部は器壁が内湾して立ち上がるが、あまり深くならず皿状を呈するもの思われる。ごく小片を除くと高坏はこの1点のみの出土である。

75-2～75-4は蓋である。いずれも口縁端部を下方に若干引き出し、全体的に扁平である。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

75-5～75-16には坏を取り上げた。75-5・75-6は器壁が底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、奈良時代の所産と考えられる。75-7～75-10は器壁が内湾気味に立ち上がり、底面外縁内寄りに低い高台を貼り付けている。やはり、奈良時代の所産であろう。75-11～75-15も高台付坏であるが、高台が底面外縁に付くものを取り上げている。これらは器壁が直線的に立ち上がっており、平安時代のものと考えられる。75-16は高台の付かない坏である。器壁の立ち上がりは直線的で底面には回転糸切り痕が残り、平安時代の所産であろう。

75-17～75-19は皿である。75-17は器壁が僅かに内湾し、75-18・75-19は直線的であるが、いずれも奈良時代の所産と思われる。

このように、須恵器は量的には少ないものの奈良時代から平安時代のものが出土している。古墳時代の資料を欠くことが留意点であろう。



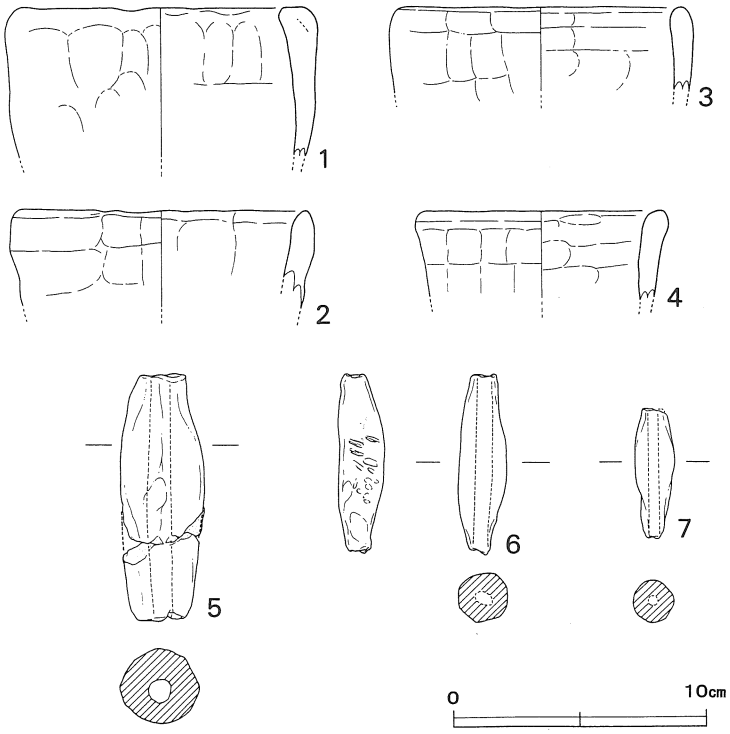
第75図　1区遺構外出土須恵器実測図（1：3）

製塩土器・土製品（第76図）

1区の遺構外からは製塩土器と土錘が出土しているのですべて図示した。

76-1～76-4は製塩土器である。口縁部付近の破片ばかりであるが、本来の形態は砲弾状を呈していたものと思われる。いずれも器表に多数の指頭圧痕が観察できることから、手捏で成形されたと考えられる。また、成形後は内外面ともナデ調整が施されている。なお、製塩土器は出雲市内の遺跡では、上長浜貝塚で多数出土している。

76-5～76-7には管状紡錘形土錘を示した。76-5はやや大きめの肉厚なもので、端部は平坦に切り落とされている。また、孔縁にすり減っている箇所が認められることから、使い込まれたものと推定で



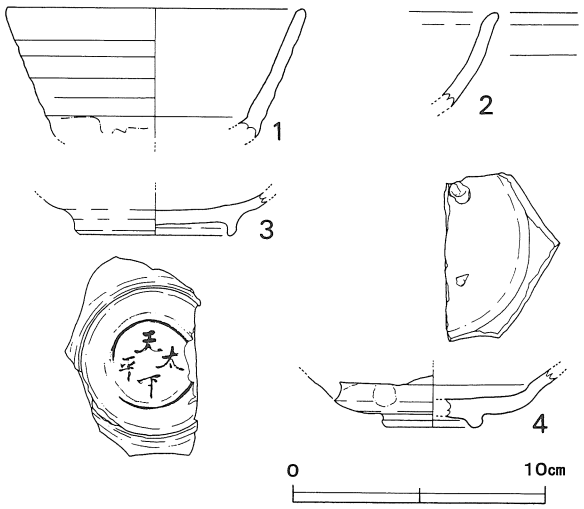
第76図　1区遺構外出土製塩土器・土製品実測図（1：3）

きる。一方、76-6・76-7は中央から両端にかけて先細りになる。また、76-6の表面にタタキ目が認められることから、棒状のものに胎土を巻き付けたのちにタタキ調整を施して成形したと推定できよう。

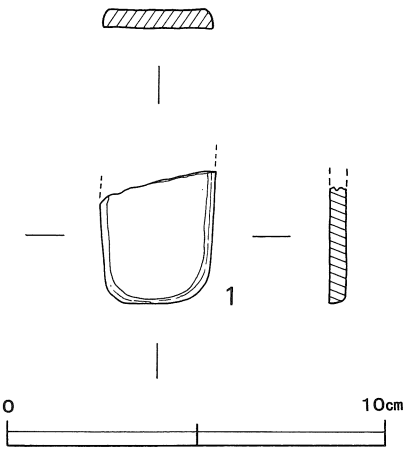
陶磁器・石製品（第77・78図）

陶磁器・石製品は少量出土しているため、ほとんど図示した。

77-1は器壁が底部付近から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、指で強くナデつけられて成形されているため、外面に凹凸を有する。内外面は釉薬が施されているため暗オリーブ灰色であるが、胎土はにぶい赤褐色である。時期は不明であ



第77図　1区遺構外出土陶磁器実測図（1：3）



第78図　1区遺構外出土石製品実測図（1：2）

るが比較的新しいものであろう。77-2の碗の器壁は体部で内湾し、口縁端部付近でやや外反開口する。施釉により器表は黒褐色を呈するが、胎土は鈍い黄橙色である。16世紀頃の所産と思われる。77-3は碗の底部片である。高台を有し、底面には二重円圏文と「天下太平」の文字が描かれている。胎土は灰白色であるが、器表は釉薬によりやや青みがかっている。輸入品で16世紀中頃から末頃にかけてのものと思われる。77-4は唐津焼の皿である。胎土は灰色で外面の一部と内面全面に灰オリーブ色の釉薬が施されている。また、見込み部分には2箇所に胎土目が認められる。17世紀のものであろう。

78-1は遺構外から唯一出土した石製品である。一部を欠くが厚さ5mmの扁平な頁岩製で、裏面は頁岩特有の自然剥離面であるが、角が丸められており表面は研磨されて滑らかである。なお、用途は不明である。

田畑遺跡２区

2. 2区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第79～82図）

2区は1区の西に位置しているが、市道浅柄古志線南沿いの1区とは異なって、北沿いに伸びる細長い調査区である。この調査区も南北を市道と水田に挟まれているため、掘削による調査区壁崩壊に備えて、調査対象地の境界から50㎝程度内側において調査を実施したが、大型の深い遺構については完掘を断念したものもある。なお、2区の規模は長さ86m、幅2m～4mを測り、面積は約270㎡である。

調査にあたっては、表土を重機掘削した後に、基準杭を5m間隔で一列に調査区南壁沿いの表土に設置した。その後、調査区内の遺物包含層の掘削を手掘りで行った結果、標高8.70m～9.00m程度で地山面に至ると同時に遺構が検出できたため、この面を調査面として各遺構の調査を行い、この成果を田畑遺跡2区遺構配置図にまとめた。また、調査区南壁で土層堆積状況把握のため精査を行い、調査区南壁断面図を作成したため、この成果もあわせて示したが、調査区南壁の一部は状態が悪かったため、北壁で代替えした。

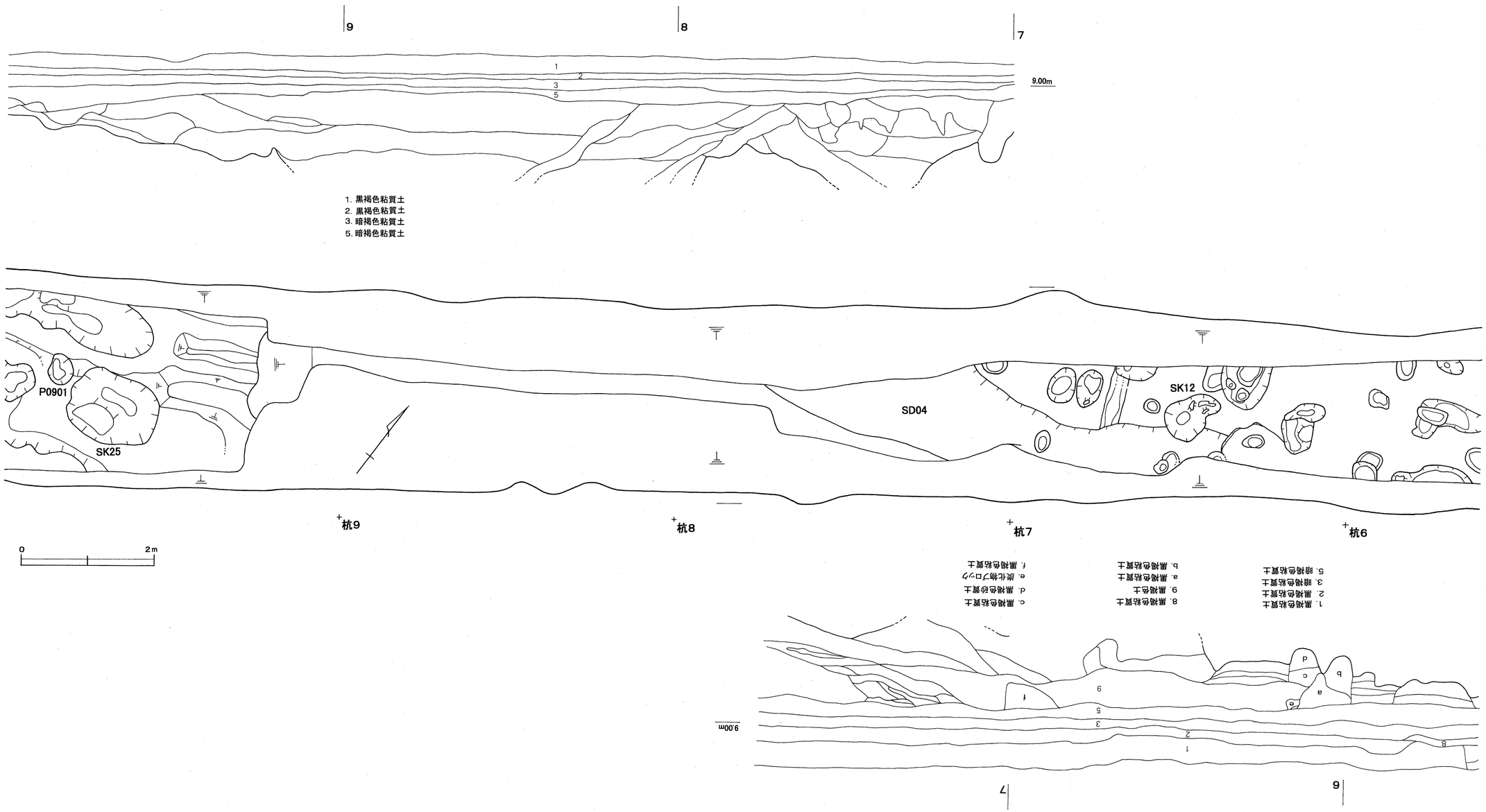
なお、1区の調査に用いた基準杭の座標は表2に示すとおりである。

杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73233.525	52357.398
杭 2	-73236.489	52353.371
杭 3	-73239.453	52349.344
杭 4	-73242.417	52345.317
杭 5	-73245.381	52341.291
杭 6	-73248.345	52337.264
杭 7	-73251.308	52333.237
杭 8	-73254.272	52329.210
杭 9	-73257.236	52325.183
杭10	-73260.200	52321.156

杭名称	X座標	Y座標
杭11	-73263.164	52317.130
杭12	-73266.128	52313.103
杭13	-73269.092	52309.076
杭14	-73272.056	52305.049
杭15	-73275.020	52301.022
杭16	-73277.984	52296.995
杭17	-73280.947	52292.969
杭18	-73283.911	52288.942

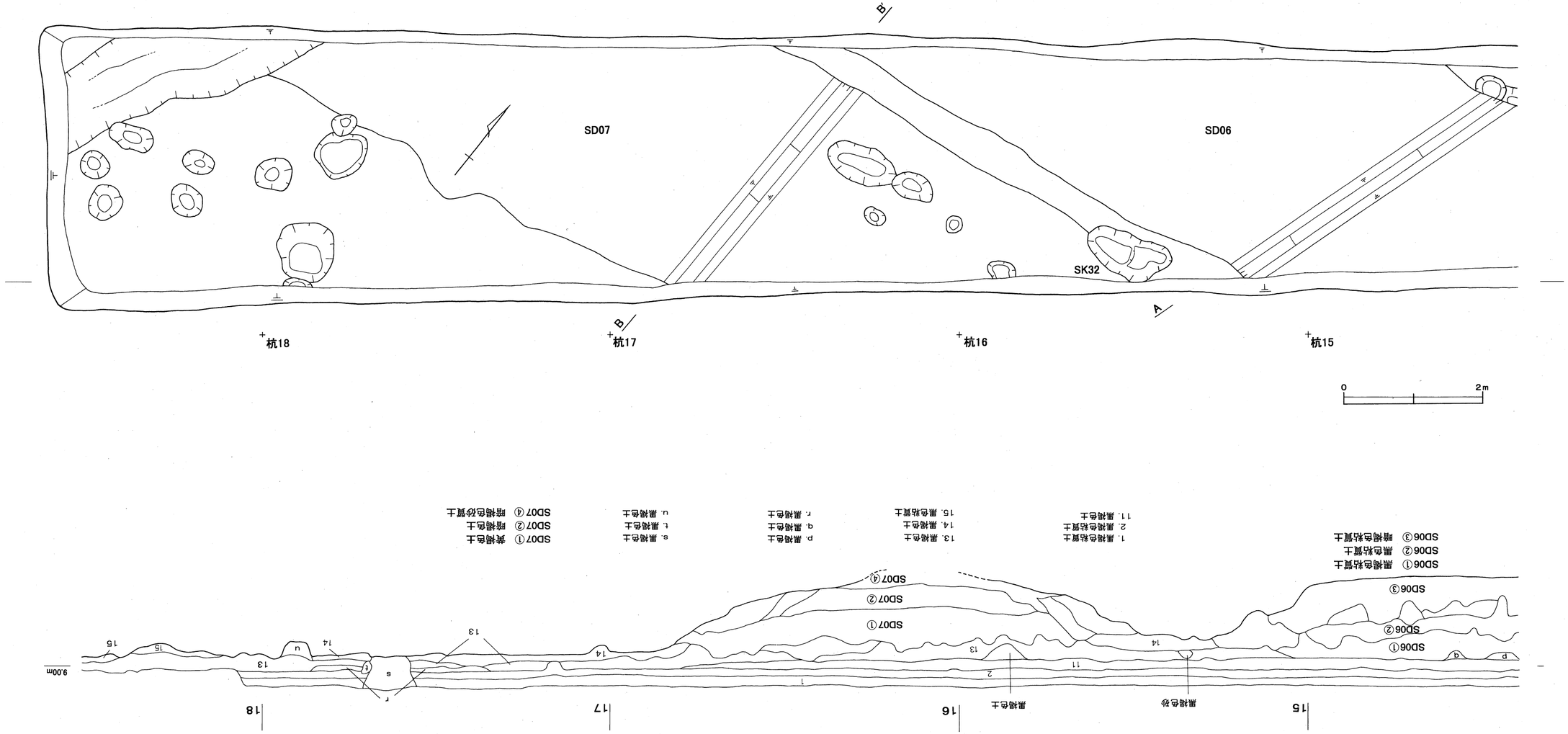
表２　田畑遺跡2区基準杭座標一覧

第79図　田畑遺跡2区遺構配置図1（1：50）



第80図　田畑遺跡2区遺構配置図2（1：50）

第81図　田畑遺跡2区遺構配置図3（1：50）



第82図　田畑遺跡2区遺構配置図4（1：50）

2区の遺構と遺物

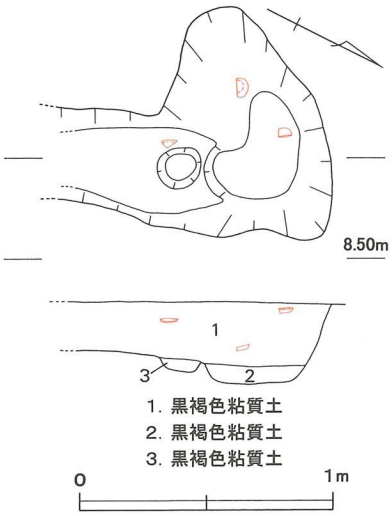
2区は1区と同様遺構を多数検出しているため、実測可能な出土遺物があった遺構を中心に、土坑、ピット、溝状遺構、その他の遺構の順に以下報告する。

土坑

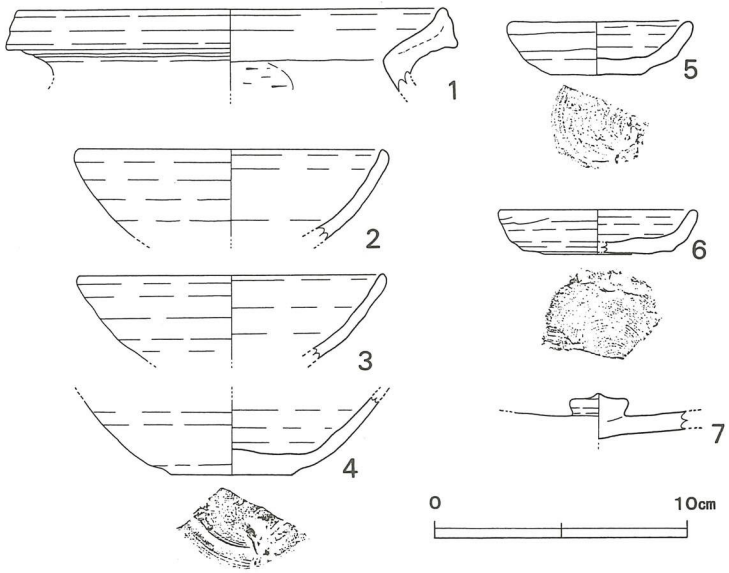
SK04（第83・84図）

4Grの調査区南壁際標高8.33㎝の調査面で、SD02を切った状態のSK04を検出した。遺構の一部は調査区外に続いているため部分的な調査にとどまった。遺構南寄りが細長く溝状に伸びるいびつな平面プランを呈する。北寄りは幅が広がり土坑状を呈するため、土坑として捉えてはいるものの、遺構の性格については不明である。

2層に分層可能な覆土からは、ビニール袋半分を下回る少量の弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土するが、土師器が大半を占める。このうち実測可能なものはすべて図示した。



第83図　SK04実測図（1：30）



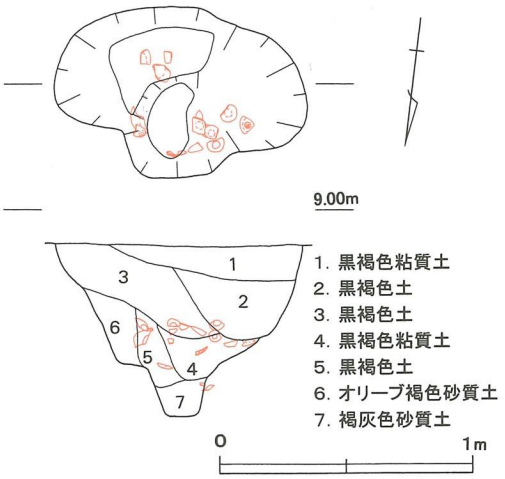
第84図　SK04出土土器実測図（1：3）

84-1は弥生時代後期初頭の甕である。84-2・84-3に示す坏は器壁が内湾し開口し、13世紀の所産であろう。84-5・84-6は皿である。底面に回転糸切り痕が残り、13世紀から14世紀頃のものと思われる。84-7は平安時代の須恵器の蓋であろう。

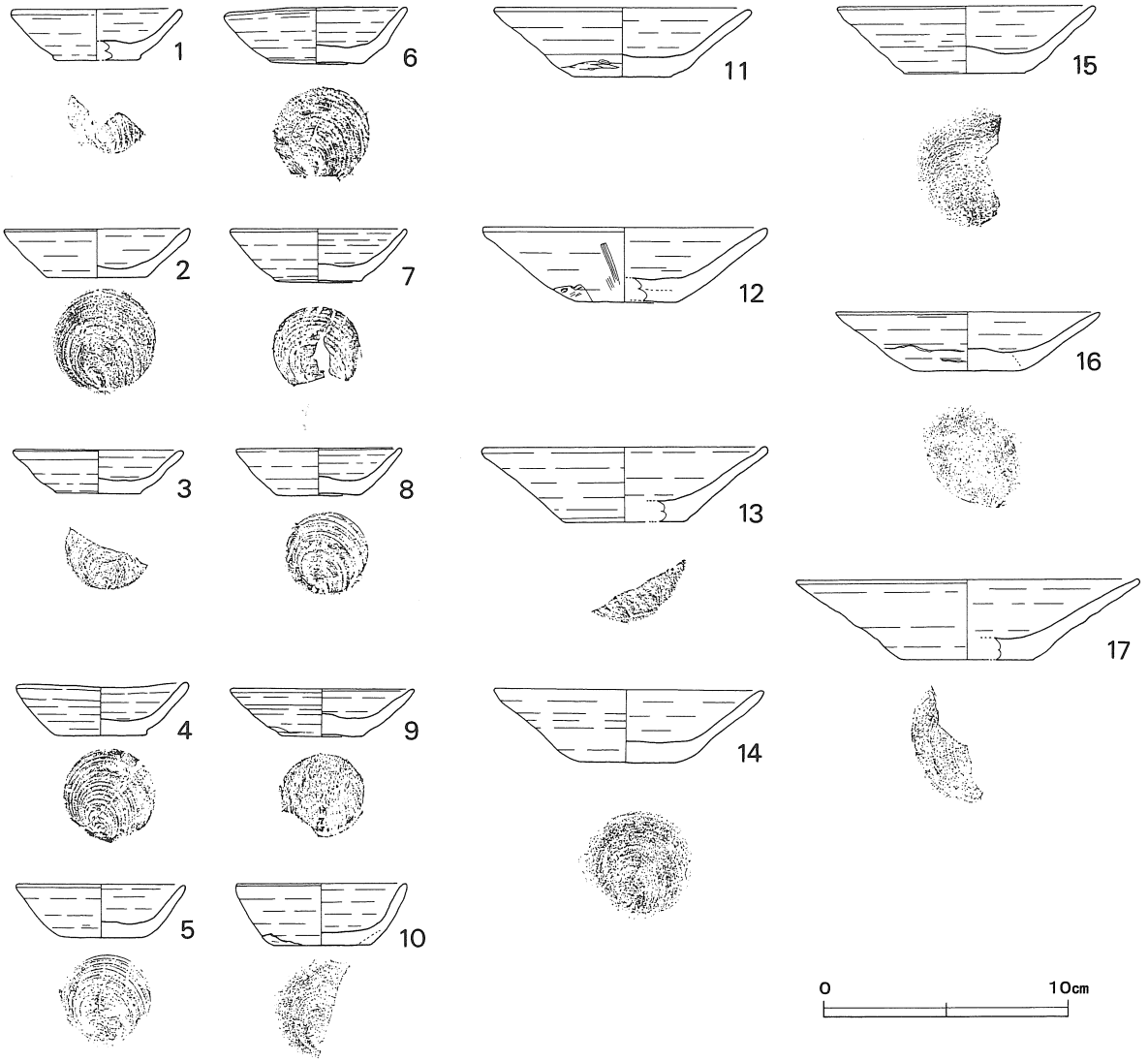
このように、出土遺物には弥生土器、土師器が僅かに混ざるものの、中世土師器が最も多いことから、これらが遺構の時期を示すと考えられる。

SK18（第85～87図）

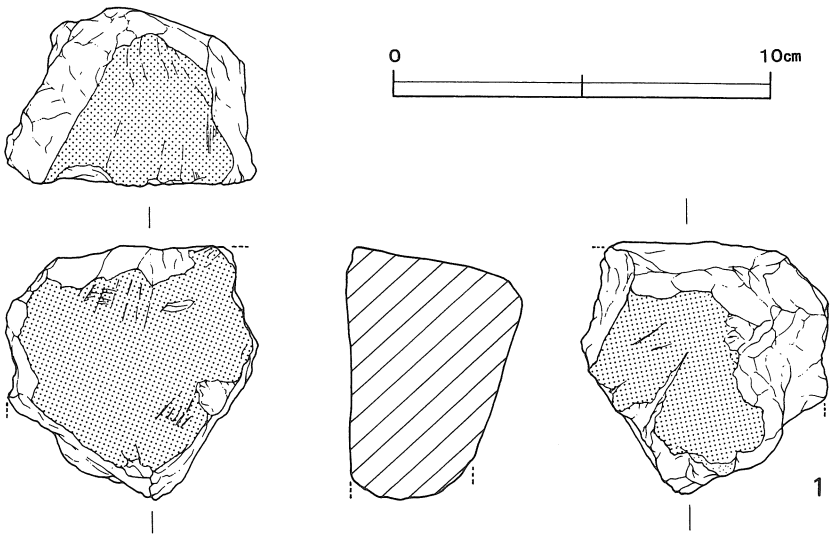
11Grの標高8.86mの地山面でSK18を確認した。N-85°-W方向に長軸をとる不整な楕円形の平面プランを呈する。



第85図　SK18実測図（1：30）



第86図　SK18出土土師器実測図（1：3）



第87図　SK18出土石製品実測図（1：2）

検出規模は長径100㎝、短径70㎝、深さ68㎝を測る。側壁は狭い坑底から標高8.39m付近までは急に立ち上がるが、より上位ではやや緩やかになる箇所も観察できる。

7層に分層可能な覆土から、ビニール袋1袋分の中世土師器と砥石が1点出土した。このうち図化に耐えるものはほとんど図示している。

出土遺物は法量、形態から86-1～86-10に示す小型の皿、

86-11～86-16に示す皿、86-17に示す杯の3種類に区分できる。

小型の皿は口径7cm程度、底径3.5cm前後、器高2cm程度の法量で、器壁が僅かながら内湾することを特徴としている。いずれも底部の切り離しは回転糸切りによりなされており、完形に近い状態で出土するものも数点有る。その他の特徴としては、灰釉が外面の一部に付着するもの、底部が若干絞られるもの、全面煤に覆われているものが認められる。

続いて皿は、法量が口径10.3cm～11.5cm、底径4cm～5cm、器高3cm前後を測り、器壁が外反気味に広く開口することを特徴としている。底部の切り離しは回転糸切りによるようであるが、ナデ消しが施されていると考えられるものが数点見受けられる。

坏は皿と形態的に似るが法量がやや大きくなり、口径13.8cm、底径5.3cm、器高3.3cmを測る。図示しなかった小片を考慮しても、坏の個体数は多くはない。

これら土器片は12世紀頃の所産と思われ、法量、形態を勘案してもそれぞれ時期差はないと考えられることから、遺構の時期を示す資料となり得よう。

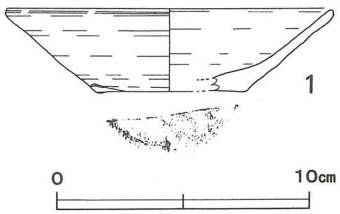
87-1は砂岩製の砥石である。欠損しているが3面に研磨面が認められ、うち1面には切り込み状の条溝が残っている。

SK19（第88～90図）

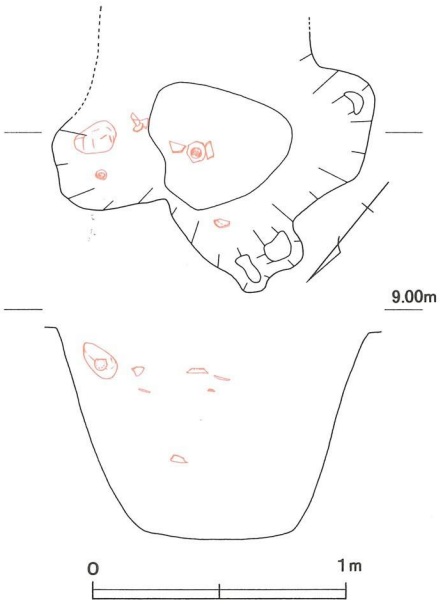
11Grの調査区南壁際標高8.91ｍの地山面でSK19を検出した。不整形な平面プランを呈するものの、坑底では楕円に近い形におさまる。検出規模は長さ105cm以上、幅125cm、深さ83cmを測り、標高8.08ｍで平坦な坑底を有する。

覆土からはビニール袋半分程度の中世土師器と石製品が1点出土した。土器片はいずれも小片であるため、実測可能なものは少なく89-1に示す皿1点のみである。器壁は底部から口縁部にかけて直線的に広く開口し、底面には回転糸切り痕が観察できる。12世紀頃の所産と思われ、その他の小片もほぼ同時期の土器片と見受けられることから、遺構の時期を示すと推定できる。

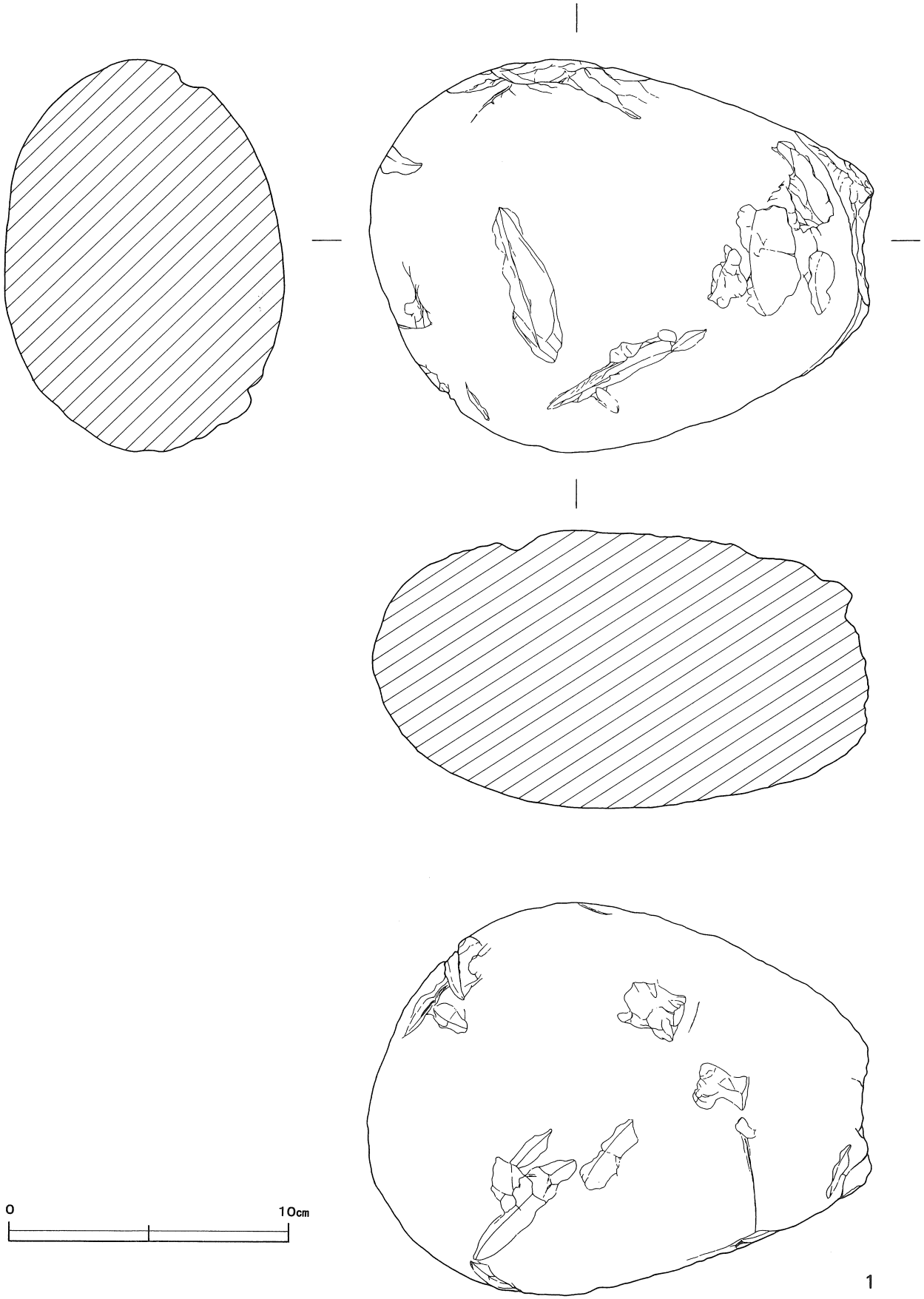
また、90-1の石製品は凝灰岩の円礫であり、用途は不明であるが表面に切り込み条の条溝や打痕が残っている。遺構の性格は不明であるが、SK18と時期的に近いと考え共通の用途を担っていた可能性が指摘できる。



第89図　SK19出土土師器
実測図（1：3）



第88図　SK19実測図（1：30）



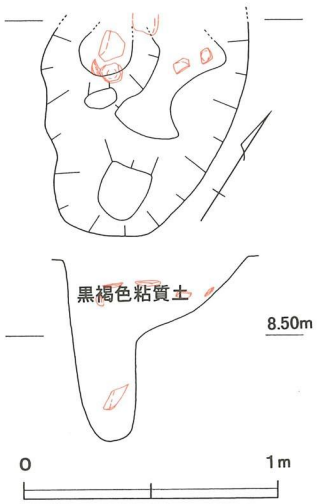
第90図　SK19出土石製品実測図（1：2）

SK21（第91・92図）

10Grから11Grにかけての標高8.81ｍの地山面でSK21を検出した。調査区北壁際で検出したため、部分的な調査にとどまったが、N-9°-W方向に長軸をとると考えられる。検出規模は長さ91㎝以上、幅80㎝、深さ74㎝を測り、遺構西寄りが最も落ち込む。側壁は狭い坑底から急勾配で立ち上がるが、東寄りには段を有している。

覆土は黒褐色粘質土の単層で、ここからビニール半分に満たない少量の中世土師器が出土しており、図化に耐えるものはすべて図示している。

92-1・92-2は坏もしくは皿の底部片である。12世紀から13世紀の所産と思われ、遺構の時期を示すと考えられる。



第91図　SK21実測図（1：30）

SK22（第93・94図）

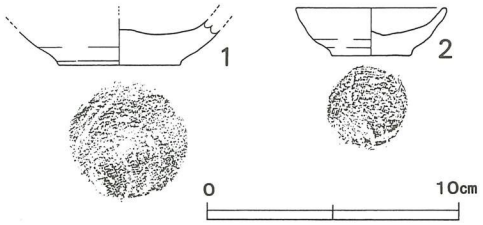
12Grの標高8.74ｍの調査面で検出したSK22は、P1202に切られ、SK31を切っている。平面プランは不整形であり、検出規模は長さ100㎝、幅81㎝、深さ49㎝を測る。断面を観察すると側壁は丸味を帯びた坑底から曲線的に立ち上がる。

覆土は2層観察でき、ここからビニール袋半分強の土師器の小片が出土しており、実測可能なものはほとんど図示している。

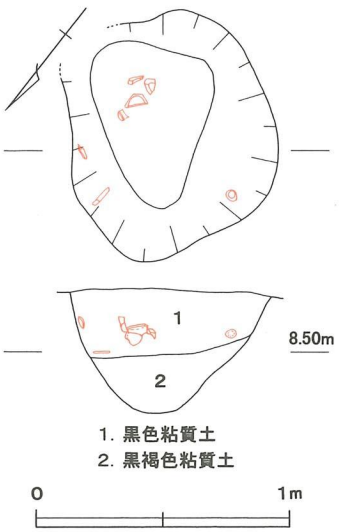
94-1～94-4は坏と思われる。底部の切り離しは回転糸切りによるが、ナデ消しが施されるものもある。

94-5・94-6は小型の皿である。前者の体部は内湾すると思われるが、後者は底部が絞られ器壁は体部にかけて直線的に立ち上がっている。

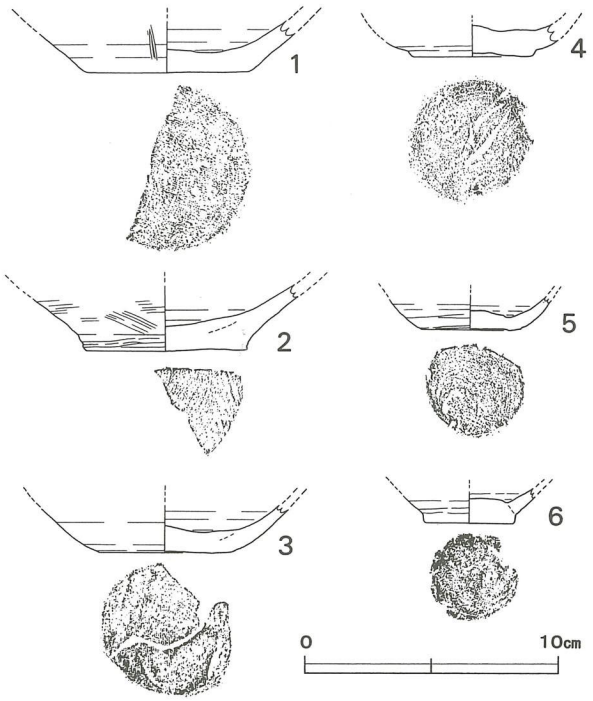
出土遺物は小片も含めて中世土師器と考えられ、遺構の時期を示すと考えられる。



第92図　SK21出土土師器実測図（1：3）



第93図　SK22実測図（1：30）



第94図　SK22出土土師器実測図（1：3）

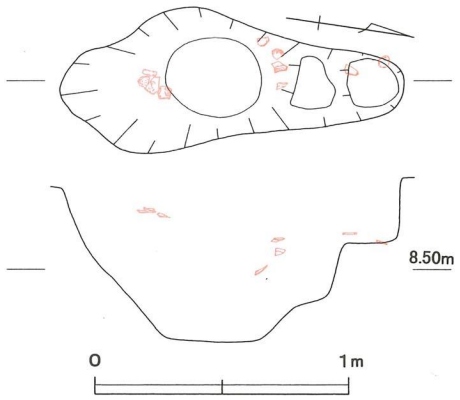
SK23（第95・96図）

11Grの標高8.87ｍの地山面でSK24を切った状態のSK23を検出した。N-8°-W方向に軸をとり、長さ135㎝、幅56㎝の細長い平面プランを呈するが、坑底は径38㎝を測る円形におさまる。この坑底は遺構の中央部に位置し深さ64㎝を測るが、北寄りは段を2段有している。

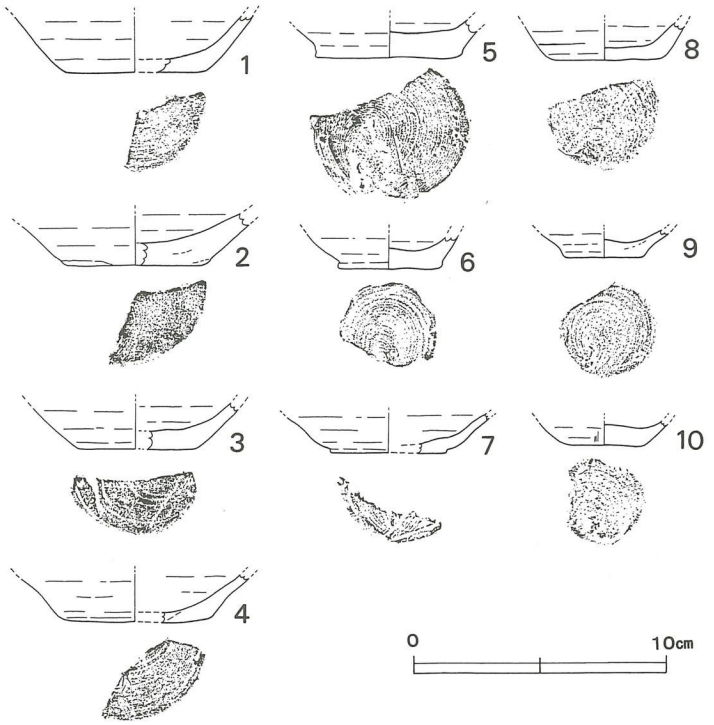
SK23から東に163㎝離れた地点にはP1101が位置しており、これと対をなし掘立柱建物跡になる可能性も指摘できるが、調査区が狭く確認できなかった。

覆土からはビニール袋半分弱の土師器の小片が出土しており、このうち図化可能なものはすべて図示した。

96-1～96-5は坏で、96-6～96-10は皿と思われる。いずれも底面に回転糸切り痕が観察され、中世の所産と考えられる。



第95図　SK23実測図（1：30）



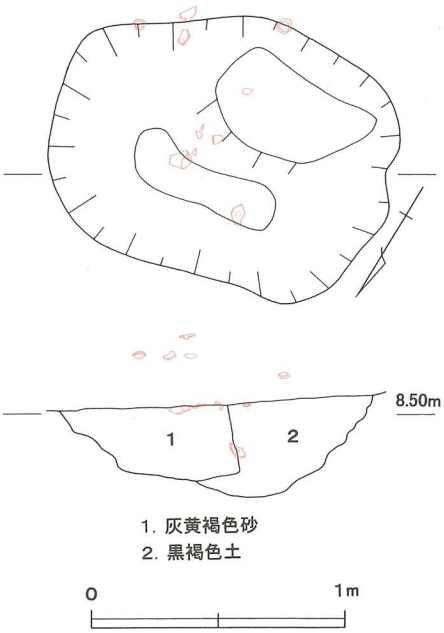
第96図　SK23出土土師器実測図（1：3）

SK25（第97・98図）

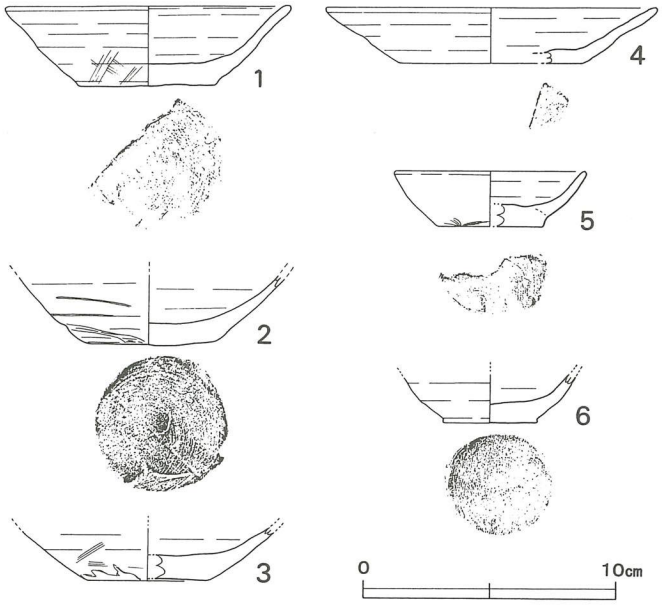
9Grの標高8.57ｍの調査面でSD04を切った状態のSK25を検出した。検出面上位でも遺物がややまとまって出土しており、不明瞭ながら土色の違いも認められたため、この遺構は本来、より上位から掘り込まれていたものと考えられる。平面プランは不整形で、検出規模は長さ139㎝、幅105㎝を測り、最下底の標高は8.17ｍである。側壁の立ち上がりは緩やかであり、遺構南寄りには段を有している。

2層観察できた覆土からは、ビニール袋半分弱の土師器片と陶磁器の小片が1点出土しており、図化可能なものはすべて図示している。

98-1は坏である。器壁は体部でやや内湾するが口縁部で若干外反し開口する。底面には回転糸切り痕が残っており、12世紀の所産と思われる。98-4は皿で器壁は体部で外反気味に立ち上がっている。98-5は小皿である。底部は絞られ、器壁は内湾気味に立ち上がっており、12世紀のものであろう。その他の小片も図示遺物と同時期頃のものと考えられることから、これら図示遺物は遺構の時期を示すものと考えられる。



第97図　SK25実測図（1：30）

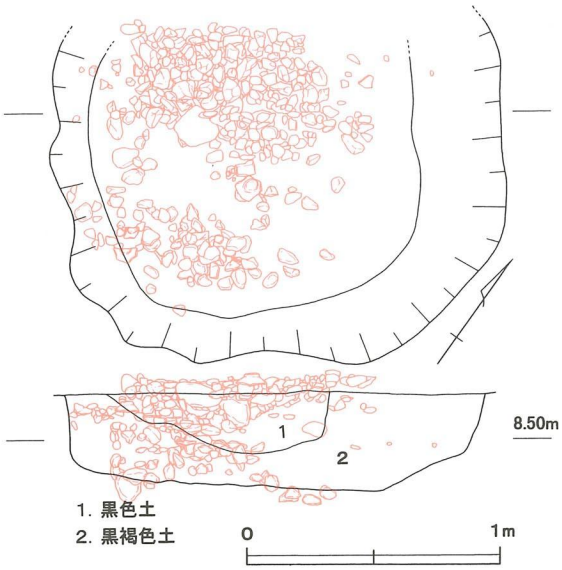


第98図　SK25出土土師器実測図（1：3）

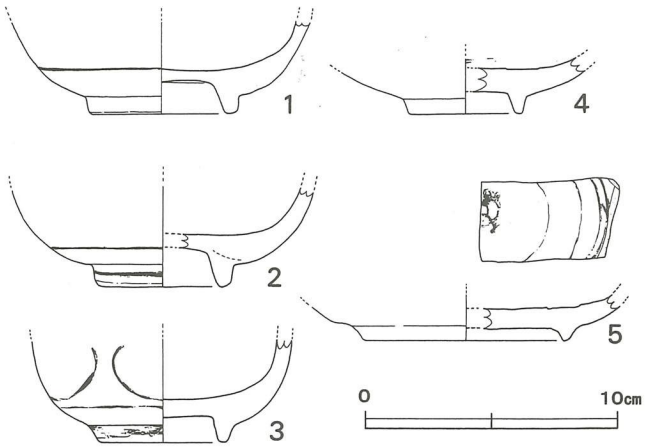
SK27（第99・100図）

12Grの調査区南壁際標高8.69mの地山面でSK27を検出した。一部が調査区外に及んでいるため全容は確認していないが、平面プランは径180cm前後の円形を呈するのではないかと思われる。深さは38cmを測り、坑底は概ね平坦である。この遺構の特徴は、覆土の中層以上に礫が敷き詰められていることである。

出土遺物は少量の中世土師器、陶磁器であるが、いずれも礫の狭間から出土している。100-1～100-5は陶磁器片である。肥前系のものが多く18世紀頃の所産と考えられる。これらはその出土状況から遺構の時期を示すと考えられる。また、遺構の性格としては墓と考えられよう。



第99図　SK27実測図（1：30）



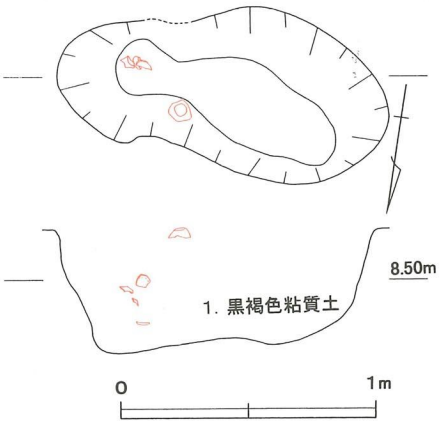
第100図　SK27出土陶磁器実測図（1：3）

SK28（第101・102図）

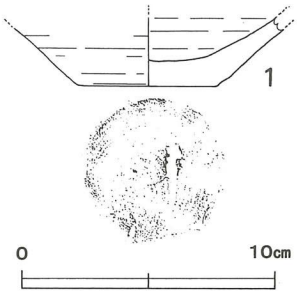
10Grの標高8.70ｍの調査面でSK28を検出した。P1004に切られた遺構として取り扱ってはいるが、本来ひとつの遺構である可能性もある。つまり、SK28を掘り方、P1004を柱根痕と考え、あわせてひとつの柱穴とも捉えられよう。また、西に163㎝離れた地点に存在するSK30とP1005にも同じことが指摘できることから、これらで形成される掘立柱建物跡が存在する可能性もあるが、調査区が狭く確認はできていない。よって、これら4基の遺構が必ずしも関連する遺構とも明言できないため、以下、個別に報告する。

SK28はN-85°-W方向に軸をとり、不整な楕円形の平面プランを呈する。検出規模は長径126㎝、短径65㎝、深さ50㎝を測る。坑底には凹凸を有し、側壁の立ち上がりは急である。

覆土からはビニール袋1袋弱の中世土師器の小片が出土している。これらの中には102-1に示す坏のほか、底部を若干絞るものも含まれている。



第101図　SK28実測図（1：30）



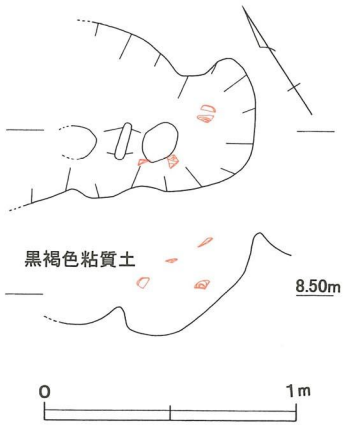
第102図　SK28出土土師器実測図（1：3）

SK30（第103・104図）

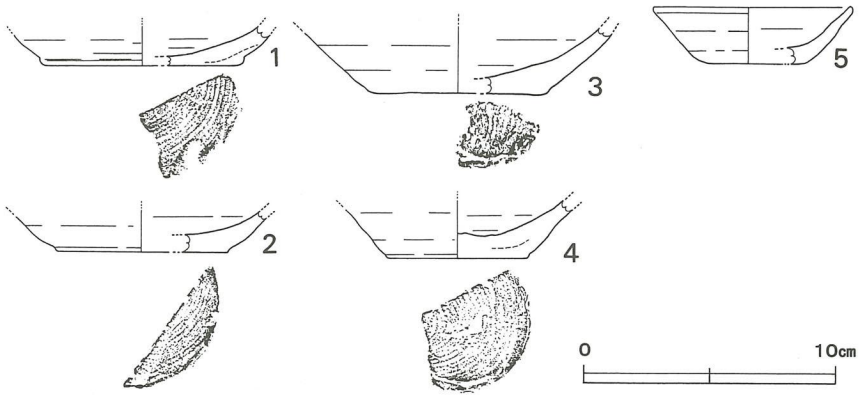
10Grの調査区北壁際標高8.75ｍの地山面でSK30を検出した。調査区外にも遺構が及んでおり、一部の調査にとどまったがN-57°-W方向に長い。検出規模は長さ80㎝以上、幅70㎝を測り、坑底は標高8.37ｍ前後で2箇所落ち込んでいる。

覆土からはビニール袋半分に満たない量の中世土師器の小片が出土しており、実測可能なものはすべて図示した。

104-1～104-4は坏であり、底部が若干絞られるものが多い。104-5は皿であり、器壁は体部でやや内湾するが口縁部で僅かに外反し開口している。12世紀頃の所産と思われ、遺構の時期を示すと考えられる。



第103図　SK30実測図（1：30）



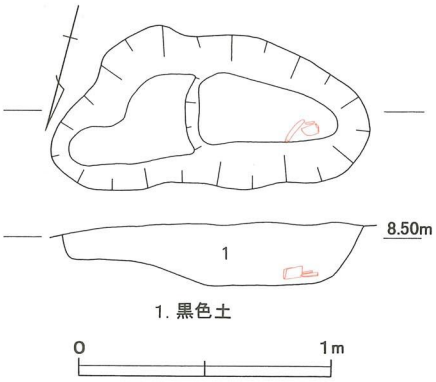
第104図　SK30出土土師器実測図（1：3）

SK32（第105・106図）

15Grの調査区南壁際標高8.55ｍの調査面でSD07を切った状態のSK32を検出した。N-72°-E方向に長く、検出規模は長さ127㎝、幅60㎝であり、遺構西寄りの最下底で深さ24㎝を測る。また、坑底は遺構東寄りで最下底より10㎝程度高い段を有している。

覆土からは少量の土器片が出土しており、図化可能なものはすべて図示した。

106-1は坏の底部であり中世の所産であろう。106-2は器種は不明であるが口縁部片であろう。端部に平坦面を有し、外面は粗いタテハケ調整、内面はヨコハケ調整が認められるが時期は不明である。



第105図　SK32実測図（1：30）

第106図　SK32出土土器実測図（1：3）

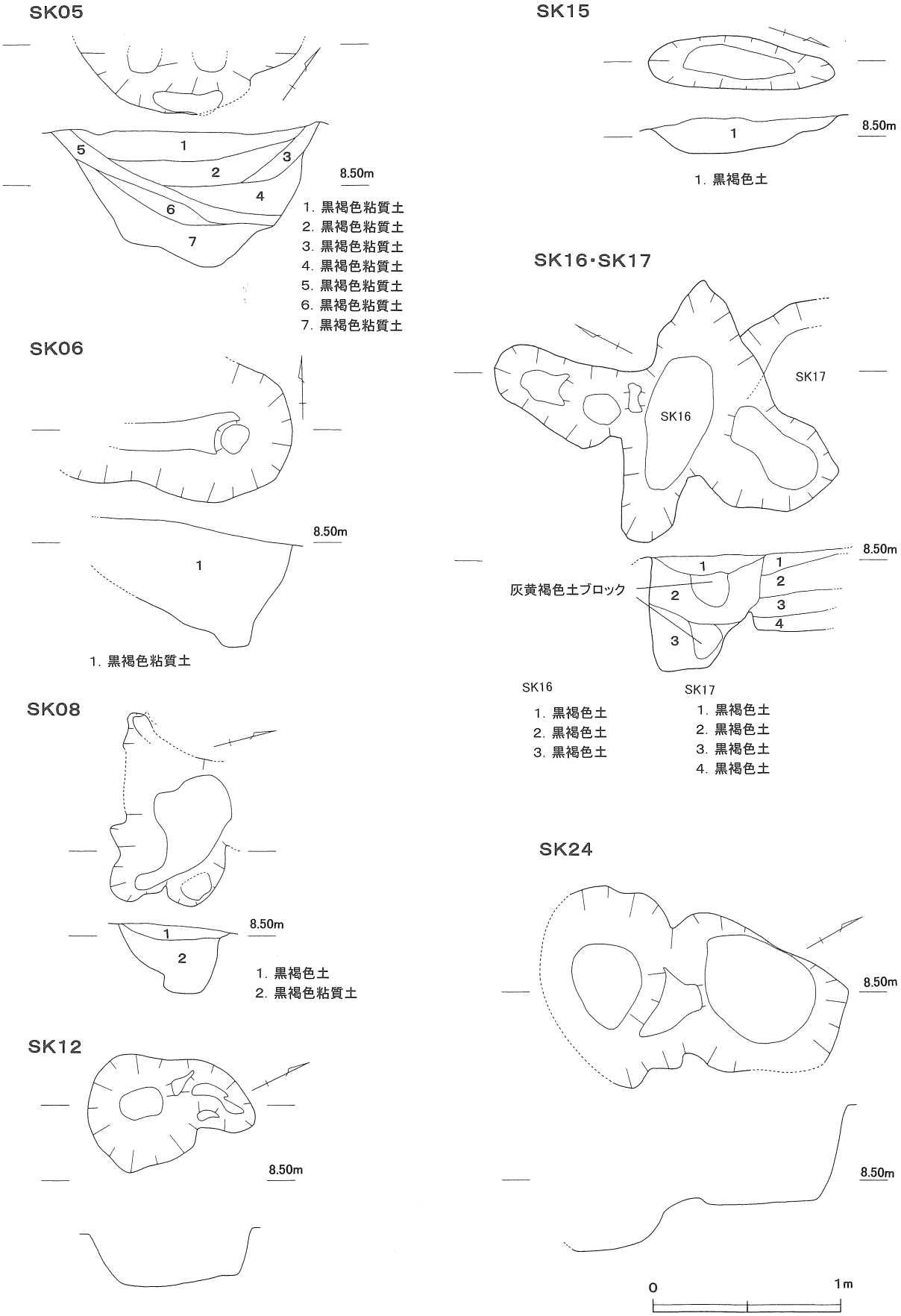
その他の土坑（第107～109図）

SK05は3Grの調査区北壁際標高8.79ｍの調査面において、SK08を切った状態で検出した。ごく一部の検出にとどまったため、平面プランや規模などについて不明な点が多いが、最下底までの深さは73㎝を測る。7層に分層可能な覆土からは108-1～108-3のほか、少量の中世土師器片が出土している。これら出土遺物は遺構の時期を示すものであろう。

SK06は3Grから4Grにかけての調査区南壁際標高8.50ｍの調査面において、SD02を切った状態で検出した。ごく一部の調査に終始したため、平面プランや規模などについて不明な点が多いが、遺構東寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは56㎝を測る。覆土は1層のみ観察でき、ここから108-4・108-5のほか少量の土師器片と須恵器片が1点出土している。これら出土遺物の時期にはばらつきがあるため、遺構の時期は不明である。

SK08は3Grの標高8.56ｍの調査面において、SK05やP0303などによって切られた状態で検出した。平面プランはいびつであるが、最下底までの深さは37㎝を測る。2層に分層可能な覆土からは、108-6のほか少量の中世土師器片が出土した。よって、遺構の時期も同時期頃と推定できる。

SK12は6Grの標高8.25ｍの調査面において、SD04を切った状態で検出した。平面プランは不整形であるが、検出規模は長さ88㎝、幅60㎝程度を測る。また、遺構南寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは31㎝を測る。覆土は1層のみ観察でき、ここから少量の中世土師器片のほか108-7が出土している。古墳時代の甕であるが、他の小片を勘案し遺構の時期は中世と考えられる。

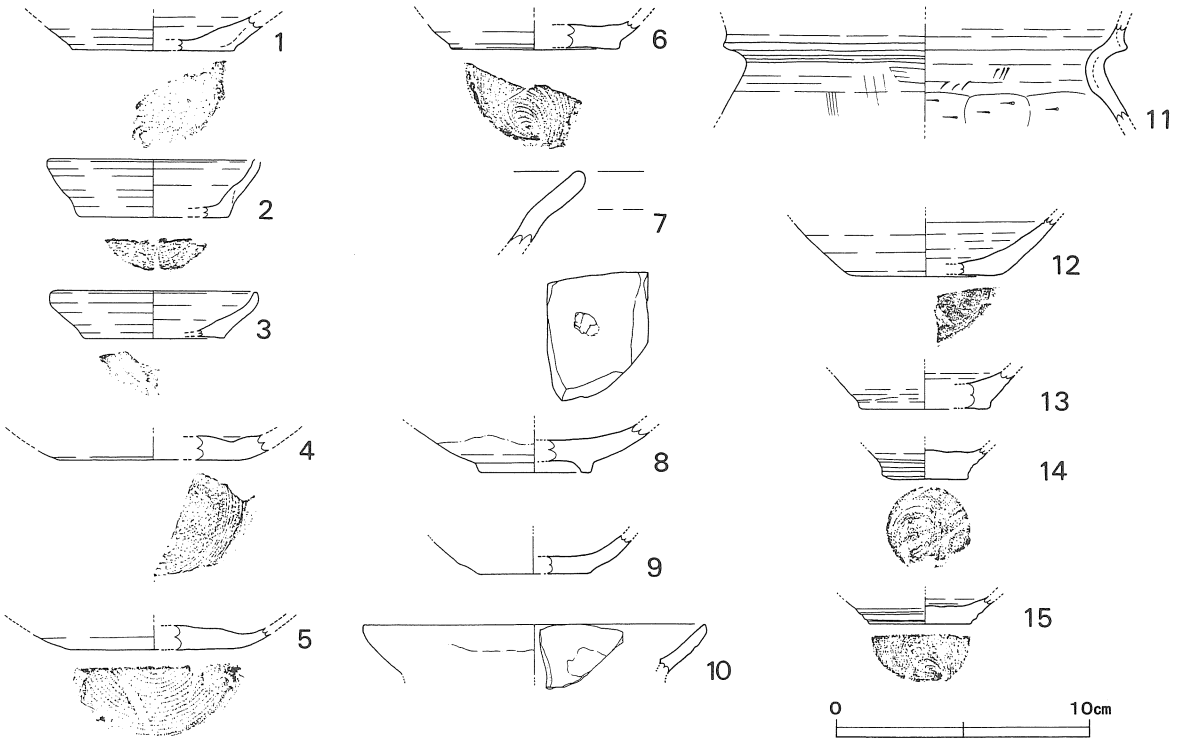


第107図　その他の主要土坑実測図（1：30）

SK15は5Grの標高8.60mの地山面において検出した。N-15°-W方向に軸をとり、平面プランは楕円形を呈する。検出規模は長径99cm、短径29cm、深さ19cmを測り、平坦な坑底から側壁は比較的緩やかに立ち上がる。覆土は1層のみ観察でき、ここから土師器片が2点のほかに108-8に示す唐津焼の碗が出土した。これは17世紀前半のものと考えられ、遺構の時期を示すであろう。

SK16とSK17は5Grの標高8.53mの調査面において、SK16がSK17を切った状態で検出した。

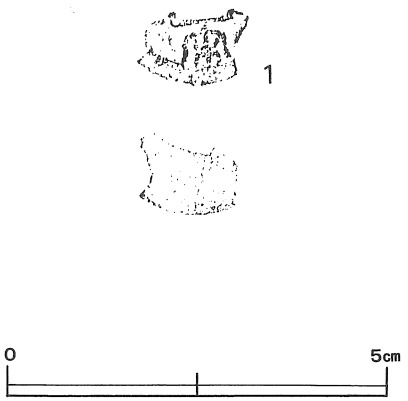
SK16はいびつな平面プランを呈しており、深さは62cmを測る。覆土は3層に分層可能で、ここから108-10に示す陶磁器のほか土師器、須恵器の小片が僅かに出土している。これら出土遺物の下限は近世であることから、遺構の時期も同時期頃であろう。



第108図　その他の主要土坑出土土器実測図（1：3）

SK17の規模などは不明だが、最下底までの深さは41cmを測る。4層観察できる覆土からは僅かな土師器片のほか、109-1に示す古銭が出土している。下文字に「宋」が確認できることから、「皇宋通寶」と考えられる。出土遺物はいずれも小片であるため、遺構の時期を推定する資料にはなり得ない。

SK24は11Grから12Grにかけての標高8.90mの地山面において、SK23とSD05とに切られた状態で検出した。検出規模は長さ145cm以上、幅63cm～105cmを測り、N-36°-E方向に長い。遺構南寄りが最も落ち込み、深さ78cmを測るが、北寄りは標高8.37m付近に段を有している。覆土は108-11～108-15のほかビニール袋半分程度の中世土師器の小片が出土している。よって、この遺構は中世に築かれたものであろう。



第109図　SK17出土古銭拓影（1：1）

ピット（第110～112図）

P0901は標高8.60ｍの調査面でSD04を切った状態で検出した。不整な円形の平面プランを呈しており、検出規模は径40㎝程度、深さ40㎝を測り、底は狭くすぼむ。覆土からは111-1～111-3に示したもののほかにも中世土師器片が比較的多く出土しているため、遺構の時期は中世と推定できる。

P1004は標高8.81ｍの調査面でSK28を切った状態で検出した。平面プランは楕円形で、検出規模は長径52㎝、短径39㎝、深さ57㎝を測り、遺構の南西寄りで最も落ち込む。覆土からは111-4～111-6に示したもの以外にも中世土器片が比較的多く出土しているため、遺構の時期は中世と考えられる。なお、SK28の報告時にも触れているが、P1005などとともに掘立柱建物跡を構成する可能性もある。

P1005は標高8.83ｍの調査面でSK30を切った状態で検出した。径40㎝前後の円形プランを呈し、深さは41㎝を測る。覆土からは111-7・111-8に示したもののほかにも少量の中世土師器片が出土している。関連遺構の可能性があるP1004とこの遺構を結ぶ直線はN-70°-E方向である。

P1006は標高9.01ｍの地山面で確認した。平面プランは円形を呈し、検出規模は径20㎝、深さ10㎝の小規模なピットである。覆土からは中世土師器片が比較的多く出土しており、図化に耐えるものを111-9～111-11に図示した。これらは12世紀前後の所産と思われ、遺構の時期を示すであろう。

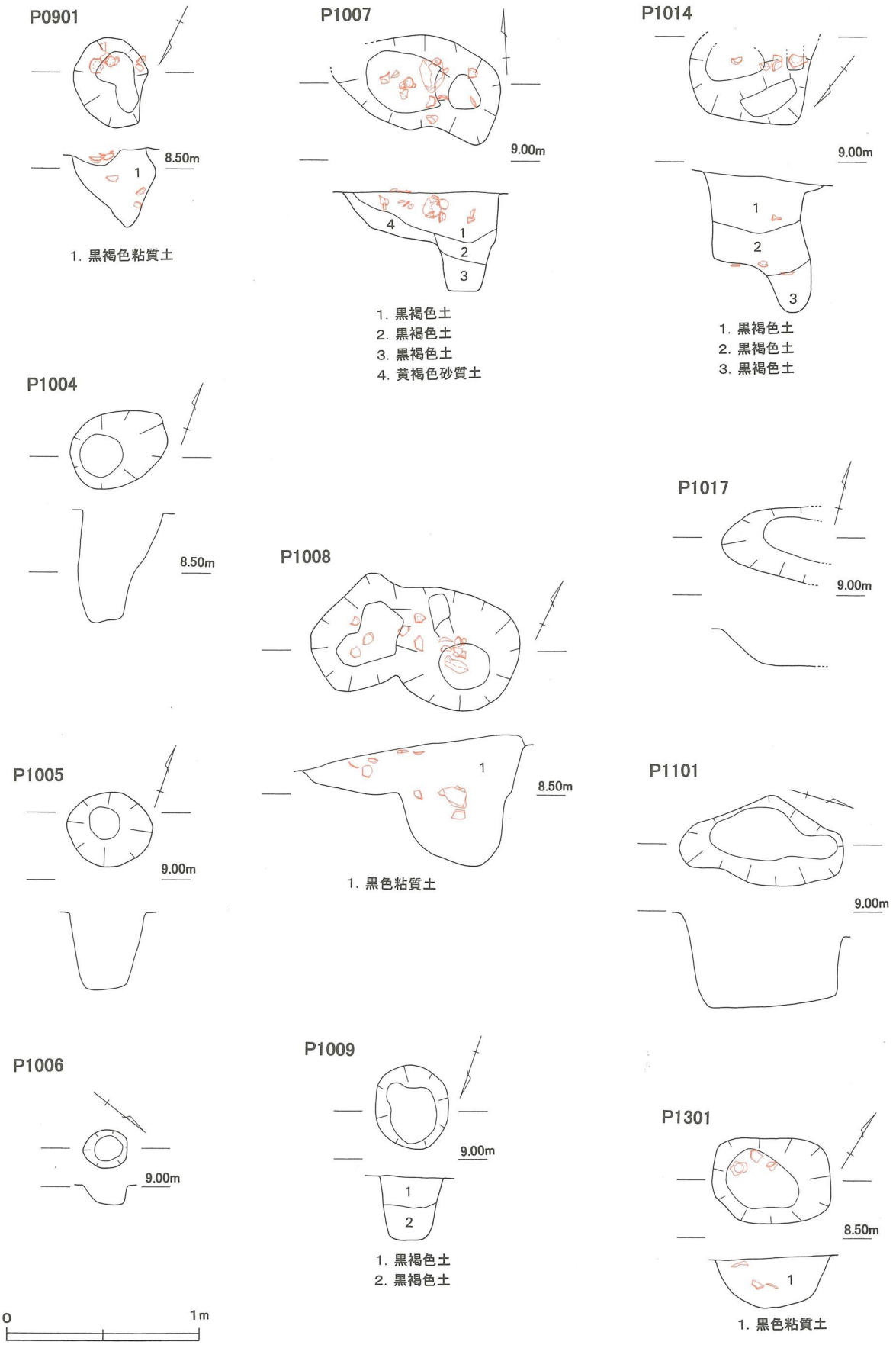
P1007は標高8.83ｍの地山面で検出した。遺構の一部は調査区外に及んでいるが、N-69°-W方向に長いいびつな楕円形の平面プランを呈するようである。検出規模は長径90㎝程度、短径50㎝であり、遺構東寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは51㎝を測る。4層に分層可能な覆土からはビニール袋半分弱の中世土師器片が出土しており、このうち実測可能なものを111-12～111-14に図示した。12世紀頃の所産と考えられ、遺構の時期を示す資料であろう。

P1008は標高8.76ｍ前後の調査面で検出した。おそらくSD04を切っていると思われるが、切り合い関係が検出時には明瞭に観察できておらず断定はできない。N-85°-E方向に長く、検出規模は長さ100㎝、幅60㎝であり、深さは東寄りで最も落ち込み64㎝を測る。覆土からはビニール袋半分弱の中世土師器片が出土しており、このうち残存状態の良いものを111-15～111-19に図示した。12世紀頃の所産と思われ、遺構の時期を示すと考えられる。

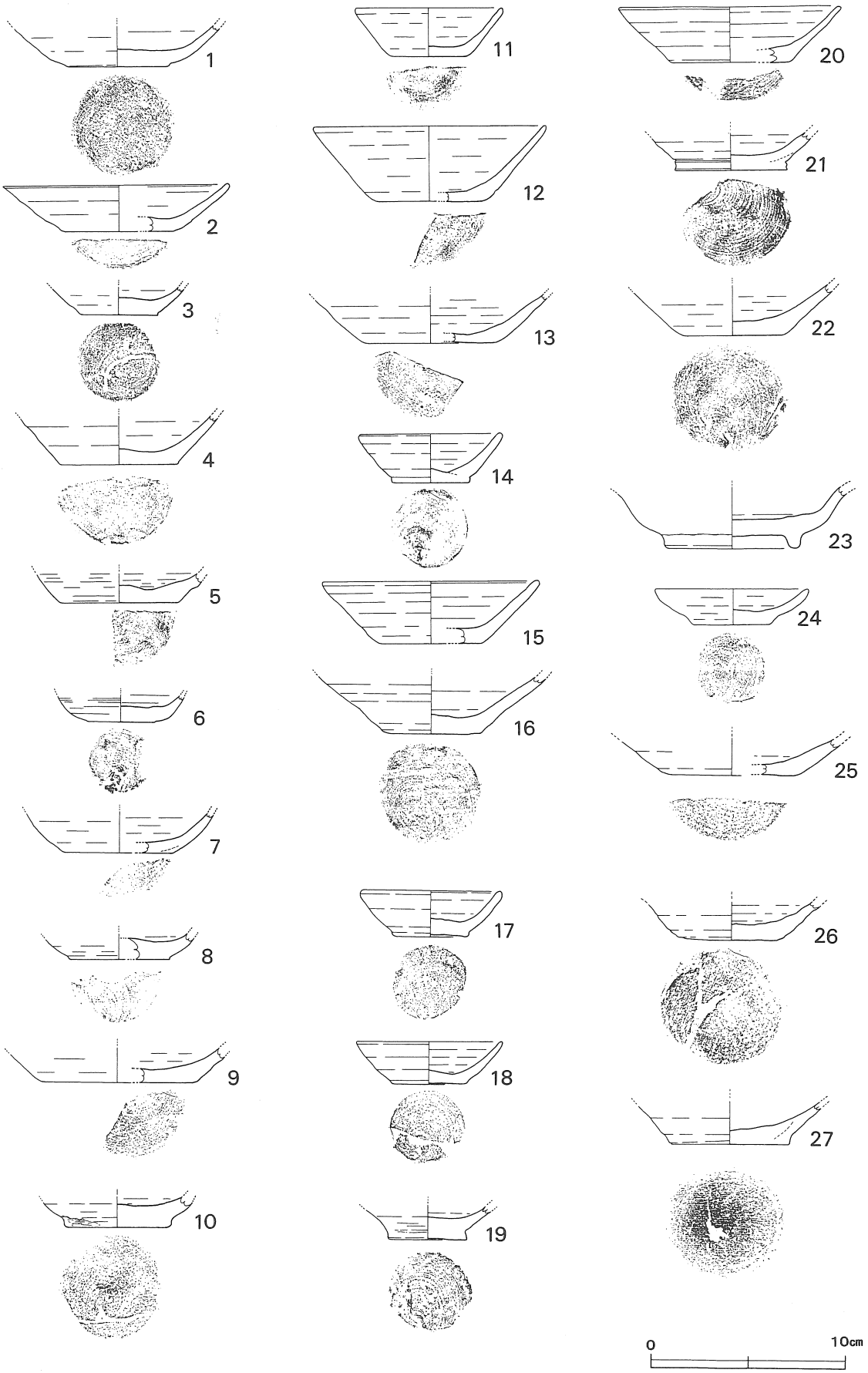
P1009は標高8.91ｍの調査面でSK26を切った状態で検出した。径40㎝の円形プランを呈し、深さは33㎝を測る。2層に分層可能な覆土からはビニール袋半分弱の中世土師器が出土しているが、図化に耐えるものは少なく111-20に示す1点のみである。12世紀前後のものと思われ遺構の時期を示すものであろう。なお、この遺構はP1004、P1005、P1008、P1010と掘立柱建物跡を成す可能性がある。

P1014は標高8.91ｍの地山面でP1010を切った状態で検出した。遺構の一部が調査区外に及んでいるため、規模などについては不明な点が多いが、深さは遺構西寄りの最下底で70㎝を測る。3層に分層可能な覆土からはビニール袋半分弱の中世土師器片など出土している。このうち実測可能なものを111-21～111-23に図示している。111-23は龍泉窯青磁の皿で15世紀の所産であり、遺構の時期を示すと推定できる。

P1017は標高8.82ｍの調査面で検出した。他の遺構に切られており、全容は不明だがN-76°-E方向に細長い平面プランを呈していたと思われ、深さは19㎝を測り底は平坦である。覆土からは少量の中世



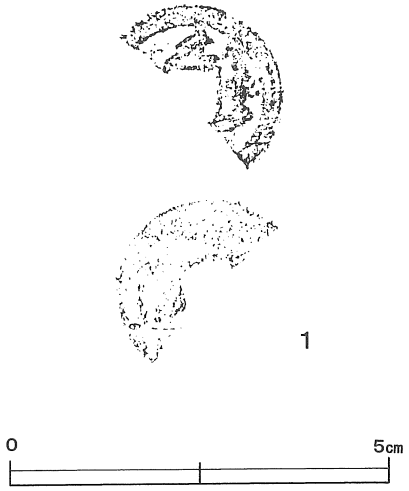
第110図　主要ピット実測図（1：30）



第111図　主要ピット出土土師器等実測図（1：3）

土師器が出土しており、残存状態の良いものを111-24に図示しているが、他に112-1に示す古銭が出土している。1078年から鋳造される宋銭の「元豊通寶」と考えられ、遺構の時期はこれに近いと思われる。

P1101は標高8.93m前後の地山面で検出した。N-16°-Wに軸をとるいびつな楕円形を呈しており、検出規模は長径85cm、短径47cm、深さ42cmを測る。覆土からはごく少量ながら中世土師器が出土しているため、遺構の時期も中世と考えられる。なお、出土遺物で図化可能なものは111-25に図示した1点のみである。



第112図　P1017出土古銭拓影（1：1）

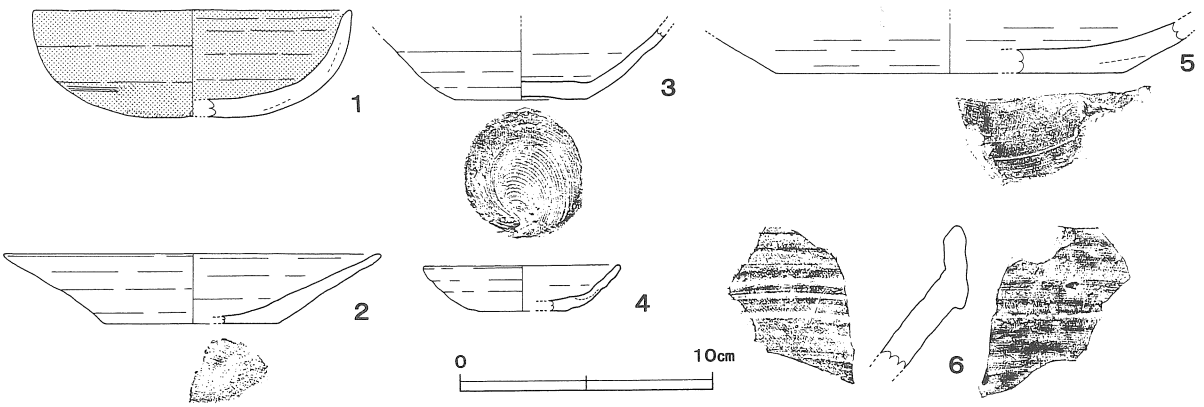
P1301は標高8.40mの調査面において、SD06を切った状態で検出した。平面プランは隅が丸まった方形を呈しており、検出規模は長辺60cm、短辺45cm、深さ27cmを測る。底は丸味を帯び、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土からは111-26・111-27に示したもののほかにも中世土師器が少量出土しており、遺構の時期を示すと考えられる。

溝状遺構

SD01（第113図）

1Grから3Grにかけて検出したSD01は、上幅が推定7.8mを測る大溝である。ごく一部の調査にとどまったがN-43°-W方向に軸をとると思われる。精査には至っていないが深さは100cmを測り、標高7.8m付近でゆるく凹面状を呈する底に至る。また、側壁の立ち上がりが比較的緩やかであることから、この溝は自然流路の可能性もある。

覆土は大きく3層観察でき、その状況からこの溝は自然埋没したのではないかと思われる。遺物についてはコンテナ半分弱の土器片が出土している。これらの大半は中世土師器であるが、土師器、須恵器、陶磁器も僅かに混ざっている。いずれも小片のため、実測に耐える遺物は図示した6点を数えるに過ぎない。上限遺物は113-1に示す土師器の坏であり、古墳時代後期のものと考えられる。また、下限遺物は113-6に示す備前焼であり15世紀の所産である。この溝の時期はこの下限遺物に準拠すると考えられる。



第113図　SD01出土土器等実測図（1：3）

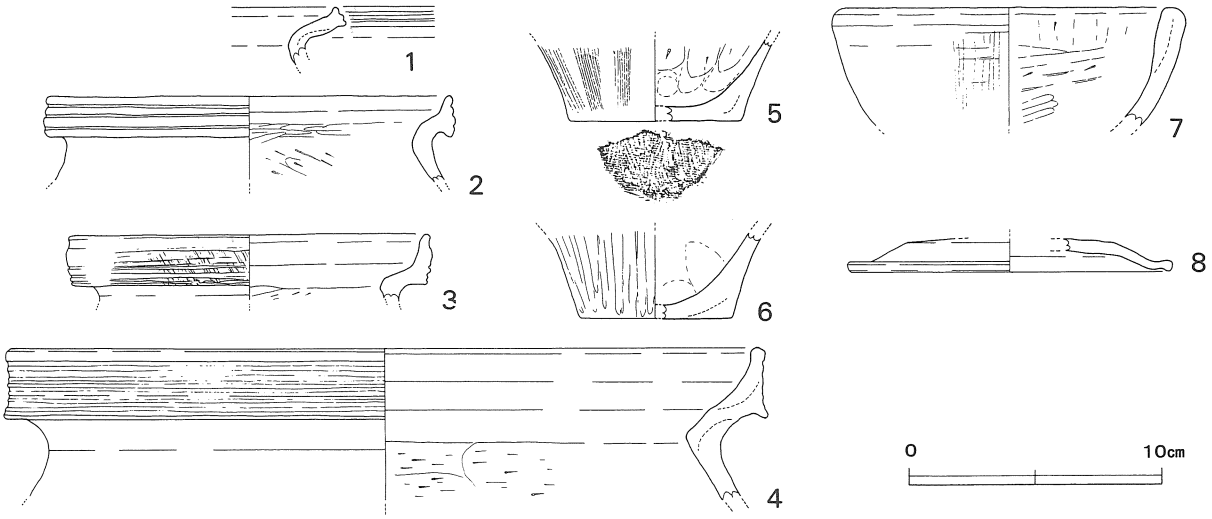
SD02（第114図）

3Grから4GrにかけてSD02を検出した。上幅が推定で3.3mを測り、N-62°-W方向に軸をとると考えられる。深さは126cmを測り、底は標高7.32mである。調査区狭隘のため遺構軸に直交する断面図を得られなかったが、本来は漏斗状を呈するようで、標高7.70m付近で垂直方向に落ち込むようである。

また、調査区南壁で断面を観察すると覆土が4層確認でき、掘り返しも行われたようである。

遺物についてはビニール袋半分程度の土器片が出土した。弥生土器片が大半を占めていおり、これらを114-1～114-7に図示した。弥生時代後期のものが見受けられ、遺構の時期を示すと考えられる。

なお、114-8はSK06などからの混入品と思われる。

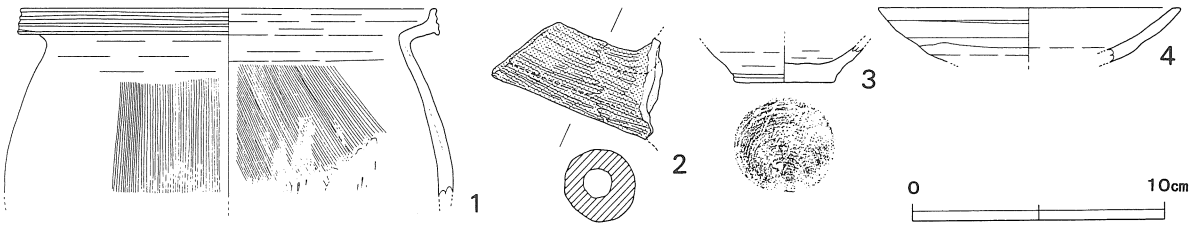


第114図　SD02出土土器実測図（1：3）

SD04（第115・116図）

6Grから10GrにかけてSD04は上幅が推定で9.5mを測る大溝である。完掘すると調査区壁が崩壊する危険があったため、壁沿いにサブトレンチを設定し底の検出を試みた。しかし、標高7.60mまで掘り下げた時点で掘削が困難になったため、ここまでの調査にとどめ底の検出は見送った。この大溝の西肩から推測すると、軸方向はN-88°-Wと考えられる。

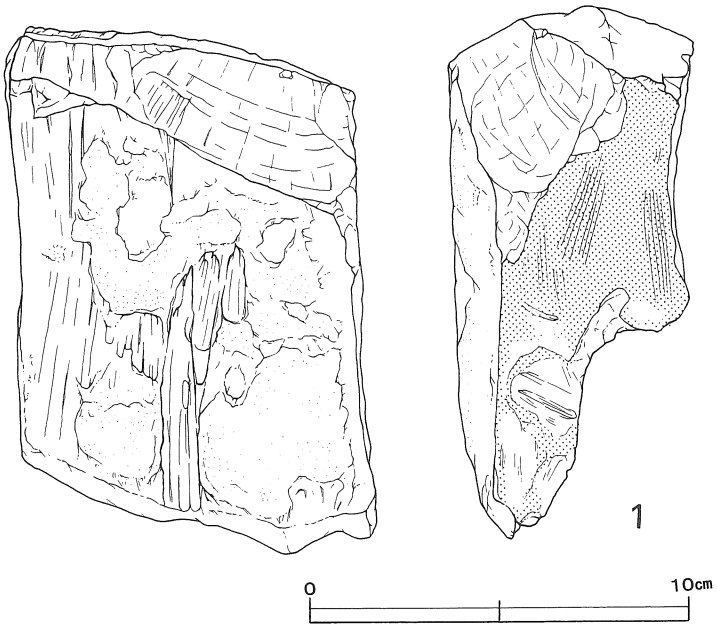
なお、遺構検出時には見過ごしてしまったが、調査区壁の断面観察時に7ライン付近で「V」字状に切り込まれた溝が確認できた。上幅は2.3m程度と考えられ、標高7.45m付近に底を有するようである。調査区北壁と南壁において、それぞれで観察される底の中心点を結ぶとN-57°-W方向になることから、これがこの溝の軸方向と推定できる。なお、この溝は弥生時代中期の遺物を出土するため、同時期の遺構と考えられる。また、前述の大溝の推定幅は、この溝の幅を考慮していないため、2m程度狭まる可能性がある。



第115図　SD04出土土器等実測図（1：3）

掘削した箇所からは、ビニール袋半分程度と規模の割には少量の土器片が出土している。これらは弥生土器、土師器、陶磁器であり実測可能なものを115-1～115-4に図示した。上限遺物は115-4に示す17世紀の唐津焼であることから、この大溝もこの頃に機能していたと思われる。

なお、116-1に示す石製品も1点出土している。泥岩製の砥石であり、1面に研面を残している。

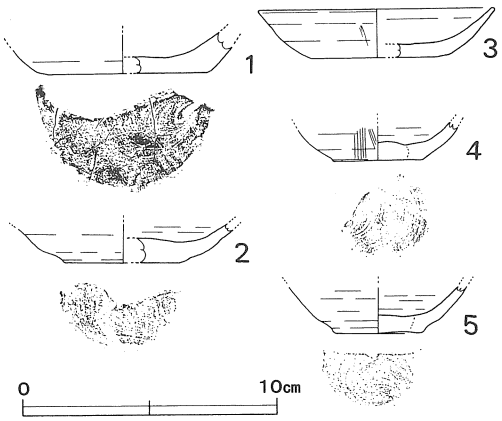


第116図　SD04出土石製品実測図（1：2）

SD05（第117図）

11Grから12Grにかけて検出したSD05は、N-68°-W方向に軸をとる。上幅が1m前後で深さは42cmを測り、底は比較的平坦で標高は8.40mである。

7層に分層可能な覆土から、少量ながら中世土師器が出土している。これらのうち図化可能なものは117-1～117-5に図示している。遺構の時期も中世と考えられるが、SK24を切っているため、これより新しいものと推定できる。



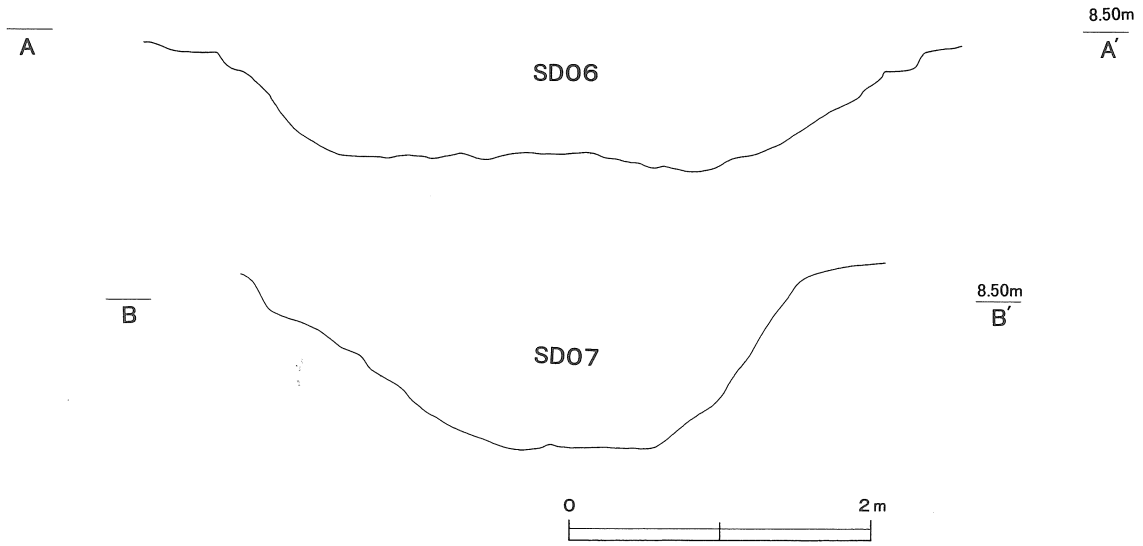
第117図　SD05出土土師器実測図（1：3）

SD06（第118・119図）

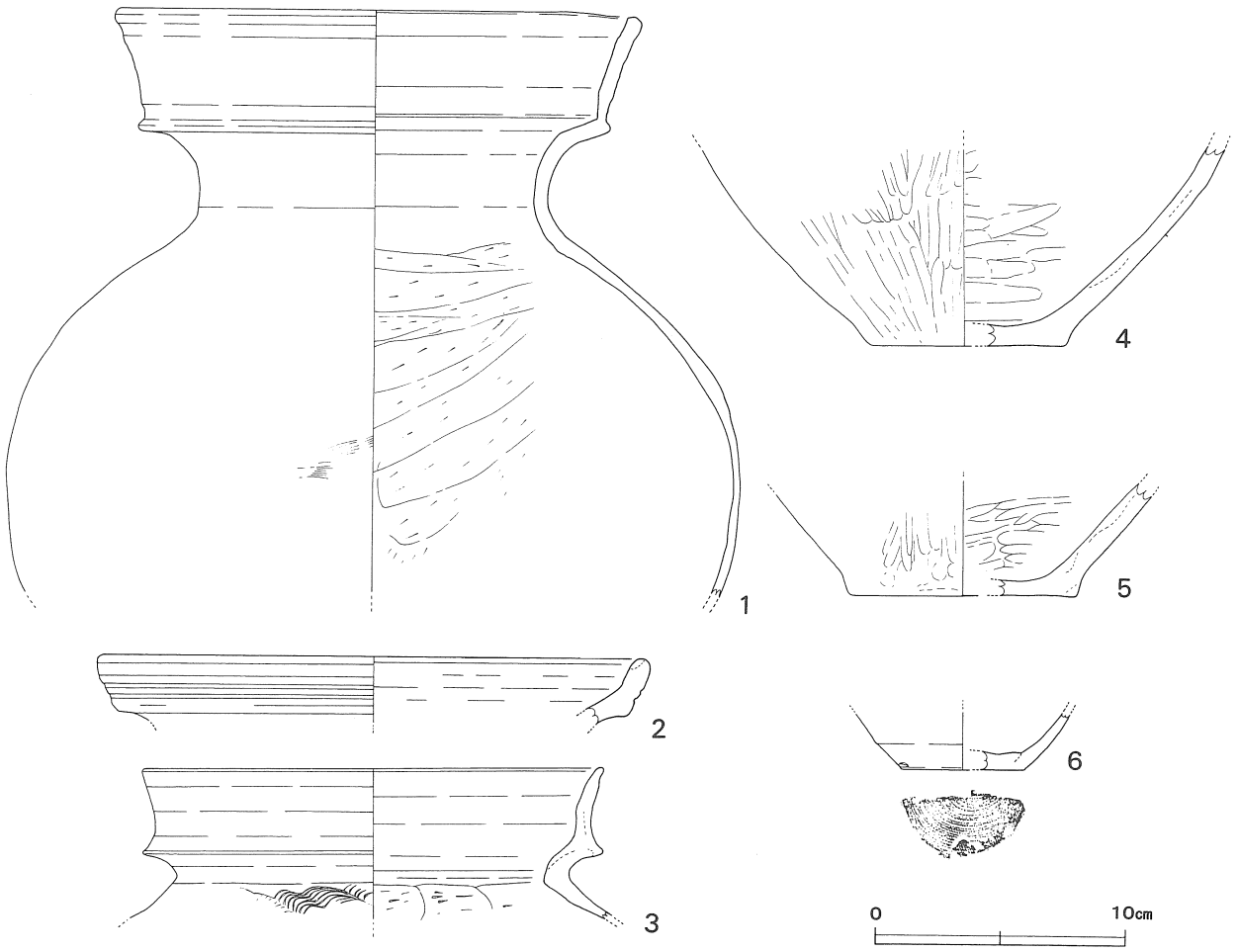
12Grから16Grにかけての標高8.66mから8.92mの調査面でSD06を確認した。調査区が狭く、ごく一部の調査にとどまったが、幅は4.3m程度と推定され、N-85°-E方向に軸をとると考えられる。しかし、調査区南壁断面を観察すると、南壁がこの遺構と斜めに交差していることを勘案しても、推定幅を上回る数値になるため、この付近でやや東に屈曲している可能性も指摘できる。底の標高は7.65mで、概ね平坦であるが、第118図のエレベーション図で示すように、底の中央付近が僅かに高まっている。また、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

覆土は調査区南壁で10層確認できるが、大きくは第1層、第2層、第3層の3層で捉えられる。これらは人工的な埋土というよりは、自然堆積によるものと思われる。

調査区壁が崩壊する危険があり、ごく一部の掘削にとどめたため出土遺物は少なく、ビニール袋半分に満たない。これらの多くは弥生土器あるいはこれに続く土師器であるが、中層の第2層以上では、土師器、須恵器が混ざって出土している。119-1は弥生時代終末から古墳時代初頭頃の壷であり、SD06が廃棄され自然堆積が始まった時期を示すものと思われる。また、土師器、須恵器が中層以上で出土することから、中世までには完全に埋没したものと考えられる。



第118図　SD06・SD07エレベーション図（1：50）



第119図　SD06出土弥生土器等実測図（1：3）

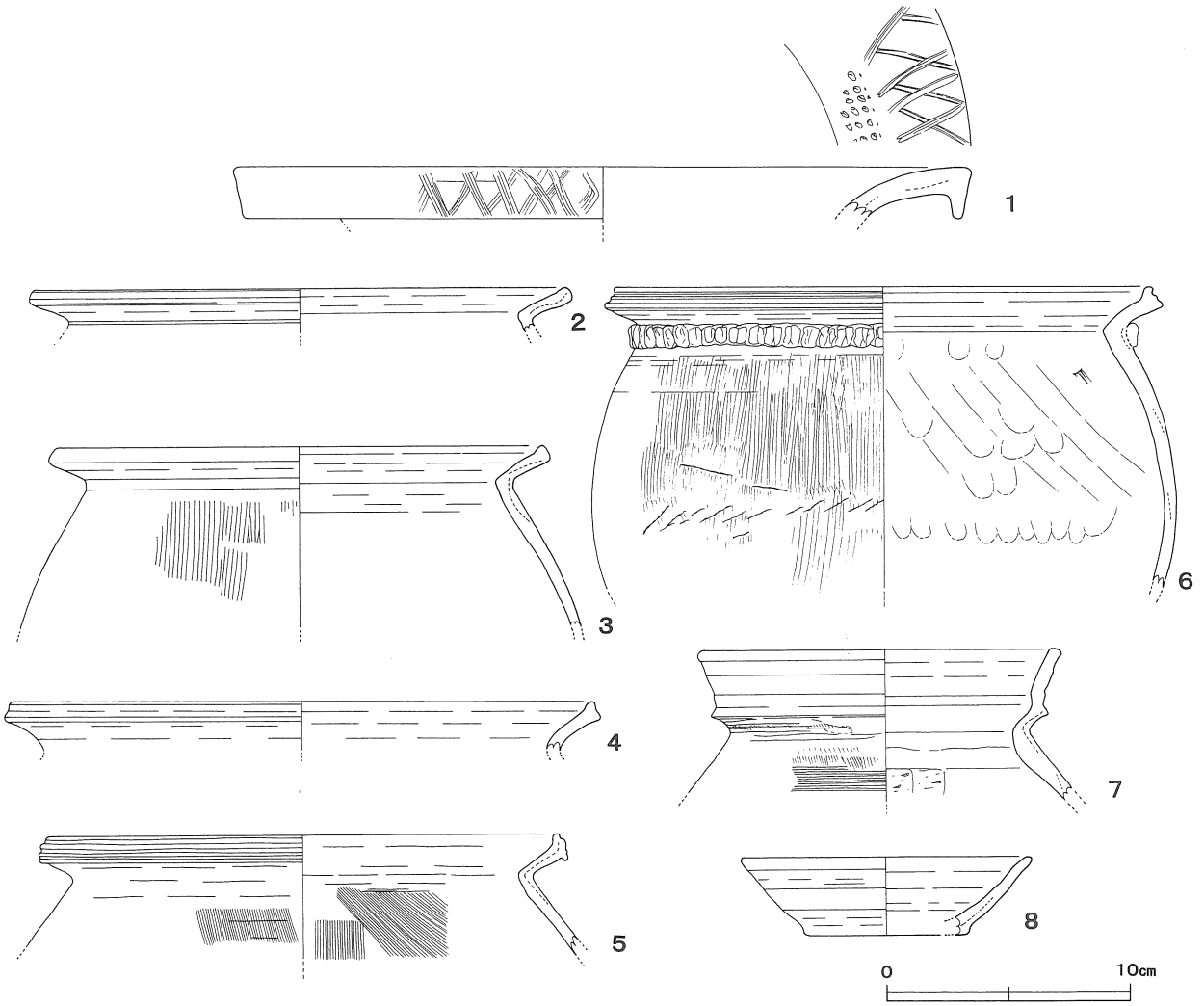
SD07（第118・120図）

15Grから17Grにかけての標高8.58mから8.90mの調査面においてSD07を検出した。隣接するSD06と同様にN-85°-E方向に軸をとり、幅も4.3mと推定される。底の標高は7.50mで、断面は「U」字状を呈する。側壁の立ち上がりは北側はやや急であるが、南側は比較的緩やかである。

覆土は調査区南壁で8層に細分したが、大きくは第1層、第2層、第4層の3層で捉えられ、その堆積状況などから、この遺構は自然埋没したものと思われる。

この遺構についてもSD06と同様にごく一部の掘削にとどめたため、出土遺物の量は少ない。これらの大半は弥生土器であるが、土師器も数点混ざっている。120-1～120-6は中期中葉から後葉にかけての弥生土器であり、SD07掘削時期を示す可能性がある。また、120-7は弥生時代終末から古墳時代初頭のものであり、SD07廃棄時期を示す可能性がある。120-8は第1層から出土しているが、SD07の覆土上に築かれたピットから混入したものであろう。

SD06とSD07は規模、軸方向、廃棄時期などで共通性が認められるが、切り合い関係については上部が削平されているため確認できなかった。したがって、これらが同時に機能していたのか、あるいは一方埋没後、他方を新たに掘削したかは不明である。



第120図　SD07出土弥生土器等実測図（1：3）

2区遺構外の出土遺物

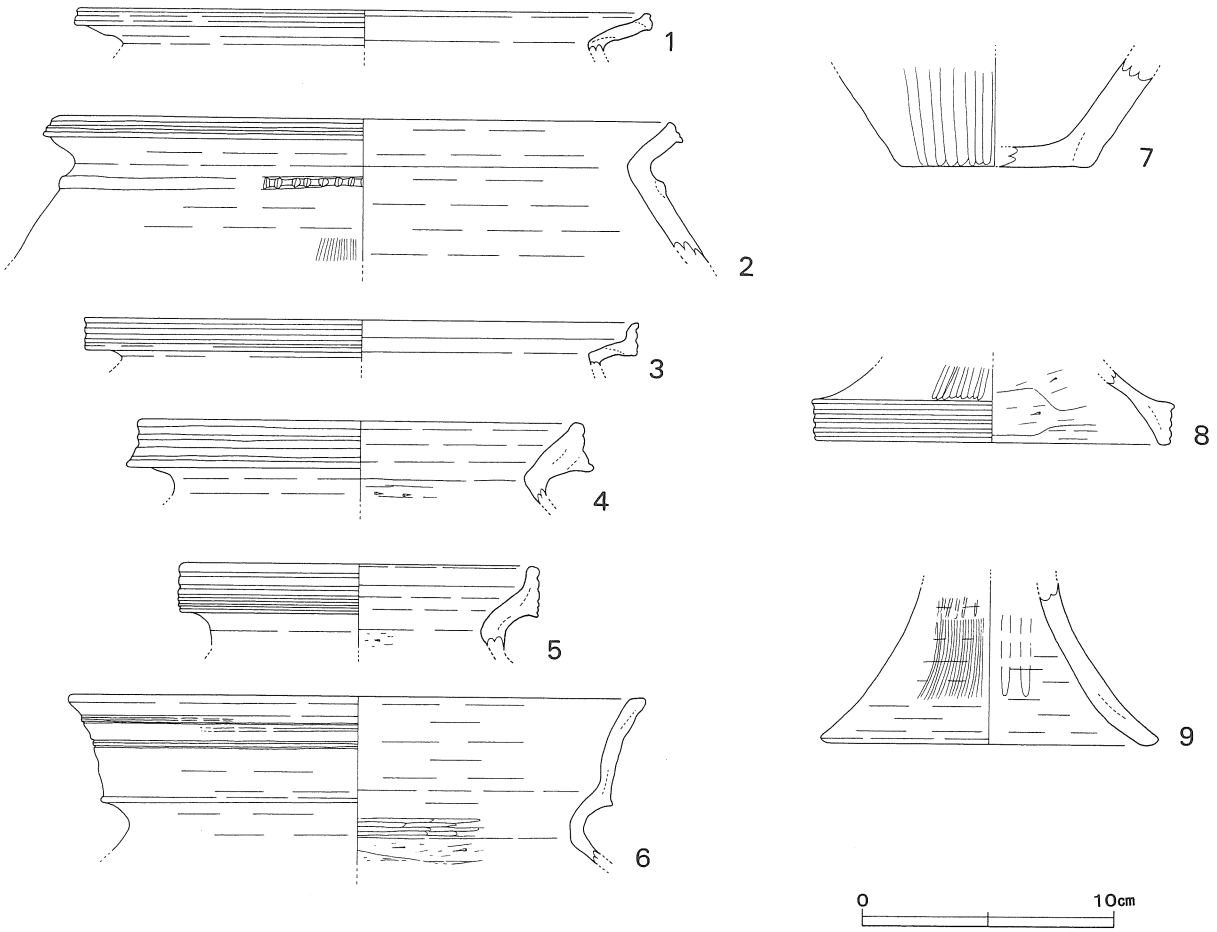
2区では遺構外からコンテナ2箱分程度の出土遺物があった。中世土師器片がその大半を占めており、その他の弥生土器、須恵器などはごく少量の出土にとどまっている。1区と比較し出土量は減少するが、土器の種類とその比率は似通っている。

なお、図示にあたっては残存状態の良いものを中心に取り上げており、一部は割愛している。

弥生土器等（第121図）

弥生土器は中期後葉から終末頃のものが出土するが、中期後葉のものが比較的多い。2区では弥生時代の遺構は少なかったが、SD07などの溝状遺構において弥生土器を出土するものも存在するため、本来はこれらに伴うものであったと思われる。

121-1～121-7には甕を示した。121-1は口縁端部を若干上方に拡張し、端面に1条の凹線文を巡らせている。松本Ⅳ-1期に相当するものであろう。121-2は口縁端部を上下に若干引き出し端柄面に2条の凹線文を巡らす。また、頸部下寄りに突帯文を貼り付け、刻目文を施している。松本Ⅳ-2に相当するであろう。121-3の口縁端部は上方に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲し内面には稜をなしている。頸部以下の内面調整は不明瞭であるが、松本Ⅳ-2期のものと思われる。このほか121-7の底部片も中期のものと考えられ、残りの2点は後期と終末頃のものである。121-5は口縁部外面に5条の平行沈線が巡り、頸部以下の内面にはケズリ調整が確認できる。草田2期頃のものと



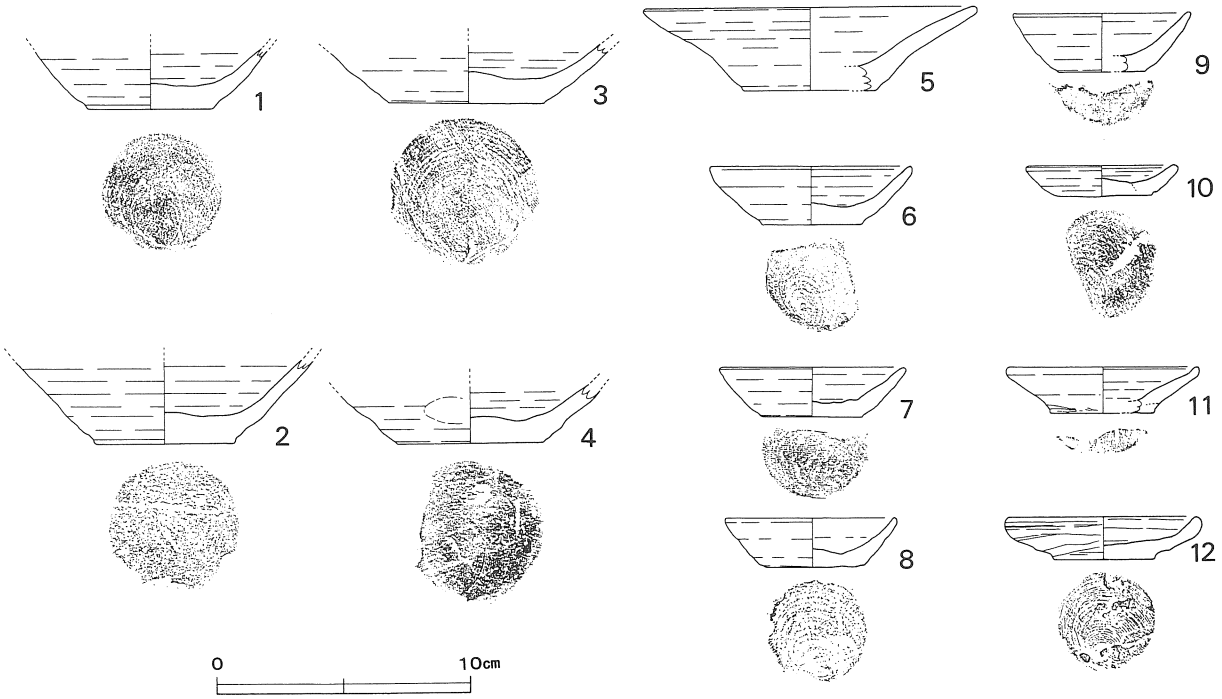
第121図　2区遺構外出土弥生土器等実測図（1：3）

考えられる。また、121-6は口縁部の端部をやや横方向に引き出し、端部に平坦面を作っている。草田6期頃のものであろう。

121-8・121-9には、器台と高坏の脚部を取り上げた。前者は裾部外面に4条の平行沈線を巡らせ、内面にはケズリ調整が施されている。草田2期に相当するものであろう。後者は器壁が「ハ」字状に開き、裾近くで反り返らず直線的に脚端に至っている。弥生時代後期後半のものと考えられる。

土師器（第122図）

出土した土師器の大半は中世土師器でありそれ以前のものは極端に少ない。よって、残存状態の比較的良い実測遺物を選別した際に、中世土師器のみを抽出する結果となった。



第122図　2区遺構外出土土師器実測図（1：3）

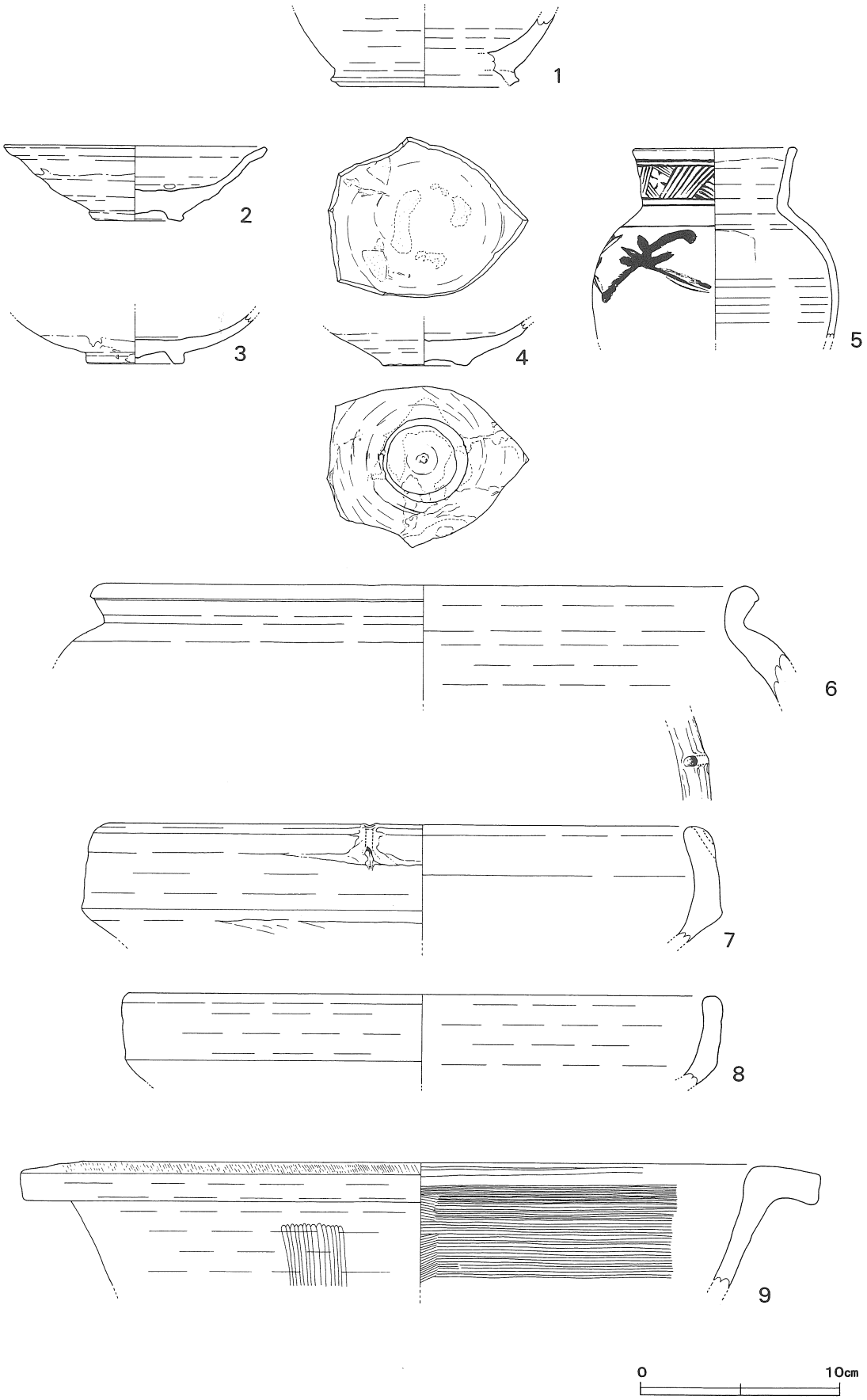
122-1～122-4には坏と思われる底部片を取り上げた。121-1はの器壁は底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がるが、122-2～122-4については直線的または外反気味に開口するようである。また、底部を僅かに絞るものが多い。

122-5は皿であり器壁が外反して大きく開口している。122-6～122-12は小皿である。いずれも12世紀から13世紀の所産と思われる。

須恵器・陶磁器等（第123図）

須恵器・陶磁器等も少量出土しているため、残存状態の良いものについて以下に報告する。

123-1は須恵器の壷である。底部に「ハ」字状に開く低い高台を貼り付け、器壁は内湾して立ち上がる。8世紀の所産と考えられる。123-2は備前焼の壷で、16世紀のものである。123-3は皿であるが、詳細は不明である。123-4は時期は不明であるが、唐津系の皿である。123-5は唐津焼きの皿で17世紀の所産である。123-5は伊万里焼の壷である。本来は蓋が付くと思われる。123-6は備前焼であり、123-7・123-8は時期は不明だが焙烙である。123-9の口縁部片は器種不明であるが、瓦質土器である。



第123図　2区遺構外出土陶磁器等実測図（1：3）

田畑遺跡３区

3. 3区の調査結果

調査区の概要と遺構配置（第124・125図）

3区は2区の西に位置した細長い調査区である。南に市浅柄古志線が沿い、北に畑が隣接しているため、この調査区においても、調査対象地の境界から50㎝程度のゆとりをとって調査を実施したが、大型で深い遺構については、完掘を断念したものがある。調査区の規模は長さ95m、幅2m～3mを測り、面積は約220m²である。

なお、3区の西寄りの市道をまたがった箇所には、1988年に範囲確認調査が行われた際に、第1トレンチと第2トレンチが配置されている。また、3区と4区の間に北西－南東方向に伸びる水路が掘削された1972年に、市道より南側で遺構や遺物が確認されたとみられる。

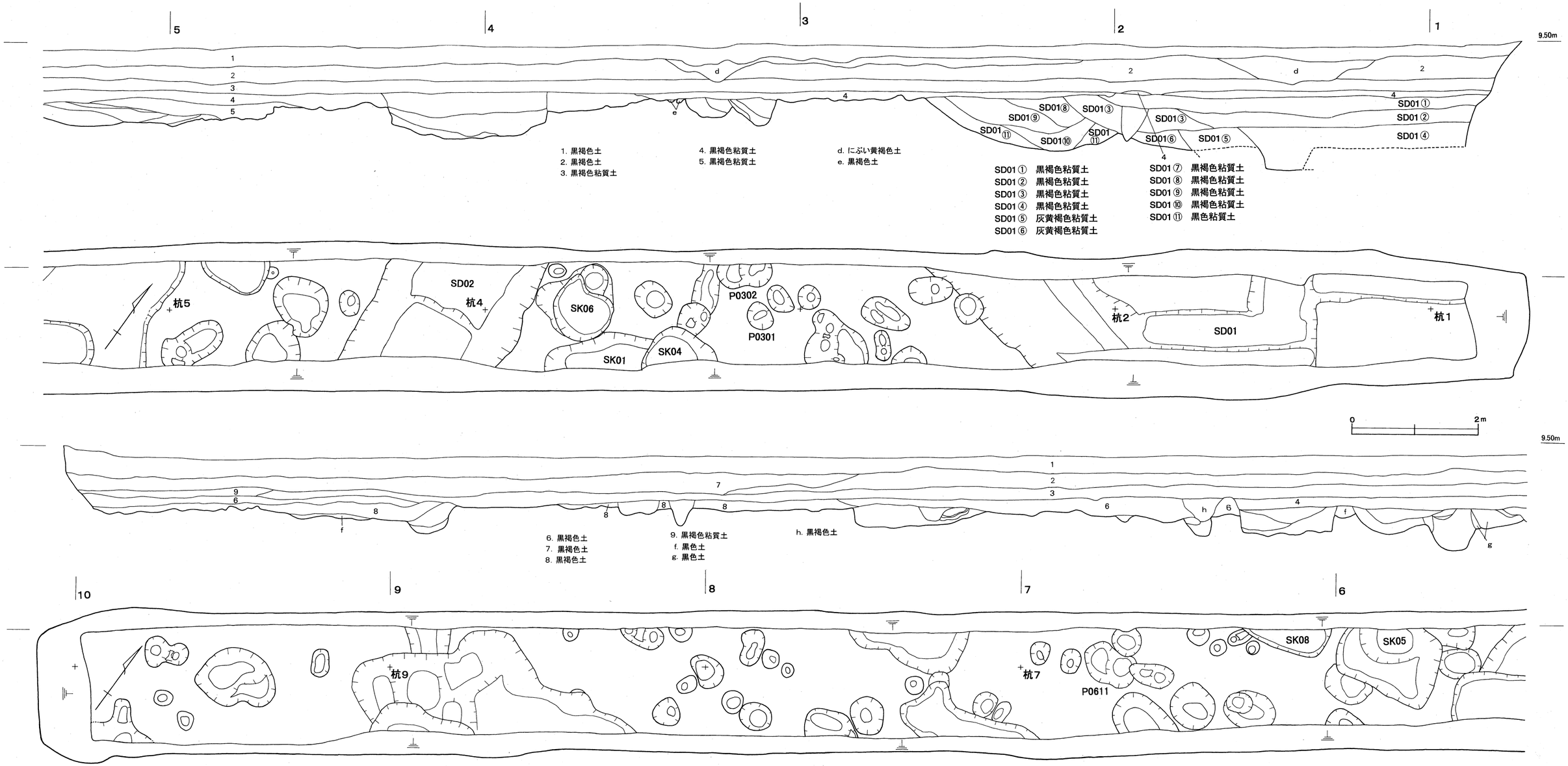
調査にあたっては、市道から民家への進入路部分を残し、まず、重機により表土掘削を行った後に、調査区内に5m間隔で一列に基準杭を設置した。その後、遺物包含層以下について手掘りで掘削を行ったところ、標高9.00m～8.80m付近で地山面に至ると同時に遺構が検出できた。よって、この面を調査面として各遺構の調査を行い、この成果を田畑遺跡3区遺構配置図にまとめた。また、調査区北壁を土層堆積状況把握のために分層を行い、調査区断面図を作成したため、この成果もあわせて示した。

なお、3区の調査に用いた基準杭の座標は表3に示すとおりである。

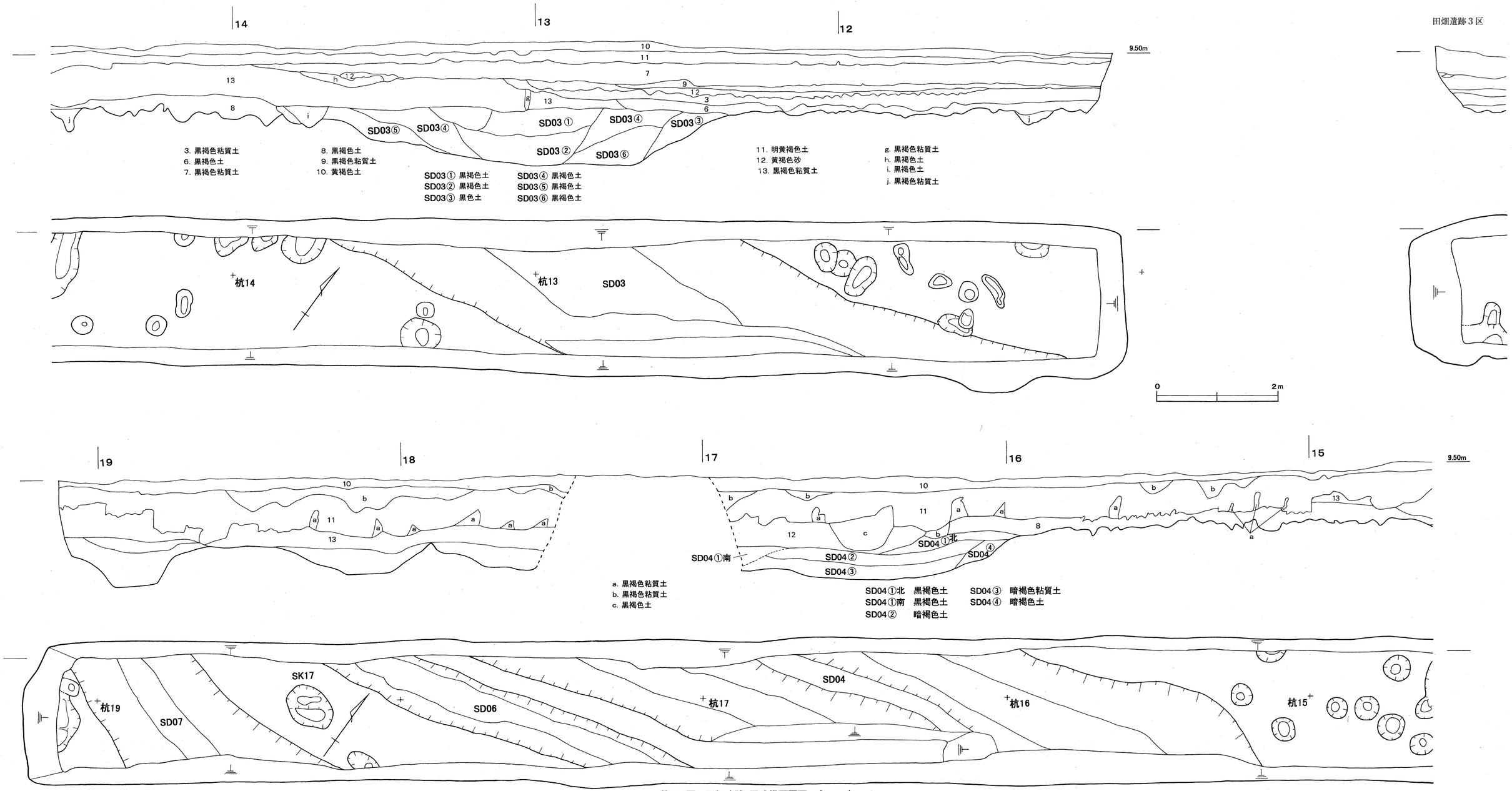
杭名称	X座標	Y座標
杭 1	-73291.192	52275.676
杭 2	-73294.156	52271.649
杭 3	-73297.119	52267.622
杭 4	-73300.083	52263.595
杭 5	-73303.047	52259.568
杭 6	-73306.011	52255.541
杭 7	-73308.975	52251.515
杭 8	-73311.939	52247.488
杭 9	-73314.903	52243.461
杭10	-73317.867	52239.434

杭名称	X座標	Y座標
杭11	-73320.831	52235.407
杭12	-73323.795	52231.380
杭13	-73326.758	52227.354
杭14	-73329.722	52223.327
杭15	-73332.686	52219.300
杭16	-73335.650	52215.273
杭17	-73338.614	52211.246
杭18	-73341.578	52207.219
杭19	-73344.542	52203.193

表３　田畑遺跡3区基準杭座標一覧



第124図　田畑遺跡3区遺構配置図1（1：50）



第125図　田畑遺跡3区遺構配置図2（1：50）

3区の遺構と遺物

3区も遺構の密度は高く多数の遺構を検出している。この区についても、残存状態の良い遺物を伴う遺構を中心に、土坑、ピット、溝状遺構の順に以下報告する。

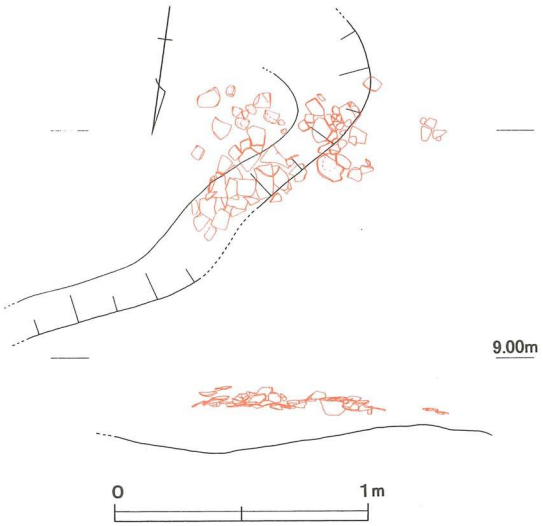
土坑

SK01（第126～128図）

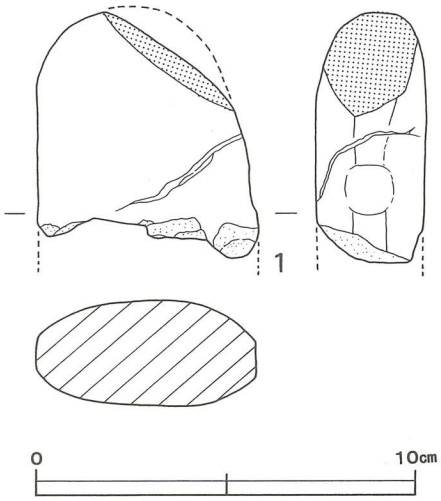
3Grの調査区南壁際標高8.74mの調査面において、SK04に切られた状態のSK01を検出した。遺構の一部が調査区外に及んでおり、部分的な調査にとどまっている。このため、平面プランや規模などについては不明な点が多く残ったが、深さは11cmの浅い遺構である。

覆土からは土器片が多数出土したが、ほとんど127-1・127-2に図示した弥生土器の甕に復元できた。中期中葉のものと考えられ、遺構の時期を示すものであろう。

なお、128-1に図示した砂岩製の石製品も1点出土している。用途は不明であるが、縁の一部に研磨面が残っている。



第126図　SK01実測図（1：30）

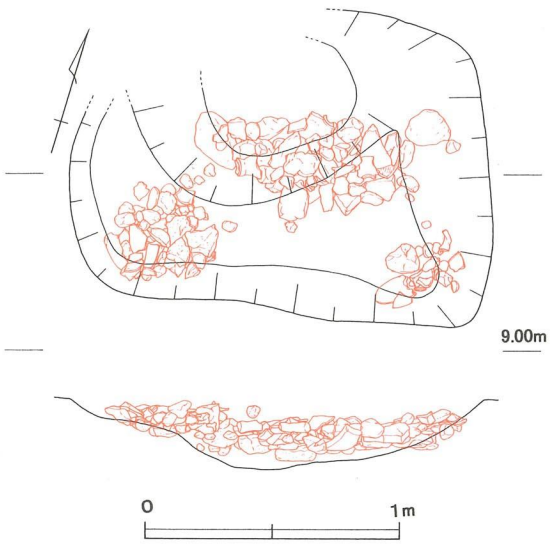


第128図　SK01出土石製品実測図（1：2）

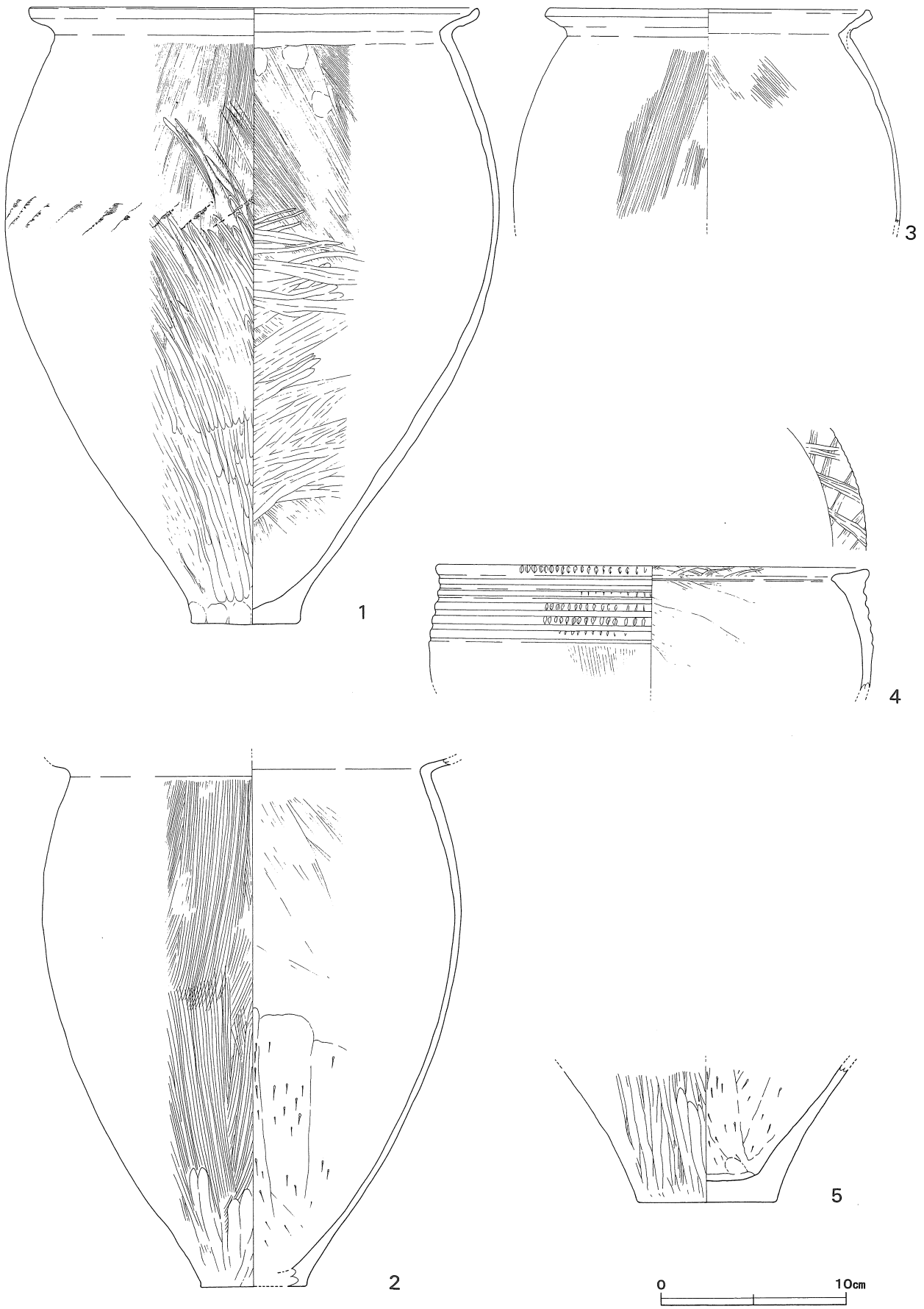
SK05（第129・130図）

5Grの調査区北壁際標高8.81mの調査面で、周辺の遺構を切った状態でSK05を検出した。一部分は調査区外に及んでいるものの、平面プランは165cm×120cmの隅丸方形法を呈していると思われる。遺構北寄りで最も落ち込みこの箇所の深さは28cmを測るが、南寄りは一段高くなっている。

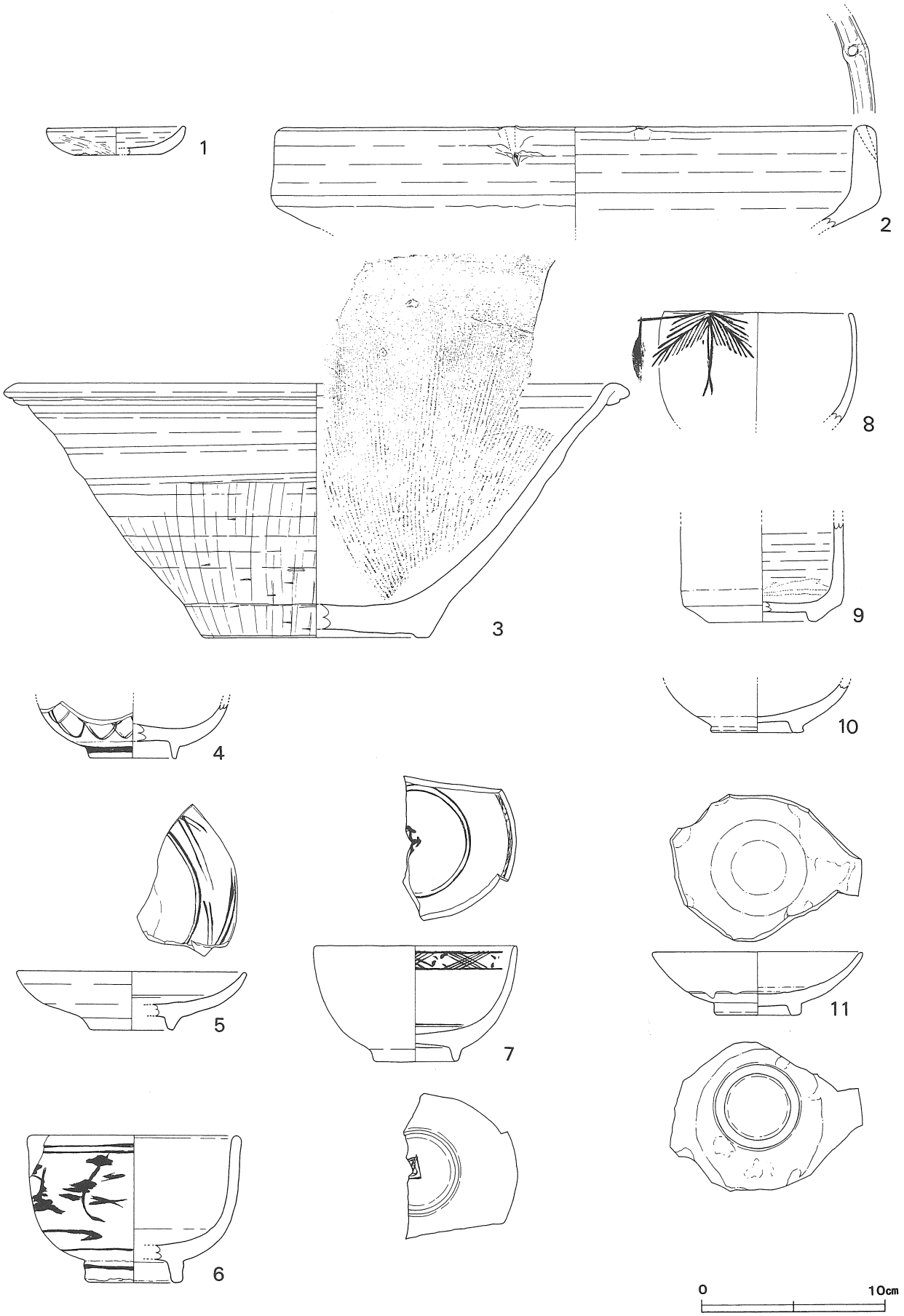
覆土からは130-1～130-11に示した陶磁器などが出土した。時期が判然としないものも混ざるが、17世紀から18世紀頃の所産のものが含まれているため、遺構の時期はこれ以降であろう。



第129図　SK05実測図（1：30）



第127図　SK01出土弥生土器実測図（1：3）

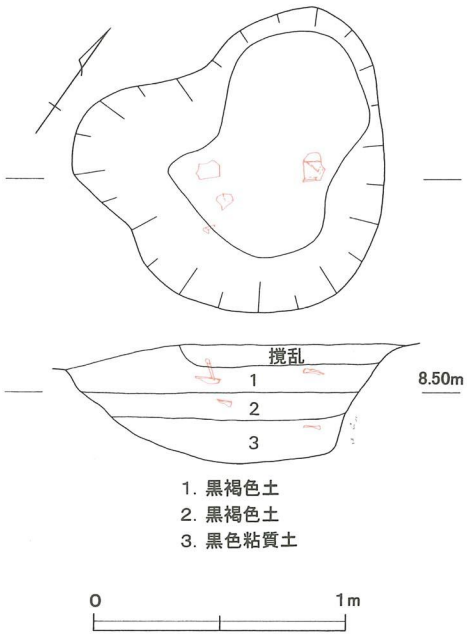


第130図　SK05出土陶磁器等実測図（1：3）

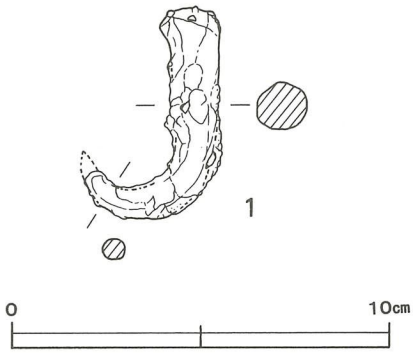
SK06（第131・132図）

3Grの標高8.69ｍの地山面で確認したSK06はいびつな平面プランを呈しており、検出規模は長さ123㎝、幅120、深さ48㎝を測る。坑底は平坦で、側壁の立ち上がりは東では急であるが、西では比較的緩やかである。

4層観察できる覆土からは少量の土器片のほか、132-1に示した鉄製品が出土した。用途は不明であるが鉤に曲がっており、何かをひっかける道具の一部であろう。



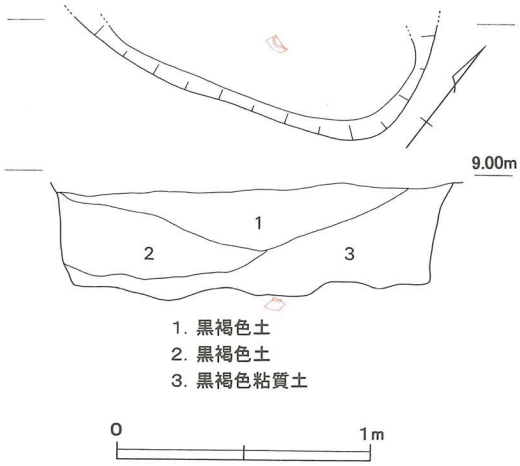
第131図　SK06実測図（1：30）



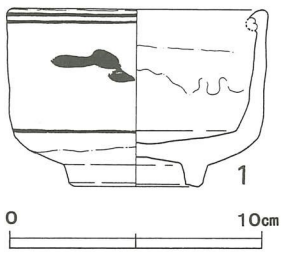
第132図　SK06出土鉄製品実測図（1：2）

SK08（第133・134図）

6Grの調査区北壁際標高8.97ｍの地山面でSK08を確認した。ごく一部の調査にとどまり、規模など不明な点が多いものの、隣りに位置するSK05と覆土が酷似していることから、何らかの関連を持つと思われる。しかし、深さについてはSK08が42㎝を測り深い。覆土は3層確認でき、ここから134-1に示す陶器や土器片が少量出土している。



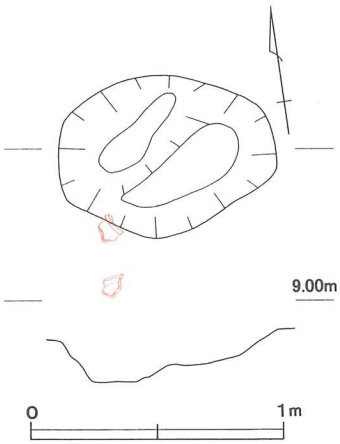
第133図　SK08実測図（1：30）



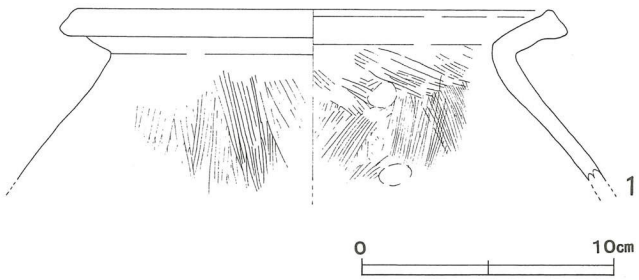
第134図　SK08出土陶器実測図（1：3）

SK17（第135・136図）

18Grの標高8.89ｍの地山面でSK17を検出した。平面プランはN-68°-W方向に長い楕円形を呈しており、検出規模は長径86㎝、短径65㎝であり、深さは遺構北西寄りの最下底で21㎝である。また、遺構北寄りで段を有しており、側壁の立ち上がりは



第135図　SK17実測図（1：30）



第136図　SK17出土弥生土器実測図（1：3）

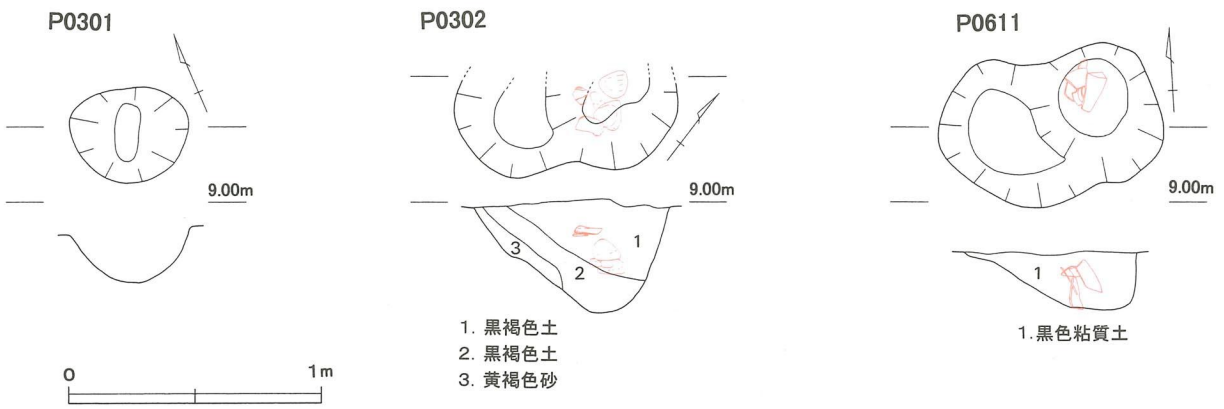
やや緩やかである。

覆土からは136-1に示す弥生土器が1点のみ出土した。口縁端部が肥厚し頸部以下の内面にはハケ調整が観察できる。中期のものであり、遺構の時期を示す可能性はある。

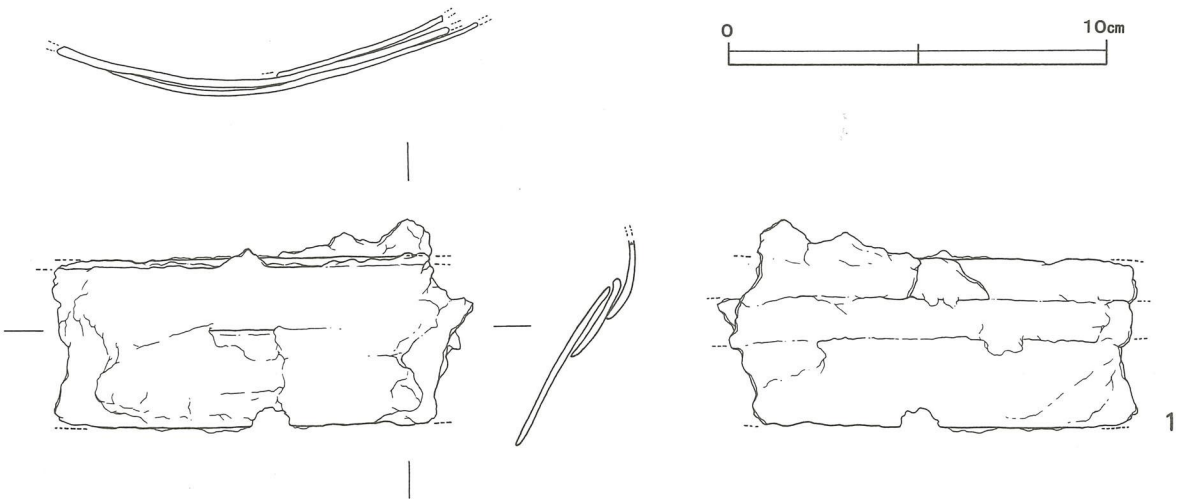
ピット（第137～139図）

P0301は標高8.90ｍの地山面で検出した。平面プランは不整な楕円形で検出規模は長径47㎝、短径38㎝、深さ22㎝を測る。坑底は凹面状を呈しており、側壁の立ち上がりは比較的緩やかである。覆土からは138-1に示す中期の弥生土器片が1点出土しているが、遺構の時期を示すかどうかは不明である。

P0302は調査区北壁際標高8.98ｍの調査面において、他のピットを切った状態で検出した。一部の調査にとどまったがN-43°-E方向に長く、検出規模は長さ88㎝、幅35㎝以上を測る。遺構東寄りで最も落ち込み、この箇所の深さは42㎝である。側壁の立ち上がりは東側で急であるが、西側は緩やかである。3層認められる覆土からは139-1に示す鉄製品が1点のみ出土している。薄い板状のものが3枚重なっていることが確認でき、兜か鎧の一部と思われるが、詳細は不明である。



第137図　主要ピット実測図（1：30）



第139図　P0302出土鉄製品実測図（1：2）